

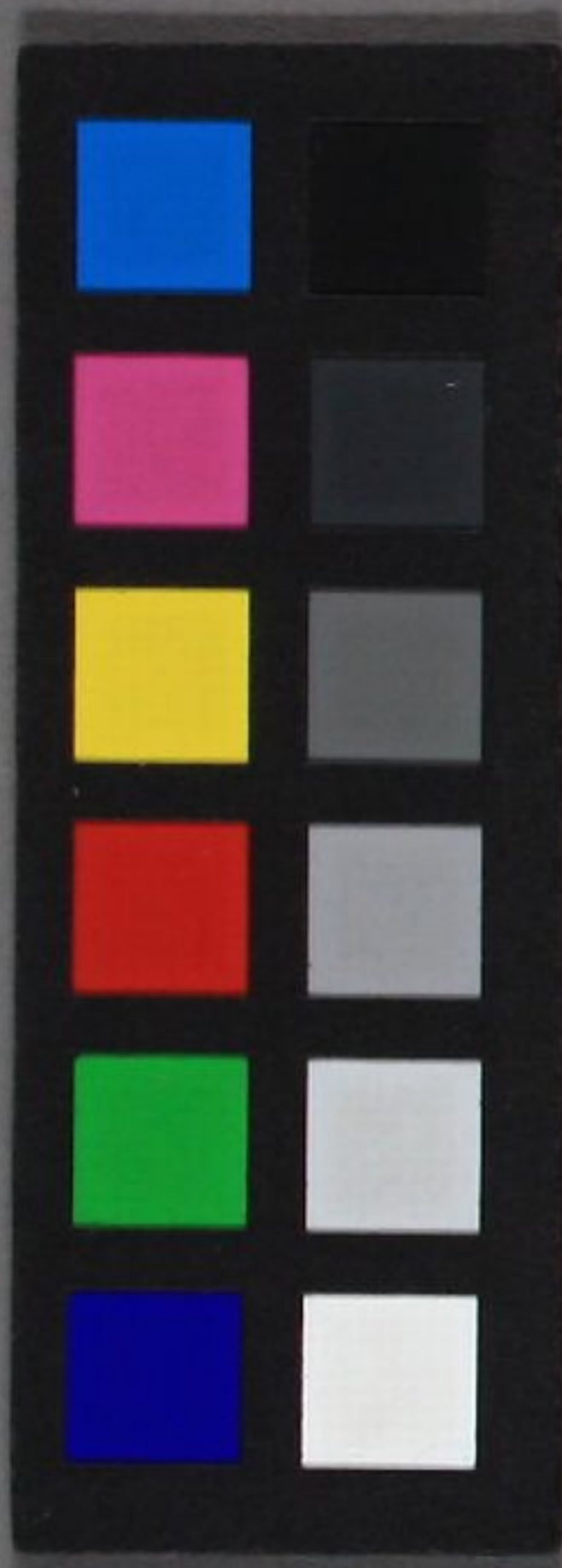
名家文庫第一編



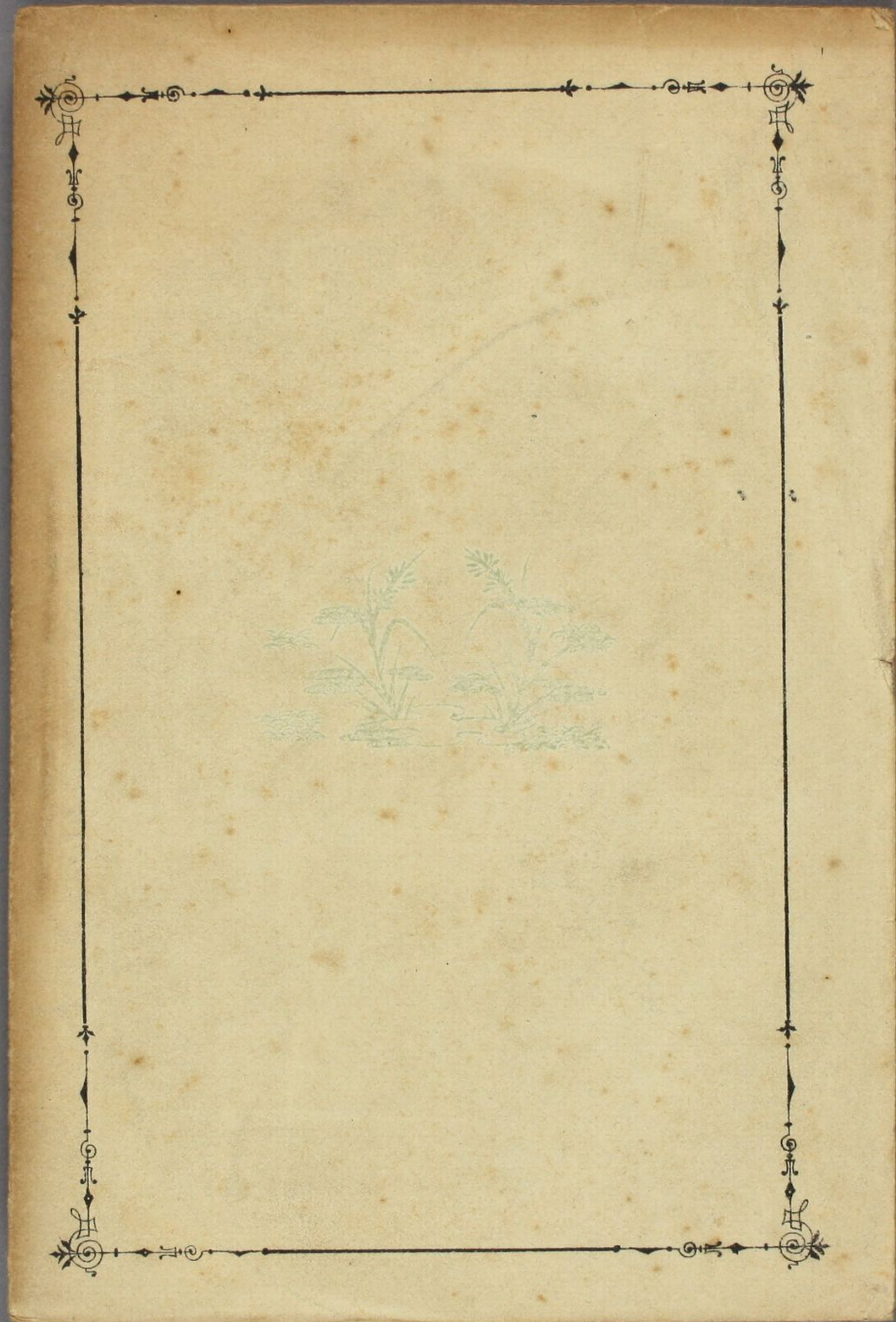
美文
散文

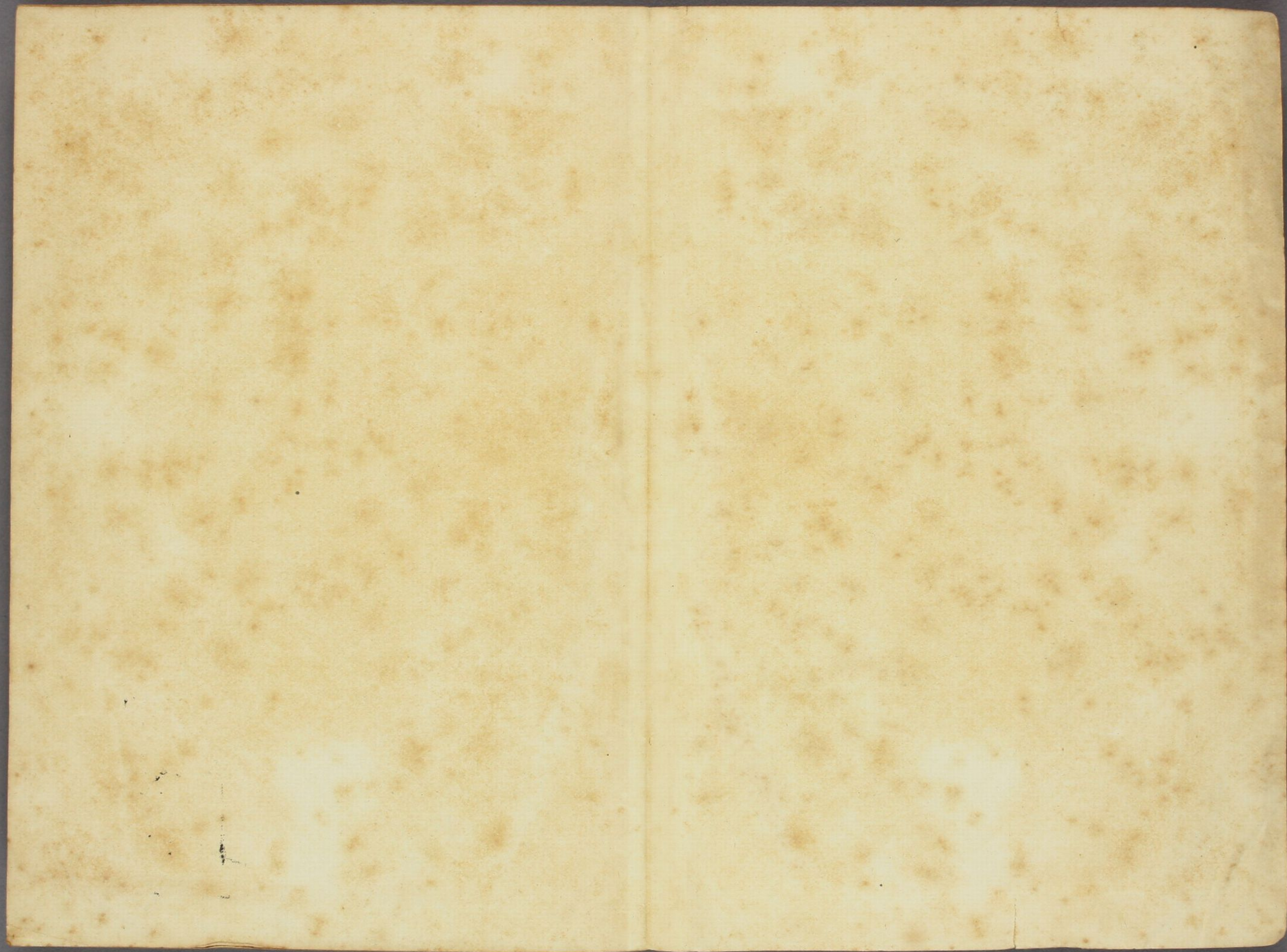
白砂
青松

東京大學圖書館











緒言

熱塵都門を焚き、溽暑苦悶惜く能はざらしむ、宜しく竹
風蘿月深山に幽居して聽涼に耳を淨ふするも可、車を
青松白砂に驅りて冷風に腸を洗ふも可、而も之れ吾人
貧士の企圖しあたはざる所、是に於て乎鎖夏の侶伴
こして涼絶快絶一讀人を寒殺す底の詞歌妙文を蒐め
名けて白砂青松と云ふ庶幾くは一服の清凉劑となす
に足らん乎

己亥の歲中夏

編者

茅

村

誌

白秋青栞目次

(一)	次	目
◎雲のいろく	一	幸田 露伴
◎十年前の夏	一六	正岡 子規
◎富士行者	二九	久保 青琴
◎豆南遊記序	四七	東海 散士
◎村居漫筆	四八	島崎 藤村
◎旅のつれ	五六	破田 蓮
◎湖心亭の記	六六	大野 洒竹
◎磯うつ浪	七一	佐々木 信綱
◎詩歌に於ける音意の諧調	七五	武島 羽衣
◎讀書漫言	八七	茫々 生
◎七部集	九二	高濱 虚子

◎文武朱雀……………九七……………泉鏡花

◎試験……………一三八……………瓜抱

◎歌反古……………一四七……………島崎藤村

◎夜半……………一五九……………大和田建樹

◎靜御前……………一六一……………戸川殘花

◎學海偶筆……………一七二……………依田學海

◎風流妄語……………一八〇……………尾崎紅葉

◎孔子と馬琴……………一八四……………大町桂月

◎夕の星……………一九八……………土井晚翠

◎曼珠沙華……………一九九……………高濱虛子

◎片影錄……………二〇二……………春田雨庵

◎松島に遊ぶの記……………二〇七……………久保青琴

◎奇童子……………二一六……………遅塚麗水

◎賢博札記……………二二九……………森槐南

◎あはれ〜此月……………二四六……………中村秋香

◎金剛杵……………二四七……………齋藤綠雨

◎夏期の追懷……………二六六……………末松謙澄

◎菊女想夫の文……………二七一……………古川文

◎客作雜興……………二七六……………田岡嶺雲

◎哀歌、海棠……………二八〇……………土井晚翠

◎利根の夜船……………二八三……………赤松國祐

◎斷篇十種……………二八八……………江見水蔭

◎妙義山の月……………三〇八……………三日坊

◎鏡影……………三一七……………與謝野鐵幹

◎湘南雜興……………三三三……………笹川臨風

目次終

◎ 晴雲	三三三	◎ 風
◎ 雲	三三三	◎ 雲
◎ 雲	三〇八	◎ 日
◎ 雲	二八八	◎ 水
◎ 雲	二八三	◎ 雲
◎ 雲	二八〇	◎ 雲
◎ 雲	二七六	◎ 雲
◎ 雲	二七二	◎ 雲
◎ 雲	二六六	◎ 雲
◎ 雲	二四六	◎ 雲
◎ 雲	二四六	◎ 雲
◎ 雲	二二六	◎ 雲
◎ 雲	二二二	◎ 雲
◎ 雲	二二二	◎ 雲

白秋青松

雲のいろく

露 伴

●夜の雲

夏より秋にかけての夜など美しさいふばかり無き雲を見ることがあり、都會の人多くは心つかぬなるべし、舟に乗りて灘を行く折、天黒く水黒くして、月星の光りも洩れず、舷を打つ浪のみ青白く騒立ちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つともおもはるゝ頃、舟の上に獨り立つて海風の面を吹くがまゝ、衣袂濕りて重きをも問はず、寐られぬ旅の情を遣らんと詩など吟する時、いなづま忽として起りて、水天一齊に凄じき色に明るくなり、千疊万疊の濤の頭は白銀の簪したる如く輝き立つかと思れば、怪しき岩の如く獸の如く山の如く鬼の如く空に峙ち蟠まり居し雲の、皆黄金色

の笹縁ささへりつけて、いとおそそかに、人の眼を驚かしたる、云はんかたなく美し、

●雨後の雲

雨後の雲の美しさは山にてこそ見るべけれ、低き山に居たらんには猶甲斐なかるべし、名ある山々をも眼の前脚の下に見るほどの山にありて、夏の日の夕なと風少しある時、谿に望みて遠近の雲の往來ゆきを觀る、いと興あり、前山の色の翠ひとしは増して裾野の風情も見どころ多く、一郭なせる山村の寺なとそれかとも見ゆるに、濃く白き雲の足疾く風に乗り空に翔くるが、自己の形をも且つ龍の如く且つ虎の如く翻りたる布の如く張りたる傘の如くさまざまに變へつつ、山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして前なるは這ふやうに去るかと思れば、後なるは飛ぶ如くに來りなんどする状、觀て飽くといふことを覺せず、小山の峰みね通りに立てる松の並木の遠見には馬の鬣はたけのやうなるが現はれつ隠れつする、金字形したる山の巔の、心あてに見しあたりならぬところに突として面出す、ことにおもしろし、

●坂東太郎

丹波太郎は西鶴の文に出でたりと覺えたり、坂東太郎は未だ古人の文に其風情をしるされぬにや、雲にも人に知らるゝ知られざるのあるもをかし、坂東太郎は東京にて夏の日など見ゆる恐ろしげなる雲なり、夕立雨の今や來らんといふやうなる時、天の半を一面に蔽ひて、十萬の大兵野を占めるが如く動かすべくもあらぬさまに黒みわたり、しかも其中に風を含みたりと覺しく、今か動き出さんとする風情、まこと一敗の後の將卒必死を期してことごとく静まりかへつたるが中に勃々として抑ふべからざる殺氣を含めるが如し、此雲天に瀰るとやがて、風ざわ〜と吹き下し、雨どつと落ちかゝり來るならひにて、あらしめきたる空合に此雲の出でたる、また無く物すさまじく、をかしき形などある雲とは異りて、秋水の千里を浸し犯す如く出で來れる、宏壯の趣きありて、心弱き兒女の愛する能はざるものなり、東京の市中にて眼にするもの、中、此雲の風情なと除きては、壯快なるものいと少かるべし、

●蝶々雲

風吹く時、はなれぐになりたる大きからぬ雲の色白き、あるは薄黒きが、蝶などの如く、ひら〜と風下へ舞ひつ飛びつして行くあり、蝶々雲とは、面白くも名づけたるものかな、其實も風情あり、其名もまた風情ありといふべし。

●ゐのこ雲

蝶々雲は古き歌に見えたりや否や知らず、ゐのこ雲といへるは仲正の歌に見えたり、夏の夜秋の夜など、雨もたぬ空の晴れたるに、ひとかたまりの雲のゐのこの如く丸く肥えて見ゆるが、月のあたり走り行くは人々の知るところなるが、これもまた風情ある雲なり、「空拂ふ月の光におひにけり走りちりぬるゐのこ雲かな」とよめる歌は、おもしろしとも思へぬと、ゐのこ雲といふ名を傳へたる功は此歌にあるべきにや。

●みずまさ雲

慈鎮和尚の歌に、「まだ晴れぬ水まさ雲にもる月を空しく雨の夜はやおもはん」といへるがあり、水まさ雲は如何なる雲をさすにやと久しく思ひ疑ひ居けるに、全流の

兵書に、雨雲の一種にて、はなれぐに魚の鱗のならべるやうに空に布くものなり、とありたるにて、さては水増雲の義なるべしなと思ひぬ、古の歌人はあなとり難し、なかく〜に今の人などより森羅万象に心をつくることをせめやかにて、我等が思ひも寄らぬあたりのものをも歌の材として用ゐる居るなり、

●望雲樓

東坡が望雲樓の詩に、陰晴朝暮幾回新、已向虚空付此身、出本無心歸亦好、白雲還似望雲人、といへる、さすがにをかしからぬにはあらぬと、なほ下の心のあるやうにて、白雲點頭すべきや否や覺束無し、

●寂蓮の雲の歌

「風にちるありなし雲の大空にたよふほどや此世なるらん」といへる寂蓮法師の歌ころおもしろけれ、雲のはかなき、此世のたのみなきは知れわたりたる事なれど、かく美しく歌ひ出されたるを二度三度吟じかへせば、また今さらに、雲のはかなさ、此世のたのみなきを身にしみて覺ゆるなり、風に散ると云ひ起したる既にいとあは

れなるに、ありなし雲のと、めづらしくておだやかなる、しかも人の心を幽玄なる境にひきこむやうなる言葉を用ゐて、さて其後に、大空にと、廣大なるものを拈出し、たいよふほどや此世なるらんと、おはれに悲しき長歎のおもひの上に結びとめたる、誰か感無しと此歌に對ひて云ひ罵り得ん、心しづかに三たびも唱ふれば、紛紛たる名利の境を捨て、寂靜の土に往かんと願ふ厭欣の念油然として湧き出づるを覺ゆるなり、

● いわしぐも

鰯雲といふは、鰯などの群る、如く點々相連りて空に瀾るものを云ふなり、晴れたる日の夕暮など多く見ゆるなるが、猶雨氣を含むものにや、さては水まさ雲と同じかるべし、「芝浦の漁人も網を打忘れ月には厭ふいわし雲かな」といへる狂歌天明頃の人の咏にあり、青き空の半ほど此雲白くつらなりて瀾れる、風情ありて美はし、童兒などは、此雲を指さして、鰯の取る、兆なりといふもまたをかし、

● とよはた雲

とよはた雲とは、しかと雲の名にもあらぬなるべし、信實の歌にては夕立する頃の例のいかめしき雲を云へるが如く、後鳥羽院の御歌にては、たい美しき夕の雲をさし玉へるが如し、「わだつみのとよはた雲に入日さしこよひの月夜あきらけくころ」といへる天智天皇の御歌に見わたるがはじめなるに、御歌にては、旗の形なせるやうの夕の雲を云ひたまへるのみなり、雲の旗の如く見ゆることは多し、旗雲といふ語は今無きやうなり、

● ほそまひ雲

布を引きたるやうに白くおだやかに空にわたる雲あり、大抵此雲見ゆる時は、空青く澄みて色美しく風きわたりたるに、刷毛にてひきたる如く淡く白く天に横たはるなり。これを何といふ名の雲ぞと折ふし老人などに問ひたれど教へ呉る、人も無く、彼の雲出づるは天氣よき兆なりと云ひしを聞きたるのみなりしに、海賊衆の一なる能島家の兵書によりて、ほそまひ雲といふものなりと知りぬ、名もゆかし、歌などにも用ゐる得べきか、

●翻雲覆雨

翻手爲雲覆手雨とは人も知りたる貧交行の中の句にして、句意はたゞ反覆常ならぬことを云ひたるまでなるに、支那の悪小説などには怪しからぬことを形容する套語として用ゐられたるが多し、もとの意義人の美を形容したるにはあらざるべき沈魚落雁などいふ語の美を形容する套語となれる如く、いとをかしき誤謬なり、

●雲の行くかた

雲東に行けば車馬通じ、雲西に行けば馬泥を濺ぎ、雲南に行けば水潭に漲り、雲北へ行けば麥を晒すに好し、と支那にては云ひならはせるに、雲北に行けば雨ふるものゝやう歌へる和歌のあるもをかし、「雨ふれば北にたなびく天雲を君によそへてながめつるかな」、「北へ行く夕の雲のおほ空にかさなるみれば雨はふりつゝ、」などいへる、地異なり時異なれば、たがひあるべき道理ながら、思ひくらぶれば、如何にも那方かいつはりなるべきやう淺まなる心には思はるゝを免れず、雲南に向へば雨漂々、雲北に向へば老鶴河を尋ねて哭し、雲西に向へば雨犁を没し、雲東に向へば塵

埃老翁を没す、といへる俗諺もある由なれば、彼もいつはらず、これもいつはらざるなるべし、我が邦の俗書に、朝に西北の方に黒雲見ゆるは雨なり、といひ、青き雲北斗を蔽へば大雨なりなどといへるあるを見れば、おしなべて我が邦にては、麥を晒すに好しといひ、老鶴河を尋ねて哭すといふやうなる事は、云ひ得ざるにや、語を譯すことの易くして意を傳ふ事の難きは、かゝる事の多ければなり、前にあげたる光俊の歌を譯して支那の村老野人に示さんには恐らくは嘲み笑はるゝを免れ得じ、

●南へ行く雲

東京にては雲の南へ行く時火災多し、明暦三年より明治十四年までの間に大火九十三度ありて、中二十三度のほかは、雲南の方へ走り、若くは南東南西の方へ走りたる時なり、冬は多く北風吹き、火のあやまちは冬多きものなれば、怪むべくもあらぬ事ながら、東京の大火を叙せんとて、心も無く、北へ行く雲に火の色うつりて天は紅霞のわたれるが如し、なほ別の故も無きに筆を舞はして記さば、如何に見苦

しきものに老いたる人などの見なさん、心せでは叶ふまじきことなり、

●たぢろく雲

風の方ねとろへ、雲の行くこと少し遅くなりて、天の猶黒さが中より星などきら〜と見ゆる時、雨の後などにはあるものなり、さる折の雲の得行きもせず、過まるといふにもあらで、たゆたふやうなるが、月星などの光あるに氣壓けあつさるゝかとも見ゆるさまなるを、たい、いざよふ雲と云はんもをかしからず、たゝよふ雲、たちまよふ雲、行きまよふ雲など云はんも興無し、はれぬるかたぢろく雲の絶間より星見ぬそむる村雲の空、といへる歌にたぢろく雲といへるはいとおもしろし、るせ歌人は、かゝる言葉のはたらきあるはたらきよりは、猶ふるき言葉のあたひ無きあたひを尊むべきものと思へるなるべし、言葉のやすらかなるは極めてよし、言葉の確まことと實際に協ひたるは、ひときはよきなり、

●雲を驅る

支那の言葉づかひには、また我が邦のと異りたるおもしろみあるにや、灼然として

雲を驅つて白日を見る如し、といふ語の驅雲の二字の如きは、我が邦の歌の中には見がたき、ものなるべし、はらふといふにては驅るといふより弱くしておもしろからぬなり、

●あだ雲

「月の前に時雨過ぎたるあだ雲をはらふならひは秋の山風、」といへる歌、慈鎮和尚の詠としてはつたなし、されどあだ雲といへる言葉をかし、あだは、あだ人あだ花などのあだなるべく、用ゐるまによりては、をかしき節ある歌をもなすに足るべき言葉なり、

●雲のわざ

雲のするわざも多きが中に、いとおもしろきは、冬の日の朝早く、平らかにわたれる雲の谷を籠め麓を蓋ひて世の何物をも山の上の人には見せぬことなり、日輪いまだ出でたまはず、月落ち星の光り薄れながら、天猶ひとしきり暗き頃、山高きところに宿りたる身のよろづ物珍らしきに例に無くはな風かぜく起き出で、戸などを

も自ら繰り、心しまるやうなる寒さを忍びて眼を放つて見わたせば、昨日は脚の下に麓路ふもとぢの村も晝の如く小さく見ゆ、川の流れの白きが絲ほどに細くそれと知れ、深き谿を隔て、かれこれと名ある山々の數多く連なり立ちたるが眼に入りしに、今は我が立てるところを去る幾干もあらぬ下より遙に向ふの方際涯はて知らぬあたりまで平らかにして大江の水の如くなる白雲たなびき渡り、村もかくし川もかし山々谿々も匿しはて、下界を海の底に沈め盡せるが如くに見せたる、雲のわざとは知りながら流石に馴れぬ眼には驚かるゝものなり、開門忽怪山爲海、萬疊雲濤露一峰と詩にいへるもまことによく云ひ得たりといふべし、

●雲中の夢

上にあげたる如き白雲の中に眠りても人の夢は猶塵境に迷ひて、おろかなる事のみ見るものなり、「しら雲の中にいねても山を出で、塵のちまたに通ふ夢かな、」とは我がある時の實際まことをよみたる吟なりき、

●雲のさま

韓雲は布の如く、趙雲は牛の如く、楚雲は日の如く、宋雲は車の如く、衛雲は犬の如く、周雲は輪の如く、秦雲は行人の如く、魏雲は鼠の如く、齊雲は絳衣の如く、越雲は龍の如く、蜀雲は囷の如し、と云へるはいとをかし、地に定まりたる雲あり、雲に定まりたる形あるべきにや、おほようは定まりもあるべし、詳しくはいかゞ、江戸の坂東太郎、浪花の丹波太郎、九州の比古太郎、近江あたりの信濃太郎、これらは雲の出づる方により負はせたる名なれば、けしうもあらず、加賀の鼬雲、安房の岸雲、播磨の岩雲などは、其土の人々の雲の形を然思ひ倣して然呼び倣したるなるべければ、魏雲鼠の如く齊雲絳衣の如しなどいへるも、魏齊の俗に鼠雲絳衣雲等の稱ありて後云ひ出せることにや、單に一人の口よりはしいまゝに、いづくの雲はそれのものゝ形に似たりなど云はんは、餘りに烏辭に、しればみたるわざなるべし、

●かさほこ雲

南の方の天にさしがさを開きたるやうに立つ雲をかさはこ雲といふとぞ、其雲やがて破れて、うの破れたる方より風吹くと聞きたれど、市中にのみ住める身の、未だよ

く見知るべき時にあはざるこそ口惜けれ、

●かなとて雲

東の方に築地をつきたる如く立つ白雲を、かなとて雲といふよしなり、かなとては鐵砧にて其形鐵砧にも似たればなるべし、其雲先しりぞけば西風強く吹き、たちあがれば足をおろして雨となると傳ふ、東に白雲の築地の如く見わたるは眼にしたれど、猶かなとて雲の風情といふを知らず、

●卿雲

景雲といひ、卿雲といひ、慶雲といへる、しかと指し定められたる雲にはあらざるべし、卿雲爛たり糺縵々たり、といへる煙にあらず雲にあらず紫を曳き光を流す、といへる、大人作矣、五色氤氳、といへる、金柯初め繞繚、玉葉漸く氛氳、といへる、還つて九霄に入りて沆瀣と成し夕嵐生する處鶴松に歸る、といへる詩の句などによりて見れば、歸するところは美しき雲といふまでなり、一年の中に幾度か爛たる雲の見わたらん、若しまた餘りに美しき眼なれぬ雲などの出でたらんは、氣中のさ

まの常ならぬよりなるべければ、却つて悦ぶべからざるに似たり、五色の雲など何にせん、天は青さがめでたく、雲は白きこそ優しけれ、八雲立つの神の御歌を解きて、その時立ちし雲は天地のみたまの顯はせりし吉瑞にて、いとくしびなる雲なりけむなと橘の守部が云へるは、當れりや否や、知らず、くしびなる雲とは如何なる雲ぞや、問はまほし、八雲立ちといひたまはで、八雲立つと言ひ切り玉へるも彼の奇しき瑞雲に驚かせ給へる語勢なりなどいへる、ことに奇しき言なり、崇神紀の歌に、八雲立つ出雲梟師が云々と歌へるも、八雲たちとは云はで八雲立つといひたるなれば、驚きたる語勢たるなりといふべきか、いと奇しき言なり、



十年前の夏

子規子

首を廻らせばはや十二年の昔となりぬ、余は年猶若く、身猶すこやかに、行末は無
限に長く、希望はいたづらに大いに、余が通ひし學校は東京大學豫備門の名を棄て
、高等中學校と呼ばれたる頃の夏の事なりき、學年試験は過ぎて六十日の休暇は長
けれど山水を跋渉して自然の文を窮めんには旅費を取るの途無く、なつかしき古里
に母の笑顔を見たきは山々ながら、歸省は二年ふりと定められて、去年歸りたれば、
さすがに女々しく今年もとは言ひかねつゝ、麻布の知る人を頼みて其家の二階に一
夏を送るべきはかりごとを爲しぬ、二階とは言へどお長屋作り、櫛子の下に卓子を
据ゑて、物置に當てたる部屋の隅に古葛籠と共に埃をかぶりてうづくまること十日
餘り、忽ち嬉しき恩命は下れり、若君の日光漫遊に俱せよとの事なり、

夏服一二領いろざとゝのへて、風雨はげしき朝、上野に向へり、君は余よりも五つ
六つ若く、俱したる人は余と共に三人、皆年たけたる人なり、瀛車宇都宮に着きて

こゝに一宿し翌日晴天馬車を驅りて奉幣使街道より今市に出で日光鉢石町の旅店に
投ず、尋常一様の旅行何の趣味も無れど、一月四圓の下宿の外に天地あるを知らぬ
余には瀛車の上等も珍しく、旅籠の上等も嬉しく、きたなき馬車ながら借り切りの
旅も面白く、況して旅行好きの余には尋常の山、尋常の水、尋常の野も始めて見る
者は興を催さざる無く、尋常の並木土手も松が杉と變りて此より昔の日光領と聞く
もゆかしく、立場に馬車を停めて泡ふく馬につめたき水を飲ますれば、茶屋の婆々
が缺盆に澁茶を載せて我等に侑むるもをかしく、壯心勃勃として禁へ難き余には、
木の根、石の角に乗りかけて躍り上りたる馬車のしばし、乗手をはね落さんとする
さへいと心よく感ぜられたり。

旅人を載せたる馬車や夏木立

田舎路の馬車馬瘦せぬ草いされ

旅店の樓上に汗臭き衣も脱ぎあへず、肺然たる驟雨は屋を鳴らして到り、やがて今
市の方へ過ぎぬ、樓は南に向ひて開き、山は百歩の外にあり、雨の降る谷、日の照

る峰、暗き森、明るき雲、奇景は一望の中に集まり萬象は頃刻の間に變ず、しばし惘然として眺め居たる時、今迄兩眼鏡を以て何物をか見居し人の忽然と叫びぬ、見よ、左に見ゆる山の絶頂には一本の樹だに見ぬは、思ふに眺望極めて善からん、試に登らんか、如何、と、余は直に應じ共に旅舎の裏門より出づ、此時鳴蟲の雲漸く消れて群山の雨は纔になごりをとめぬ、踴躍して登る、林盡きて道無し、人より高さ茨の露を拂ひつゝ分け行けば頭の上に當りて物の呼ぶ聲す、人か、鬼か、鼻か、そゝろに身の毛よたつ思ひにやう／＼少し平らなる處に出づれば、旅宿に居残りし人のいつしか早くこゝに來て我等を尋ぬるなり、こゝは社なり、見上ぐれば初めに指したる山は猶遙に高し、余先に進み、蒿を剪り、蜂を拂ひ、路を開きてしるべす。とかうして絶頂に登る、

草を踏んでまひし處る、單物

果して樹無し、草に踏して見る、四望豁然として開く、群山眼に在り、東に向つて走る、大谷川日光を出で北を流れて野に入る、水光明滅見るべからず、一帶の綠樹長うして曲る者は先に車を驅りし並杉の道なり。半日の路程歴々として、しかも人馬は辨すべからず、四顧稍久し。

上州の山の夕立つけしきかな

余の志は流動して未だ定まりたる形無けれど、未來の幸運は手を空しうして余の到着を待つ者の如く、種類の如何に拘らず一旦余の希望に上りたる上は直ちに満足の結果を見得べく思はれぬ、明治十四五年來郷里に流行したる一種の政治熱に浮かされて太政大臣たらんと心ざし、俗世間的の志望は此時早く跡を隠して、今や余は大哲學者たらんと考へつゝありしなり、しかし哲學に就きては余は何も知らず、哲學は總ての學問の上に位し哲學者は總ての人間(太政大臣をも含む)の上に位す、といふ簡單なる定義は哲學に於ける余の知識の總てなり、此無學なる無邪氣なる少年哲學者は蕞爾たる一小土塊の上に登りて、自己は總ての人間の上に在り、といふ聯想に無上の快樂を感ぜざるを得ざりき萬有は余の眸中に集まり來らざるは無く、しかも彼等は余と調和するがために沈黙し、余と調和するがためしに動搖せるが如し、

現在に於て斯の如く見地高さ哲學者は未來に於て如何ばかり榮ゆるん、余自身だに之を想像する力無かりき、

つぐの日は東照宮に詣づ、天地渾て青き裏に一個の赤き橋を掛けたる畫景、萬株の杉、三百年の苔蒸して英雄の枯骨を護したる奇觀、此等の感じは有形に無形に余の心を動かしたる者無きにあらねど、幕府排斥の氣風に養はれたる余は殊の外に家康を憎き者に思ひ、堂塔參差、金碧相映するの宏壯偉麗も家康のためにしたるを思へばうゝろに厭ふべく嫉むべく感じぬ、されば本殿の奥深く入りて跪きたる時もぬかづくだに心よからず、若しこれが秀吉の靈を祀りたる者ならばとのみ思ひつけぬ、余は昔より太閤好きなり

下。閨。や。百。萬。兩。の。鑿。の。跡。

美術思想に乏しかりしかば此建築を評すること能はざりき、美か醜か、それすら判断し得ず、只意外に出でたるは細工のこまかき事と規模の小なること、の二つなり。

ある日、馬にて霧降にもせんと君は言ひいでたまひぬ、さらばとて皆々借馬屋より牽き來りたるに跨りて出づ、人々の中にて馬を知らぬは余一人なればとて最れとなしといふ鈍き馬にのせられぬ、尻のすわり覺束なき心地はすれど、往來の人の眼を驚かして我等を見あくる面白さに心驕りせられて

夏服は若殿ぶりの馬上かな

鉢石の町も過ぎ大谷川に沿ふて行く、三尺の小道處々缺け崩れて下は目も舞ふばかりの谷なれば馬の足をいたはりつゝ、朝日照る小倉の山を越ぬ、稍平らなる山の上に出づれば足搔をはやめて行くに向ふより徒歩にて歸り來る同窓の友に逢ひぬ、かたばかりの禮して過ぎたるも我ながらうれしく、斯る曠の打扮を知らる人にも逢はざらましかば、あたら夜の錦ならんかと思ふもをかし、ある假小屋の前に到つて山上の平地は盡きたり、かしてに見ゆる瀧こそ霧降なれ、と馬丁は指さしをり、馬を下りて石くればかりの道を下ること幾町、瀧の下に出づ、岩に腰うちかけて、しぶきに袖の濡るゝ頃もと來し道をたどりつゝ上る、我が馬驚鈍にしておくれがちな

るもくやしと啣ては馬とりかへんと某の言ふ、歸り道は善き馬に乗りたれど猶れく
れがちなり、町近く路廣くなるより君はいつさきに走らせたまへば皆つゞきて駈く、
余も諸共にとあせれどはるかに隔たりたるもよしなしや、

三騎先へ一騎おくる、青嵐

けふは中禪寺へものせんとて駕籠一挺用意につらせて皆かちより行く、裏見、慈觀
方等、般若、いろくの瀧を見て、中の茶屋に磁石をためし、苦しき息もつきあへ
ず劔が嶺を攀づ、山漸く深く木立よの常の様に異なり、華嚴の瀧に到れば今年は雨
少しとて未だ落ちず、中禪寺湖畔に宿る、

中禪寺の湖は一たび余が目につれしより後、再び忘るべからざるの地なり。黒き迄
濃き山の緑、骨にとほりて静かなる水の色、沈んで動かざる空氣、淋しく光る夕
日、死人の額の如き冷氣、肖像の口の如く黙したる木の葉、人蹟を印せざる太古の
苔、植物學者の知らざる不思議の草花、凡そ此等の奇異なる感に打たれて余も亦周
圍と共に沈黙するの外は無かりき、こゝに來りて後、夏といふ感じは先づ余の腦裏

を去り、次に世間といふ感じ漸くに去り、やがて自己の感じも亦惘然としてとりど
めなくなりし時、余は此沈黙せる萬象を通して一道活氣を感じたり、余は始めてこ
ゝに神祕的美を感じしたるが如し、此より中禪寺湖畔に只ひとり住みたしどの念は
絶えず余が心中に往來して、神祕は常に余を待ちつゝあり恍たり、惚たり、眩たり、
情たり。

月に水涼しき夕神あらん

翌朝千丈が原を横りて湯元に向ふ、路々の奇草珍花數を知らず、原盡きて森に入る、
千年の老木天を蔽ふて斧斤も山に入らず、狐兔近く出で、こゝらには獵夫も住まず
と見えたり、龍頭の瀧を見て湯の湖に到る、湖に沿ふてめぐれば門あり内に十餘戸
廓を爲す、岸邊の水濁りて硫黄臭きは温泉の涌くにやあらん、某の家に入らず、家は
山に倚りて間も奇麗ならねど、古き翠簾を鐵の大なる鉤に掛けたる古風を此山の中
に見るもいとゆかし、湯あみせんとて浴衣に手拭提げて半町ばかり行けば、湯壺は
板一枚の覆ひも無く、山より引きたる筧の湯あたりにてばれて、一面に硫黄凝り固

まりたる其臭ひ堪へ難し、

名も知らぬ草もの凄き茂りかな

湯の湖は中禪寺よりも淋しく、山々逼りて日に疎ければ、晝も物凄き心地すれど、湖狭く隠す方も無きにぞゆかしき様には見えずなん、今宵は頸筋稍寒く覺ゆるに蒲團引きかつぎて涼しき夢を結びしが、つぐの朝下女の來て、ゆふべは狼の吠えしを聽きたまはざりしか、と語りぬ

舟を借り又魚を見る、湖水の彼方、木茂り枝垂れたる岸に漕ぎ寄せて靜かに水の底を窺ひつ、漁師は三つ又のやすを手に取り舟端に立ちて見すましつ、忽然と突く、やすは手を離れて、突かれたる鯉のまに、水面にゆらめきて倒れもやらぬを再び取り上ぐれば鯉は潑刺として竿のささに在り、再びすれば再び突く、三たびすれば三たび突く、一丈の竿、六尺の深さ、突く處は必ず頸と定まりて一たびも誤らず、二十餘尾を獲て歸る、

ねらはれし魚の命や山清水

日光に歸りて日數經るまゝに上州に行かんとて流車高崎に著き、車して伊香保に上る、大殿はかねてよりこゝに待ち給ひしにやあらん、君は御對面あり我等も御前に召されて旅路の出來事つばらに申しあぐればいと笑つばに入らせたまふ、けふよりは日々爲す事も無くて起き臥しに時を送るも本意なき心地す、只見馴聞馴れぬ御前の有様は、人の言葉のおとそかなる、腰元どもの立居まで物めづらかに耳傾くる節ころ多かりしか、それも四五日過ぎては心にもとまらず、次の間に籠りて謠本を手に觸る、儘に讀む、飽けば欄に倚りて赤城なぞ見下す、こゝは伊香保の町のいち高き處にして前面見到らぬ隈も無ければ夕立のけしきなど殊にをかしく眺めらる、

温泉に三度殘る暑さも晝の内

此間の無聊を消す者はいづれの部屋も碁、將碁、骨牌のたぐひなるべし、田舎初段などいふめる碁打は日毎に伺候して口すぎのわざには怠らず、たま〜には碁を知らぬ余さへ催されて腰元と一局を争ひ、はては口やかましくいさかひして顔赤めたるこれも湯治場の一興なるべし、ある時は大殿も君も腰元家司どもある限り皆寄

りつとひて連碁、連將碁などいふものすめり、半ばはまたく其わざ知らぬ人なれば
味方の危急を知らでいと心ゆたかに一目を取り端の歩兵を突きなどしたる傍にて汗
を握るも可笑し、

大殿は稀に湯元へ行きたまふ、ある時夕暮の散歩に小き函、玩具やうのものを持ち
歸り給ひて、これ見よとて示し給ふ、皆近づきて見るに函にも玩具にも御家の紋處
を附けあり、さては斯る物を賣りさふらひしよとはやせば、いや鷹があつらへたる
よなど戯れたまふ、これにさへ催されてしばらくは皆々笑ひをよめさぬ、況して軍
談師を召して一坐の講談を聞きし時は扇の音に目もさびる心地こそせしか、

ある涼しき夕、大殿も君も共に向山の何がし亭に行きて酒酌みかはし給ふ、男も女
も皆俱せられたり、怪しき老妓ども來りてとりもちなどす、彼方の一間に長州の人
某の來りて夕餉した、め居たるが、大殿より御挨拶の事あり、某は維新の際兵を率
て我藩に到りし者余は今さらの如くろをくやくしく思ひ居りしかば此夜の事不平に堪
へず、三味線の調子につれて俚歌一曲出ぬ聲ふりしばらくして謳ひ出でたるは、今思ひ

出すだに冷汗流るゝ心地すれど、當年の意氣は天を衝くの勢ひやありけん、

君に隨ふて榛名神社に詣づ、山上の花野、尾花女郎花の今を時と咲き亂れたる、此
景却て平地に見るべからず、榛名の湖は絶頂にありながら幽邃の趣に乏しきは此山
の特色なり、

若君は駕籠にめされつ女郎花

虎列拉の噂や、薄らぎて君の東京に歸り給ひしは九月にやありけん、大殿は後より
歸り給ひて御物語などうけたまはりしも今はおぼろに記憶に残りて大方は夢の心地
なんする、君は其後余等と共に本郷の寄宿舎に住み給ひしことさへあり、いとむつ
まじくつかへまつりつ、御生れやさしく、少しも人に驕りたまはず、よろづにさか
しく物のことわりをことごとくにわさまへおはしたる、御行末も榮えたまはんとのみ
祈りしを去年の夏はかなくも大磯の露と消えたまひにき、余が最後にまみれたるは
廿八年の一月かと覺ゆ、新に建てられたる御邸にまゐりて新年の御よろこびを申し
あげしに、此頃はいたつきは如何にや、などねもごろに問はせ給ふ、久しくまみれ

ざりしかば、御有様いたくねびまさりて、光さへうひ給ひしにいとかたじけなく覺
 ねて退りしはやがて終の御別れとぞなりける、君の御いたつきのよしはほのかに聞
 きながら病床に起き臥す身は得訪ひもせで心うき日頃を經ぬ、遽に身まかり給ひぬ
 と聞きて、遠からず御後を慕ひたてまつらんとのみ思ひしが、御初七日の頃より俄
 に熱出で、下らす、今はとあやぶみし日も二日と過ぎ三日と過ぎてわづかに命ばか
 りをとりとめたれど、あらぬかたはとなりて一步も歩む能はず、立つことさへ自由
 ならぬ身とはおちふれぬ、十年の昔、無限の希望を負ひて山水を跋渉し殆ど一點の
 苦も無しに未來の幸運を望みし時、誰か今日の境遇あるとを期せんや、爾後、事は
 心と違ひ、身は仇と謀り、惡魔は天下の不幸を擧げて余の上に攢めつゝあり、苦痛
 は其全力を盡して余を試んとする者の如し、今や余は此境遇に處して安心の地を求
 むるに怠らずといへども、思ふて兩毛の會遊に到れはうたゝ心を惱ましむる者無き
 にあらず、中禪寺の湖神は今猶余を俟つや否や、魂飛び夢通ふ、涼風の曉、月明の
 夕、

富士行者

青 琴

山は自然の最も神聖なる者、萬千の氣象四時を以て變し、朝暮を以て改り、風雨晦
 明瞬時を以てする能はざるを觀ば、誰か神靈を感想せざる者ぞ而して我日本や、山
 嶽を以て國をなす以上は、此種の感想夙に民人の腦中に涵養せられ、國中の山、各
 崇祀の神佛あり、登山稽拜は古昔よりの風習なり、彼の修驗道一派の徒は、此種の
 感想を迷信的に凝固せしめし者、富士行者の如きは殊に甚しと稱せらる。余は今之
 を記するに方り、先づ富士登山の濫觴に付き略述する所あらんとす、

富士登山、首めに上宮聖德太子あり、太子傳曆に

推古天皇六年夏四月、太子命左右求良馬、符諸國令貢、甲斐國貢一驪駒四脚白者、
 數百足中、太子指此馬曰、是神馬也、餘皆被還、令舍人調子磨加之養飼、秋九月試
 馭此馬、浮雲東去、侍從仰觀、鷹獨在御馬右、直入雲中、衆人相驚、三日之後、
 廻轡歸來、謂左右曰、吾騎此馬、躡雲凌霧、直到富士嶽上、轉到信濃、飛如雷電、

經三越、竟今得歸來、磨汝忘疲隨吾、寔忠臣也、磨啓曰、意不履空、兩脚猶如步踏陸地、唯見諸山在脚下、

扶桑略記に記する所、大同小異也、抑も甲斐驪は書記雄略の御歌に見へ、續記に其貢獻を記し、今の黒駒は其產地と云ふ、而して嶽の近傍、今に太子の遺蹟を存し、登路は南方須山と傳ふ、頂上駒峰に一銅馬を置き、傍に馬乘石あり、吉田口七合同名の地にも太子馬の像あり、尤も古製なり、川口村には太子が駒を繫きしと云ふ樹あり、太子堂は岳麓數處にあり、

次て役、小角あり、小角の事は續日本後記、扶桑略記、役公傳、本朝神仙傳、元享釋書に見ゆ、今其要を擧げんに、小角は加茂氏大和の人葛木山に住すると二十餘年、藤皮を被り、松葉を餌し、孔雀の神呪を閑ひ、奇異の驗術を窮め、五色の雲に乘し、時に仙都に遊び、能く鬼神を驅使す、其徒韓國連廣足、小角の能を害し、讒するに惑を致すを以てす、乃ち召して驗せんとす、小角空に昇り飛行し、縛を受けず、是に於て其母を捕ふ、小角自ら來り、仍て伊豆大嶋に配せらる、晝は嶋中にあり、夜

は鍊行の爲め富士山に往き、海上に浮ひ走ると陸を踏むが如し、居ると二年大寶元年召し還さる、後虛に登り海を踏み唐に渡ると云ふ、役公は蓋し本邦上古の神仙として知らるゝ者、其行爲は宛として列仙傳中謝中の竹葉、孫傳の歩水を想はしむ、凡ろ仙を學ぶ者、必ず高山に登るは無人寂寞の境に禪定を修せん爲にして、小角も亦此意に外ならず、而して飛行神通を以てせしといへば、凡人の登山とは同しからず、山路の險難なぞ別ちなきとなし、其登路は詳ならざれども、有名なる須走の走略は其踏み分けし所なりと云ふ傳説あれば、或はこ、歟、甲斐名勝志には、嶽北の十二嶽行者堂を以て其登山初地といひ、左右口村の圓覺寺も其創立といへり、又但説に十二嶽西の「ノソ井」を以て、行者か前鬼後鬼を帥ひて魔神と戦ひし地なりといへり、

要するに以上二件は奇譎怪詭の説にして、今日より見れば勿論信を措き難きも、古書に見ゆる者なれば姑く記するのみ、小角以後登山の事或は行はれたるか知らねども、絶頂を窮めし者は絶無なり、都良香の富士山記に「攀登者止腹下、不達上」と

あり、思ふに延暦廿一年を初め、數度大噴焰ありたればなるべし、大寶の後百有餘年にして大同年間、空海登山の説あり、林羅山の丙辰紀行にも「羽客釋流跡を此山に残し、役處士初めて攀躋せしより以來、空海圓珍、巖石を刻し佛軀を彫せし者此山に多し」とあり、而して空海が此國に入りしと、伊豆桂谷（今の修善寺）に居りしとは傳記に見ゆれど、登山のとは確證なく、古蹟なし、但し山麓を巡りしとは有りしに似たり、今に嶽の北麓、西湖の南岸、潭水黛蓄、龍氣浮ぶの處、千仞峻崖の面を磨し、鐘馗の像を刻する者、其擲筆の蹟なりと云ふ、其他猶は徴すべき者多し、後三百年を経て近衛天皇の御宇、未代といふ僧あり、此山に登り絶頂に一寺を建つ、事は地藏靈驗記に見ゆ、

中古不測の仙ありき、未代上人と云ひける、彼の仙、駿河富士の御峯を拜み玉ふに、三國無雙の御山、峯は半天を支へて雲に入り、夏の夜なれども霜を副へ、麓は群峰重疊せり、春の日ながらも錦をさらして星は綠樹に連り、日は海底より出て玉

ふ、されば巍巍たる勢、蕩蕩たる粧ひ、喩ふるに物なく、實に三國無雙の名山なり、垂跡淺間大菩薩、法體は金剛毘盧舍那の應作、男體に顯はれ玉ふへきに、女身に現し玉へる、然れば即本跡各別なれば、未代に不信の衆生多くして、二佛の間迷濟度も又た覺束なく思ひ奉る、所詮我れ捨身の行を修め、後代の不審を晴さんと思ひ立て、御岳の半に座して樹下石上に百日斷食して、正しく神體を拜み奉らんと祈る、日數の間命根に恙なく、氣力も昌にしてありしが、滿願の曉、虚空に聲ありて汝か所願を成すべければ、汝か坐下より東南の方一百八歩を去て其谷下を掘るべしとて失せぬ、教の如くして見れば、長一尺八寸まします水晶を得たり、形は御嶽に少しもかはらず、光明赫耀たる玉なり、上人速に胸中の不審を晴らし、合掌して住妄想境は不可了と、其玉を水晶の嶽と白して、室を造り、宮殿を儲けて奉納、末世の今に至るまで奇特を残し玉へり、其後麓の里、村山と白す處に地をしめ、伽藍を營み、肉身を斯に納れて、大棟梁と號して當山の守護神と現し玉ふ、

本朝世紀には

久安五年四月十六日丁卯、近日於一院有如法大般若一部書寫事、卿士大夫男女素
緇多營此事、是則駿河國有一上人、號富士上人、其名稱未代、攀富士山已及數百
度、山頂構佛閣、號之大日寺、

両者を併觀すれば大に得る處あり、而して富士山頂の祠は貞觀十一年の創立と雖も
其興廢詳ならず、この大日寺は今の表大日堂ならんと云ふと一般の通説也、又村山
の伽藍は富士山大縁起に興法寺未代上人の營む所と云へる者なるべく、今の東泉院
是なり、又頂上の東方經岳は、この未代が關東民庶に勸進し、仙洞に調進せし一切
經を納めし所と云ふ、思ふに未代は嶽上に苦行し、法風關東を靡かしめ京洛に及び
たる者なるべし、其感得せし水晶の行衛は今尋ねべきなし、

此後に日蓮埋經の事あり、次て正別當賴尊なる者あり、愈々富士行を契めしと云ふ、
賴尊は文明年中と云ふのみにて、傳記は判然せず、富士登山は通例役行者を始祖とい
ひ、此頃より漸々盛となりしが如し、皆修驗道の徒にして首に寶冠を戴き、木綿袈

袈をかけ、白衣を着け、金剛杖を携ふ、此等をすべて富士禪定の行者と云ふ、俗院
文選嵐園か富士賦に、

禪定の人は寶冠に頭をつゝみ、下向道は小袖の砂をふるふといへり、今はかやう
の姿する者もなし、

といへるに協へり、一般に齋戒を嚴にし、然らざる者は山神の咎に遭ふといへり、
名所方角抄富士の條に、

一夜涌出したる山といへり、夫れより絶頂までは巖砂山なり、隣國の人、百日精
進垢を取り、六月一日より上十日の程に禪定をする也、近江國の人は七日精進す
る子細有之由、

と見へたり、木綿袈袈は後世までもあり、西國道者は必ず淺間新宮に詣で之を請ひ
受けしと云ふこと、天文年間今川氏の古文書に見ゆ、後には廢し、白衣は今日まで
も残り、齋戒も亦異なるとなし、同じ天文年間にいたり角行、真人といふ者起り、
舊來の修驗道外に、一種の邪教を新設し、益登山を盛にせり、之を富士講となす、

角行以下、富士講の徒を記する者、富士行者列傳あり、角行天文十年を以て生れ、幼名長谷川竹松といひ、肥前長崎の人、加藤肥後の第五庶子と稱す、七歳にして富士信心發起し、永祿元年始めて富士行者となり、亂世を靖安せんことを祈り元龜三年四月北麓より登山、爾後數十回、元和六年八穴に入り苦行を修め、丈二尺の杖をつき、不食不飲不眠にして千日參籠、秘録を神人に受けたりと稱し、初めて一派の教義を立つ、正保三年六月に至り、遂に窟中に入寂す、歳百六、今に洞口西北の大日堂を以て其枯死の所といひ、墓は其附近にあり、徒弟の亦多し墓前に石祠あり、角行を祭り、吉田家より神號を許されしと云ふ、角行後に長谷川右近、加藤甚平など稱し、立願の初めには角行小理大旺といひ、又書行藤竹、書行東覺と號し、其流派を汲む者は通して一世藤行佛と稱す、書は角と讀む、是れ斯宗徒の習なり、角行に繼ぐ者、二世日行理竹、三世旺心竹あり、四世月旺日に二徒弟あり、一を藤原月心といひ、其子村上光清に傳へ光清派となる、一は正統にして、五世月行朝仲といひ、六世食行身祿に傳へ、身祿派となる光清身祿は富士講の二大分派なり、

食行身祿は伊勢一志郡川上の人、寛文十一年正月に生れ、姓は日置、北畠氏に出つと云ふ、後に改めて伊藤氏を稱す、十七歳にして江戸に來り、月行に師事し、富士仙元を信仰し、是より四十五年間、朝夕兩度の垢離一日も怠るとなく、又た毎年富士登賽す、性頗る躁急、高聲に祈念して時と所とを擇ばず、夜半人靜まるの時、忽然大聲に祈ること常なり、同宿の旅人之を厭ひ、或は宿を移さんとする者あり、旅店の主人も數人の客に換へ難きを以て、身祿をして他に遷らしむ、到る處此の如くして、後には誰ありて宿貸す者なし、甲州吉田の御師田邊十郎右衛門なる者之を聞き謂へらく、我れ淺間の神託により、登賽者を宿して生計を立つる者、假令ひ狂人たりとも、誠心神を信する者は我家の上客たり、豈に之を疎せんやと、因て之を迎へ待遇頗る懇篤なり、身祿も亦た喜ふと限りなし、かくて享保十八年にいたり、入定の事を謀り、絶頂の釋迦ヶ嶽を以て其地と定む、偶々大宮司に障る事あり、乃ち北口七合目の烏帽子巖に定室を構へ、六月十三日之に入り、斷食す、十郎右衛門も其傍に小屋を結び、懇ろに看護す、入定より終焉まで卅一日の間、日々詠歌あり、

十郎右衛門之に和し、集録して卅一日の巻といふ、今田邊氏に傳へ信者の需めに應じて寫すを許す、七月十三日に命終る、享年六十三、一生登山四十五度と云ふ、枯骸端座のまゝ動かず、雨雪に曝らされ年久しく存し、其流を汲む者年を追て繁昌せしかば、他派の行者之を妬み、遺骨を杖にて打ち碎けり、十郎右衛門深く悲悼し、深く座め、一子相傳の外、人に知らしめず、身祿定中に十郎右衛門の厚意を謝し、身に副ふ物を擧げて遺物となせり、今に持ち傳へて其家にありといふ、

光清身祿の後に鳩谷三支なる者あり、益詭異の説を唱へ愚民を欺罔し、其教大に關東に行はれ、信徒は無慮數萬人、後には更に分派して富士八百八講といふに至りぬ、而して毎年夏時一日の登山者、千を以て數へしと云ふ、今其教旨組織の一斑を述べんに、本は修驗道より出てし者と思はるれど、大に其の性質を革め、かの役小角の流を汲て禪定する者にもあらず、眞言秘密の行法にもあらず、吉田白川の神道にもあらず、或人の説に、天文年中は南蠻國より耶蘇切支丹を傳へしの時にして、角行はいかなる神異の人たるか知らねど、遠き長崎にありて富士の尊嚴を知る筈はなかる

べく、是れ事を富士信心によせて耶蘇教より一種の教を編み出せし者にして、其制禁に漏れたるは當時未だ汎く行はれざりし故ならんといへり、眞偽知るべからずといへども、一種異様の邪教たるに至りては論なし、其説く所に妄誕尤も甚しく、よく前世の父母を知るといひ、或は加持祈禱し、奇怪なる神符を出し、病むも醫藥を用ひしめず、短衣左衽し、鈴を鳴らし呪を誦へ、呼喚號叫すると、狂人に異ならず、而して其主とするは登山及び他の苦行にあり、又恣に文字を製作し、好て異字を用ひ、字音を分たず(前に述べし書を角と讀む如き)、相傳へて角行人穴に苦行せし時、仙元明神此の文字を教へ玉ふと云ひ、今に角行の所筆、吉田の某家にあれど、逆も讀めた者にあらずと云ふ、其他の詳細は未だ深く考へざるも、此等の點より見れば、今日の天理教などと類似する處あり、宇内名山の標準として神聖なる富士山が、邪教の楯に取られたるはよく、迷惑のとなるべし、

甚矣人之好怪也、不求其端、不訊其末、惟怪之欲聞、とは韓愈か絶叫せし所、實に千古不磨の確言にして、邪教流布の一因は、確に愚民が好奇心に驅られたる迷信に

あり、寛政の頃より初め富士講最とも其盛を極め、登山せんとして垢離を取る者、京都は加茂川に於てし、江戸は墨田川に於てす、京都のことは日次記事に

白山城國修山上者、鴨水側構精舎、精進潔齋、毎日入水浴、是謂富士垢離、其間洛中兒女、令行人祈病索福、或憑斯人、而使勤代參、

とあり、江戸のことは嬉遊笑覽に引ける松の葉長唄の不二詣に

兩國橋よりのりつけて、花火をめさんせ、かはさんせ、……………又かしてを

見てあれば、不二詣の行人達か、さんげく、六こんだいしやう、さんぶり、ど

んぶり、ずぶどぶ、ひよひよんに、ひやうたん を腰につけての水遊びもござん

す……………

といひ、江戸總鹿子新增大全には

六月廿八日より七月七日に至る、相州大山石尊に參る輩兩國橋の東にて河水にひ

たり、垢離を取てをめく聲蚊の鳴くが如し、七月十四日より十七日朝に至るを盆

山といふ、此輩市人の中にて、中人已下の者のみ也、放逸無慙の者のみ多き事い

ふかしき由、鶴下菴もいへり、

とあり、凡う富士に詣つる者、便道大山にも詣つる故、こゝに大山詣といふは、矢

張富士講の徒をいふなるべし、以上の數者を併せ、言辭以外に推測するの勞を取ら

ば、頑冥固僻、迷信の爲に動かされて、行爲のいかに狂人に近きかを知るに足るべ

し、

此種迷信の行者、今日猶ほ全く絶へず、嶽に登る者必ず屢遭遇すべきなり、余は前

後數回の登嶽に於て親目せし者を擧て、前論の足らざる所を補ふを得ん、

曾て頽齡將死の一行者に遇ふ、年は八十と云ふ、已に數十回の登山をなし、迷信に

より得たる猛志は依然たるも、今は徒らに體軀の老衰を啣つめり、登登たる山路、

峨峨たる巖石を攀ぢ盡し、第八合九合を経て胸突八町の絶嶮にいたる、流石の渠れ

も疲勞に堪へずして、一步も運び難、絶體絶命の姿となり、剛力(導者)の工夫に

て、數十丈の長繩を帯に結び引かれつ、匍匐して辛くも絶頂を窮むるを得たり、渠

れは仰て瑤天蒼蒼として纖翳なく、微風動かす、雲霧吹き下らざるを見、人に語て

曰く、まことに年はとるまじき者ぞ、神の誓空しからず、最後の思ひ出でに又なき好き山をしたるとの嬉しさよと、神前に蹲し、喜悅の涙を灑くと多時、やがて衆人と伍し絶頂の坑邊を一周し了り、欣々然として下山せり、

嶽の絶頂、劔峰の半腹に一小洞あり、余は洞中に枯坐して閉目する四十左右の一女人を見しことあり、顔容の憔悴はいふまでもなく、肉落ち骨立ち、髪は飛蓬の如く、衣は海草に似たり、之を導者に問へば乃ち曰く、絶食すると十數日、晝は洞中に禪定を凝らし、夜は劔峰の最高嶺に上り、銀河の秋に滴る、珊々の風露に沐し、天上の星斗を禮拜する者なりと、憐むべし、この老嫗、妙法を知らず、眞禪を悟らず、苦行を以て邪教に殉せんとする者、知らず是れ誰家の女ぞ、今日邪教全く絶滅せず、時に此種の人を見る也、

北麓を周くりし時、數名の行者と偕にせり、西湖、精進、本栖の諸湖に至り、皆衣を解き、清碧寒玉の如きの湖水に浴し、水中に立ち合掌呪を唱ふと多時、而して余は精進の湖岸を周り、鶯宿嶺を越へて甲府に赴かんとし、彼等は人穴角行の墓に

詣て、又た白絲瀧に身を淨めんといひ、半途にして手を分てり、此の如きは昔日の富士行者その儘の者には非らざるべきも、猶ほ五十歩百歩の者にして、其臭味を帯ぶる者と知るべし、其他沿道茶店の前に、飄翻する水色若くは柿色の小旗に、登山何十何度と銘打たせたる猛者達は、疑もなく亦此種の徒なるべし、

思はず筆を岐路に馳せぬ、幕府時代に於て富士講の盛行するや、惡弊百出、而して數度の制令、猶ほ之を禁遏する能はざりしも、維新後に及び、泰西の新潮我國に入り、民人の思想幾分の進歩を來たし、或は急激に過ぎて、信仰をも擧げて破壊したるとあれど、兎に角富士講の如き邪教は日に増し萎微廢滅に瀕せり、たとひ登山者の數は減少せしとは見へず、登山者の服裝、講中組織の外貌共に依然として舊の儘なれども、迷信の度漸く薄らぎ、苦行など爲す愚物は殆んど見るべからず、富士詣を名として行樂的の巡禮をなすと一般の風習なり、これまで記し來りし富士行者のとは、未だ盡さる者あるも、細述すれば冗長となるの恐れあり、因て姑く此に止め、今日之行樂的巡禮者に付て一言し、以て此篇を了らんとす、

行樂的巡禮者の富士詣は、伊勢參宮などと同じく多半は遊興巡覽の意に出で、必ずしも執念なき信心によりて然るにあらず、想ひ見る五風十雨、年に凶旱なく、新稻田に満ち、翠浪渺々として、秋成の饒豊、期して待つべきの時、徒に長夏無事の日を消さんも如何と思ひけん、村家の少年三々伍々相聚り、時には數十人の多きに達し、經驗ある者を先導とし、登山を終局とし、傍ら諸處を見物せんとて鹿島立ちすなり、彼等の中最も多く旅行する者は、先づ房總常野邊より來り、東京に入り、輦轂の下、百萬の人家あり、樓觀の美なると、街衢の賑かなるとに驚き、淹留數日、大方の見物終りたる後、更に行を續き、甲州街道を取り、高雄山に詣て、猿橋より左折し、吉田に出て、登山し、絶頂の巖窟に一宿し、天雞一聲、五更の朝旭海を出て、時に水蒸氣の作用にて兩日天を争ふを見れば、其驚きや如何ならん、彼等絶頂の内院を周く、るの際、火坑の深きを見れば、知らずくの間、造化の不可思議を感ずるとあるべく、かくて後に山を下り、足柄を踰へて關山の最勝寺に詣て、大山に登り更に進て江島鎌倉に一遊して歸村するなり、彼等は割合に吝ならざれば、到る處講中の定宿にて

存外に歓迎さるゝなり、江島稚兒淵にては蘇峰氏の所謂誦詐漁郎に數錢を投するを惜まざるべく、水底に潜ると一、二分、數枚の石決明を捧くるを受けて、欣欣たる、げに知らぬ者こそ佛なれ、而して彼等は歸村の後、其意中の人に贈らん爲め一錢に二三本の貝の釵、買ふとも忘れざるべく、鎌倉長谷大佛の體內に入り、金石鎔くる酷熱の爲め、蒸さるゝ如き思ひをなしつ、草枕十數日の旅寢して、黒き顔のいや黒々となりて、恙もあらで歸る時、萬頃の青田、稻花の風に薫するを見れば彼等の喜び知るべき也。要するに彼等は費す所少くして得る所多き者也、無知文盲の彼等に於て、其見聞を廣め、知識を増し、且つは幾分趣味を高むるは全く此等の旅行に由て然る者どす、已に幾分自然の美を解するを得ば居常熙々快適、猥穢の煽惑挑發を受くるとも少なかるべし、而して彼等の巡禮の個所は富士のみに限らざる也、此の如くなれば今日の富士講は舊日と異にして、絶て弊害なしといふも可なり余は此の行樂的巡禮の益々盛ならんとを望む者也、然れども鐵軌四方に布かれ、交通の便日に増すの今日、彼等までが、時は金に換へ難しと思ひてや、御殿場にて下車し、中

畑新道を取り直に歸る者多く、折角の美風を失ふに至らんとするは歎すべく惜むべし、

關守の月代青き裕かな
五月晴門の柳を伐りすかす
子規逆巻く利根の水馬し
徳利から醬油さしけり心太
笹舟をよけてのぼりぬ水すまし
俯向て疾く煙百合に照日かな
人まれに蝙蝠飛ぶや夕薬師

豆南遊記序

東海散士

熱海梅園盡處、沿溪而上六七町、有一茅廬名曰磊々軒、取其地名三石也、

皇太子殿下 曾三抔 青巒、此僕卜隱棲之處也、廬臨崖角、崖下有飛泉、三層各

成潭、自第三潭仰之、合成一大瀑、白練萬條、斷續紛飛、青巖激怒、飛沫噴霧、

蓋龍門之小者、列伊豆名區之一、傳云源右府之所釣遊、瀑名片腹鱸、右府垂釣獲

鱸、自齎其半身、祝曰大事可成則此魚蘇矣、魚潑刺躍入淵、故有是稱、僕嚮自計

病不可起、自剗除草萊、抖擻此廬、最好聽泉、且昔者蒙茸之地、佳林茂、脩竹秀、

奇石出、可以娛與如之目、東瀛一醉、七鳥依稀、海雲之變幻呈奇、蒼波之吐紅暎、

水輪之與潮湧、可以洗曠如之懷、寄傲優蹇、品山評雲、鳥啼花落、人間之外自有

南面王者之樂也、惜哉當時不遑引我兄而賦之記之、遂使名著脫一名區、貴著太備

矣、故臨奉還此卷、聊記之、豈敢自讚我廬哉、

村居謾筆

藤村

樂器を抱いて吾窓に寄るものあり、彈ずるものは彼、聽くものは我、彼は追ひがたき窮鬼に迫られて日夜路頭に行暮し、音調を上下して哀を人の門に乞ふものと見たり、明らさまに吾心を言はんか、我は屢々音樂に耳を傾けしことありと雖も、かくまでに深く、かくまでに悲しく、音樂の人の心を感じしむべしとは思はざりき、彼は路頭の人、嘈々切々として破れたる樂器を彈ずるのみ、彼と我とは何の縁故あるにもあらず、されど其樂器を彈ずるに當りてや、かぎりなきの哀みとかぎりなきの味ひとを吾心にもたらせり、

吾性深く音樂を愛す、頃日早稻田文學の紙上に於て音樂美の價值と題する一篇を讀み、極めて親切に音樂の妙所を説かれたるの勞を謝す、蓋し音樂の美なるものは抱月子の優麗なる筆を以てしても猶其妙味を十二分に説盡する能はざるものなるべし、説盡する能はざるものは是れ其妙味なるべければなり、音樂は以て最も深く人心

無限の悲哀と憂愁とを寫すに足るべきものか、我は平素この意味にて故郷の如くに音樂の美を慕へるものなり、されど樂人の飄零してかぎりなきの思ひを吾窓にもたらすや、たましく寫すべきの悲哀は遂に寫すべからざるの憂愁を深からしむ、言ふべからざるものは人の心なるか、嗚呼々々言ふべからざるものは人の心なるか、我は白面の一書生、微々たる觀察を抱いて人の心と名のついたる靈池を逍遙遊すること、獨り言ふべからざるの迷境に彷徨するのみ、

吾村舎は三輪の片田舎にありて、庭前小池の眺めに乏しからず、草花をもしるべき亂るゝあり、春星動いて水に映するあり、明月皎として池心を射るあり、青葉波に浮び水草蓄を發し、白蓮紅蓮風雨に飛動する時は、電光一闪、花も燃ゆるが如く、水も跳るが如く、忽ちにして又日深く花暖かに水澄み草靜かなり、同じくこれ庭前小池の光景にして、清又濁、明又暗、たのしさ、かなしさ、うれしさ、をろろしさ、互に行き互に來りて片時も息はざるものに似たり、其深さを何尺と量るは庭前の小池に於てこそ爲すべけれ、人心の靈池は其深さを何

尺何寸と測ることを許さず、晝には晝の日あり夜には夜の月ありて以て吾村舎を圍める池心を透視し得べきものとせば、吾は又人心の靈池を見て空虚無住の假宅の如く隨て映じ隨て轉じ遂に一物をも止めざる空鏡の如くに想像する能はざるなり、

我はしばらく吾窓前に落魄彷徨する樂人と手を携へて、この靈池のはどりに踞し、深くも吾心を感じしめたる彼が音樂を通して、靜かにこゝに活動する心猿の聲を聴かむ、

かなしきことかなしきこと思はず、樂しきこと樂しきこと思はず、めづらしきことをめづらしきこと思はず、をもしろきことをもしろしきこと思はず、哀しきこと樂しきこと思はず、自ら敬し自ら得たりとする人は冷やかなる墳墓と何ぞ擇ばむ、墳墓に何の哀樂かわらんや、墳墓に何の憂愁かわらんや、墳墓に何の苦悶かわらんや、かゝる人には別離も心を傷ましめず、流轉も身に迫らず、かゝるところに來りて池水遂に空虚なりと言は、誰か其大早計なるに驚かさらん、

容儀、禮節、これらのものは吾等に與へられたる高尚なる利器なり、以て身を脩む

るに足るべく、以て自ら飾るに足る、これらのものは皆優美なり、以て蕃野なる性情を包むに足れり、然れども非常なる苦悶を驗し、悲惨なる境涯に陥り、沈鬱憂愁、晝は晝の哀みを嘗め、夜は夜の苦みを飲み、彷徨躊躇して泪多く零つるに至らば、容儀も修むるの暇あらず、禮節も守るの餘地あらず、枕をたゝいて終夜眠むる能はざるに及んで池水活動し心猿悲鳴す、

「ビーナス、エンド、アドニス」の作者は妙齡の美女と美少年とをして萌ゆるばかりの青草のうちに彷徨せしめ、これに對してアドニスが牽ける若駒の戀を寫したり、新緑を履ひで揚々として長驅せし若駒も、一旦雌馬の姿を見ては、轡を噛み手綱を切り、鞍を投じ、ありとあらゆるものを放擲し、己が主人公をも後に捨て、また顧みざるに至りては、鬣長く立ち、眼腫火の如く燃ゆ、鼻の息は吹き出づる湯氣に異ならず、或は風に嘶き、或は遠く走り、歩武飄々として奔逸飛躍し、温厚にして秀麗なるアドニスと雖も亦彼を如何ともする能はざるよしを言へり、青草野花のうち

Wildeness なる性情は古來人心に彫まれたる最も深き刀痕なり、我はかの心猿の悲鳴するよしを言へり、ものぐるはしきは其姿なり、感激せるは其情なり、飽くことなきは其慾なり、哀しきものは其聲なり、其動作は頗る笑止なるに似たれども其心情むしろあはれむべきもの多し、容義禮節の美なること花の如きは僅かに皮相の觀にして、人間の内部にはかゝるわやしき心猿を宿せり、人心の容易に言ふべからず寫すべからざるは蓋しこれが爲にあらずや、

この心猿は極めて傲慢なり、彼は極めて執着深し、彼は極めて不平なり不満足なり、時として彼は一切の我といふ柱を放れざるにあらず、然れども微笑して再びもとの柱に歸る、彼は人間一個々々の中に入りて其帝王となり、其頭は多く屈すべからざるものとなる、

嘲弄の鬼彼に戯れ、冷笑の魔彼を弄し、言ふべからず語るべからざるの恐怖は絶えず彼の後を襲へり、彼の傲慢はむしろ悲しむべき傲慢なり、彼の執着はむしろ苦しき執着なり、彼の偏執は偏執に止まらず、時としては狂妄となり惑溺となり、沈酔となり、盲目となる、

彼は決して愚なるものに非ず、目あり耳あるこの心猿は容易に人生の表裏を看取するの明あるものなり、彼は不満足の目を以て過去幾千年の間聖賢が遺されたる事業の塵埃に化し去るを見るや、時としては物狂はしき迄に號泣せり、露の如くにしてうせ春の華の如くにしてうつろふ人の世のさまを見ては、彼は決して眠むると能はざるなり、凡ての女神も凡ての聖賢も凡ての警察官も悉く熟睡して知らざる間、深夜彼獨り跳起して、文明が吾等に贈れる花の如き容儀と禮節とを奪ひ、夢に彼等に人生の沈鬱なる悲劇を示し、過去に服従するの卑劣なるを笑ひ、更に今日の味ふべきを教へ、自由不羈を激賞して、昔人は昔人の自然を駕御せり、よろしく今人は今人の眼前に横はれる自然を握り、今を用ゐ、今に駕し、新人となつて新衣を纏ふべしと言へり、彼自ら狂せりとは思ひながら他人の彼を狂人と呼ぶを聽いて満足なりとせず、彼自から愚なり痴なりとは感じながら、他人の彼を痴漢と呼ぶを聞いて極めて満足なりとせざるなり、

彼は學べり、猶不満足なり、彼は樂めり、猶不満足なり、彼は厭へり、猶不満足なり、彼は笑へり、猶不満足なり、彼は聲を揚て泣けり、猶不満足なり、彼が心は言ふべからず語る能はざるものなり、樂みといふ語も、笑ふといふ語も、満足といふ語も、不満足といふ語も、未だ以て彼が心の萬分の一だにも寫す能はざるもの、如し、

かなしいかな予は哲學と法律と醫學と神學とを修めたれど、猶愚なること始の如しと叫びしものは誰ぞや、明日は、明日は、明日は、げに人の世は斯の如き言葉を繰返すに過ぎざるのみと涕泣せしものは誰ぞや、桃の花のさくころには卯の花のさくころともならばと思ひ、蓮の花のさくころには萩の花のさくころともならばと思ふ、

Ev'ry youth for love's sweet portion sighs,

Ev'ry maiden sighs to win mans love;

Why, alas I should bitter pain arise

From the noblest passion that we prove."

いかなればかゝる尊きころより、いたましき悲しみの湧き上らんといふに至りては、至情の寶珠を抱けるにも満足せず、別に、別に言ふべからず寫すべからざる苦悶の人間各自の心宮に潜めるものありて、おのづから斯の如きの聲を發せしむるにはあらざるか、

春の舍主人が好んで逍遙し給ふと聞く底知らずの湖のことは知らず、元祿の昔一匹の蛙飛込みしより今に至る迄幾萬の蛙飛込みといふ古池のことは猶更なり、我はただ樂人と相携へてこの池のはどりに彷徨し、樂人をして嘈々切々たる一曲を彈せしむるを樂しむ、



旅のつれ

破 蓮

●高野登り

旅は常なきを常とする世の姿に似たるべく、人はげに天地にさまよふ旅人なり、世は友なきころ淋しくとも袖に忍べる匂ひしあらば旅は獨りこそいみじかるべしと出立つに、燃ゆる心の苦るしさをいかにせまし、寶鏡三昧を旅の友として亂れ心を禪境に沈め多くは死灰と成りて路を往かんとするに、生憎忍びやかなる哀れの胸に迫りてたゞ雲の上を走らするようなり、(中略)

熱田の社に詣で、四日市へと渡るに雨さへ風さへいたく荒れて海すさまじく鳴る、さまざまの事思ひ出で、身の愚かなるを顧れば去歳の夏ころ一しほの事に覺はゆれ、(中略)よるづの苦みを懷きて禪窟に身を投じつ靜かに人世を眺めて白眼瘦骨の人と成り冷靜の悟道に一生の血を欺かんと思ひ立ちしも枯寂の門を出れば再び又煩惱に責められつ終には病ひに倒れたりぬ、いてや此ま、憤りと悲みとを抱いて埋も

れ果るころ人に知られで心やすしとまで思ひしが、激流すさまじき淵を眺むれば靜かなる水底深き所に光りて見ゆるものは死といふ文字のようなり、只管これを眺めて餘念なきに煩惱いつしか打散して靜なると言ふ可らず、心は廣き空を歩むように勇み暮せしが今年花を旅に見んとはよるづ思ひもろけぬ世のさまなり、(中略)

須磨寺は名さへ懐古の思ひするに源氏の古跡と標したる所あり、之れも亦風流の戯れとおかしきに、わが身かくてはかなき世を別れなばいかなるさまにさすらへ給はんとどうしろめたくなと言ふ須磨の巻を思ひ出られて風趣いふ可らず、やがて翁の塚に苔を拂ひて敦盛の墓に少壯多恨の青葉の音色を悲み、百花青草一時に枯落せる平家晩年の偉觀を遠く波間に眺めて人事の蹉跎を思ひ、去て舞子の濱に古松の舞ひ躍るさまなるを見る、明石の濱は彼方ぞと打見たる物語りの明石の媛のと思出で、箏かき鳴らし給ふ姿もいみじきに哀れ深き心のさまも慕はしく夕顔の局を櫻のあはれなるに譬へなば之れは白き椿の品高き面影をゆかしむべし、あえかなる紫の姿にい

ける世の別れと知らで契りしとまで嘆き給ひし君の心をとり静めて、都出し春のなけき劣らめやとまで稱ひ給ふよう爲せしはげに、理りどころ覺えし、(中畧) 眞如の月高く懸れる鷲の峰に結縁求めんと紀の高野山深く分け登るに昔し荊萱の沙彌を戀慕ふて旅の露と消えにし君の哀れを残したる宿りへともものす、これも怪しき旅のすさみなるべし、

溪の流れ潺々として林の苔ものふりたり、不動坂險しからぬにあらぬも慈悲心鳥の聲おかしく心耳に響きて靈場の山路足もと重からず、罪深き者は此靈山を登るに足重もりして終には歩めぬ者もありといふ道連れの法師を捕めて佛家の風流談は兎も角も紅爐焰上飛雪を看るの觀如何と聲昂りて思はず山中に同行何人を怪かしぬ、幽邃閑雅の色さびて有繋に佛徳の恭けなきをも仰ぎつべし、女人堂今は荒れたれども古色すさまじくして本山に入る者思はず杖を停む、惜むべし近き頃祝融の災に罹りて山房過半烏有に歸しつ、さしも莊嚴華麗を盡したる多くの房院跡方もなく又古への様に似るべくもなし、山房に養はれたる町々家は尙ほ大師の餘徳に因りて

軒を聯ぬれども之れも衰えたるを啣つめり、此山の役所は吾が知れる友の預る所なれば之れを訪ふて暫らく今昔の物語りに耽る、此際の清思は正に是れ、數聲の清磬是非の外、一個の閑人天地の間、底の感あり、奥の院へ入れば古豪名藩の供養塔大さを争ひ古きを競ふて碁布する様悲き譽れとも言ふ可きか、忘れてもといふ紀の玉川涸れくにて御廟の橋も物さびたり、蛇柳おろろしげに枯れ立ちて妬み妻の枯骨とも見ゆべく罪の影を映さじといふ姿見の井戸水澄みて少女の心とや酌むべからん、長者の萬燈一堂を熏べて貧の一燈畫尙ほ焰の命あるに似たり、世の慘劇を閉籠めたる骨堂に詣れば鬼氣身に迫りて累々たる老幼の枯骨動めくかと思はず袖を濕はす、無限の心に有限の姿を忘れざるこゝろ人の心なるべく、果敢なき世に果敢なき迷ひを描くこと人たる者のおかしききわならずや、枯淡の語りに入事を輕んずるはようなきとなり、よしや世を通るとも人事疎そかなるべきかはなど獨りごつ、老杉高く空を磨りて鬱蒼たる眺め自ら大師の廟所もいやちこにて漫ろに古豪の心を慕はしむ、名にし負ふ吾邦第一の佛場にて古來他宗の門徒も多く此道場に來らぬはなしと

いふ、エルサレムの古へも忍ばれて心いよ／＼清まり惶む程に、父母のしきりに戀ひしと袖を濕したるを蕉翁の碑古りたる見つ、いと哀れに堪へずなりぬ、此夜は普門院といふ坊に宿るに深山の夜のさま澄みわたる音して清澄雲外の思ひたいならず、果は胸冷ぬ入るようにて氣のみ澄みゆく、静かに心影を搔起して心に抱けば我れにもわらず悲しくて又更に煩惱の百鬼は室内に群がりつ万丈の奇氣を吐き來るに憤慨胸は煽となりて暫らくは山精の聲を聽かず、(中略)戸隙颯々の聲ある時夜は早や靜かに明け離れたり、

●芳野往き (四年前の手記)

野衣には薛葉を裁し山飯には松花を晒すの風流はなくとも春深くして愈々好き芳野の奥を探らばやと先づ鎌倉の里に入るに透谷庵こゝに追來りて一夜の物語りに苟且の別れを惜む、年少壯氣に任せて強て春に遊はんとするに自ら風光の身に屬せざるを覺ふと唧ちし白氏の物語りに夜を更すに痛恨の氣胸に迫りて豫てより芳野に山籠りする古藤庵の心を悲む程に透谷筆を執りて門立を祝す

滿山の花のいのちもはえうある……たゞづむ人の心しるさに、

爰に至りて筆また動かす、眉宇幽かに曇り來りて忽ち一叱筆を更むるを見れば

骨二つならべて埋まれ花の塚

こともおかしやと酔人の興がるにも似て人生まことに悲夢の覺めつ覺めざるにも似たりと暫し言葉もなく互いに顔を見合すに目のみ怪うなりて萬感身を襲ふようなり、一機忘じ去て是非盡き万法空じ來て體用歸す、さには非ずやと哄笑して筆を執れば透谷亦黙してこれに次ぐ

喝破一番こゝに味はふ茶漬めし 天

こゝろ盡しの鹽のあはさよ 秀

はかなきわさくれに夜も明けたれば互ひに友の安きを祝して袂を別つ (中略)

西に木を伐る音東に響き院々の鐘の聲心の底に答ふると今も尙ほ變らずして一目千本といふ傍りは谷と言はず峰といはず濃き淡き花ども競ひ咲きて目をも心をも奪ひぬ、杖を停めて旅の思ひを忘れ目をかすませて落花のさまをいとしむに身は塵外の

山中に在りながら復た既に清虚物外の魔に墮ちたるを愕きぬ、昔し義光が宮に代りて戦死したる跡を吊ひて溪を下れば流れ漾々として花の影錦の如く映らふ、黄なるものは敢果なき心を恨むなるべく蒼きは片思ひに艱むにや、耻かしげなる淡紅るに尊く閑かなる雪の色は若き上臈の物思ふにもとめでたし、さまざまの花瓣風にゆらめきて散りばふさま袖に拂ふも忍び難きに流れに落ちて搔流され往くころ末はいかにと悲きようなり、嘉藏院に小楠公の記念なるあつさ弓の歌を見ればさすがに其かみの心思ひやられし健かなる筆の跡もめでたく、如意輪堂今は無けれども辨の内待が悲き心は今尚ほ残れり、後醍醐帝の山陵に詣ればたのむ木陰に雨もる大御心をさへ惶まれて憤りの涙に暫し歸るを忘れぬ、

吉水院に九郎公の籠れるといふ跡を訪ふに、部屋の造りさま當時のまゝなればいとしきは又一しはにて宿直どころより上壇の造りさま、さては板着けせる敷居に大簾の深く垂れ込めたるなほぬも言へぬ心地す(中略)

唐土の庵山に比ひしもげに理りと見つゝ尚ほ山深くへと分け登るに塵氣いよゝ遠

ざかりて鳥の聲谷に響き亘るも心を洗はるゝようなり、彼の清涼の野寺に遊びて自ら容鬢の上に猶ほ郡庭の塵を帯るを慙ちたりといふ吏人の風流心に浮びて吾が俗氣に慙づると甚し、峰を亘りて左の細徑を分け下るに二丁計りにして苔の匂ひ閑かに薫る、彼のどくゞの清水爰に細く流れ出で、傍らの岩を見るに、こゝろみに浮世すゝがはやの匂を彫付けたり是れを見るに異境に古人と談らふ心地して僅かに喉を濕はせば又も生憎世のさまを思ひ出づ(中略)

尚ほ深く廻りゆけば谷を三方に周して屏風の如く山々を前に控ねたる所に古たる形計の庵あり、西行庵之なり、昔しの跡計りをも残さんとして風雅に志ある者の建てたる也と云、西行櫻は古りて軒端に近く花ふりかゝるに此庵に据ねまいらしたる上人の像は温容悲げにて活き給ふが如し、功名の衢に燃ゆる様なる望みを抱き給ひしも花の薫り月の雫に狂ひ心とめ難く過急の務めにあはたしう世を背きて此山に入給へば忽ち花に觸れて万感の漲るように溢れ出させ給ふ爰に山家の集を繙けば圓位が花の狂ひ心身にしみて今年圖らず花の影に上人の姿を拜みたるも結縁淺からぬ

故なるべく、我も末世に其香を拾ふて大かたならぬ哀れを見しにいかで花の筵に侍らして我れも花の下に死なしめ給へど圓位が像の前に坐すれば今昔の思ひ身に迫りて春の日も漸く暮れなんとす(中略)

此夜友と談らふにくさくさの悲き物語りを聞きつ、敢果なき思ひに打沈みて憂きには漏れぬ花の雫を酌みかはす、學びの窓に志を立てしより爰に幾歳、何學ばんとて多恨の世に出で來りしか、何事も思はで其頃の儘なりせば心易く今日の營みに人並々の譽れを得て門を高うし名に誇り、親しくをも喜はし自らも心易く稚見の猛者に世を暮さんに、なまじ書を讀み人情の秘奥に觸れしころ惑ひの種子なれ、思ひし望み打捨て、苦くも思はぬきわにさすらふこそ怪しき夢の露にこそあらめ、げに移らふ心のすさまじくもあるかな、いつまでか斯る心にてあるべきや、いかで是れより心を破りて暫し涙を浮世に預け世の營みに悲き夢を打消して人の目吾が心を欺きてんかど敢果なき事まで繰返す夜もすがら思ひにくしてあらぬ事まで思ひ出で、果てはいかなる夢にか泣きし(中略)芳野山思はぬ露にぬる、かな木の下やみに花を

たつねて、

悲き山に探ね入りていよく花の露を擔ひくなるに芳野川白く流れて櫻の渡し淀みなく、水こそろなくして往く人を止むるにも似たり、心はいと破れしようにて堪へ難く走るか如くに道を辿り鬼に追はれて只管入京の日を急ぐ、



湖心亭の記

酒 竹

煙翠扇を開く清風の曉、其眞興は吾等既に見あきたり、見たきものは日盛りの蓮、黄昏の玉葩、いでやくと俱に連立て小西湖心の一亭に入りし者は、烏黒と愚佛と吾と、時は方に正午十二時、而て風蓮は槿花の如く脆き者にてはあらざりき、汗にしみたる衣は心地悪しとて、洗ひたての伊達浴衣に着替へ、やがて明け放しの水樓に胡坐すれば、げにや身は羽化して仙里に遊べる者に似たり、漫々たる水面熨すが如きかど見れば、颯々たる涼風吹き來りて小濤響き幽に、吾等盛暑の中心にありとしも覺えず、卷荷は既に舒びて、淨綠娟々一碧際なし、

卷葉浮葉其中に突つ立ちぬ蓮の花

烏 黒

蓮の葉の皆あちら向く嵐かな

どかくする間に膳の用意も整ひぬ、池に臨み酒を把り、筆を嚙んで名什をひねる、蓮の葉のたわむ時蟹の這ひ上る

烏 黒

さゝ波の中や一むら蓮の花

同

古池に蛙經よむ花芙蓉

愚 佛

老夫婦蓮を見てゐる念佛かな

同

南無大悲蓮花咲く風も吹く

古寺は日たゞ蓮の香ばかりなり

清香澹々として酒氣に雜り鼻より腦に入る、時に愚佛大白を擲て一喝

酒の香は憚りあらむ蓮の花

愚 佛

と謙遜したる處、大々の得意なりしが、其身はもはや愚佛のそれならで南無醉愚佛と化身して

陶然と淨土に入りぬ蓮の花

愚 佛

どうなりながら、深般若の眞空中より證得して無上正等覺に入りしぞめでたかりける、

愛蓮の説をものせし唐人は誰にてありしかとの我が問ひに、兩人とも不圖忘れてさ

ればくど中々に其名をひねり出し兼しうち、驚破我名句を御覽じろと靈紙に黒々と書きつけたるは、

蓮の主字茂叔と申しけり 烏 黒

といふ名句なり、かくいばられし時、我は烏黒が今少し若かりせば其鼻の頭をつねつてやるべき筈なりき、

花開いて十丈藕船の如しと古も人蓮を形容したりけん、げに美錦の如く彩雲の如く嬌として語るが如き思ひあるを見ては、潘妃が歩々蓮花を生ずと聞きし東昏侯がなさけも想ひやるべく、翠蓋珠を跳らし紅膩楚々として美人の新たに浴を出るが如きを見ては、蓮花に似たる六郎が姿貌もかくやと、渾身爽然として愁腸を洗ふが如し、此より次いて各々吟懐をしばれば咳唾皆齒昔の珠となる、

蓮の香や大師の筆の蹟匂ふ 愚 佛

風蓮や墨染衣ひらりく 同

龜の甲にへばりついたり花芙蓉 烏 黒

傳に曰白蓮は紅蓮の化身とぞ

蓮の葉の上に半身の美人かな

蓮の葉に鳥とまりあへぬ面白や

魚躍て蓮あはれ折れたらん

古寺や唯白蓮の唯白し

既にして日は眞赤に向が岡の方へ沈んで、暮色靄然、蓋玉葩の裏より入る、暝烟四合して微風起る所、異香襟裾を掠めて肌骨に透るを覺ふ、すなはち席をすて、浴に入り、更に樓角の一室を占めてまた飲む、

白蓮の醜顔に匂ふ夕かな 愚 佛

幽靈は化粧して出よ蓮の月 同

さらばや今日は立秋にてありけるよ、いかに蓮の匂ばかりひねり出さんば、露收の神に對して本意なきわさなれとの、烏黒が發議に動かされてうれより初秋の發句を案ず、時に下婢が山の如くに盛りて呉る、蓮飯に、太平の腹を叩いて轉た成佛の想

あらしめたり、

蓮飯の香薄らぎて秋立ちぬ

鳥 黒

寛永寺鐘から秋の立初めぬ

同

立つ秋と聞けば成程左様かな

同

蓮の葉の少し破れて秋立ちぬ

愚 佛

蓮荒れて湖心より秋立つらんか

同

鳩鳥のひよこりと池に秋立ぬ

同

蓮破れて辨天堂に秋ぞ立つ

立秋の漣いとど青きかな

ほうんとうなる上野の晚鐘、たしかに入つまでは聞ひたり、餘香を留めて袂別各家に歸る、風蓮また露に和し嬌びて力なかりき、

立秋の大鐘つくや瘦法師

磯うつ浪

佐々木信綱

春の歌の中に

九重の御かどのまへの小松ばらあしたのどかに春風のふく
故さとの籬の野べやいかならむ草も萌ゆるらむ蝶も舞ふらむ
長閑なるあしたの庭に弓射れば驚ろきたちてうぐひすの鳴
風うひてうぐぐこよひの春雨に花は跡なくならむとすらむ

遊 糸

佐保姫のかすみの衣はるの野をぬふが如くも遊ぶいとかな

春 海

岩の上に鷗ねぶりてあらしほの汐の八百あひも霞む春かな

安房の國にありける頃

うばら咲く里の垣根も見初てあけゆく小田に水鶏鳴なり

秋の歌の中に

わさいづる雲をちらして足引の山の高嶺にあきかせどふく
はるくと雁は來にけり海越てゆきけん人をおもふ夕べに
さぐれふむ小鳥の聲も秋たけてわたらせ川の音のさむけさ
人かげもしばしどだねて淺草のみ寺さびしきあきの雨かな
つゝの音の遠くさこねて小山田の秋の果ころさびしかりけれ
たつた姫今とは歸るたもとよりはるくとちる村紅葉かな

禁中時雨

木葉ちる南殿のあたり風たちてさくらをめぐる夕時雨かな

冬 曉

消残るがすのともし火またときてちまたの霜に人かげもなし

樵 夫

ひねもすに歎きこりつむ柴人も歸る家路やたのしかるらむ

拿 破 崙

ますらをの心も千々にくだけとんねるばの島のあきの夜の雨

旅にてよみける歌の中に

もねろめし若くさ山の草むしる春日の神もあそびますらむ
谷ふかく枝をたれたる老まつにかゝれる藤の花さきにけり
箱根山はせゆく瀛車の跡おひてけぶり吹きまく夕あらし哉
駒どめてしばし水かふ川くまの松の絶間に富士を見るかな
わたつみの磯うつ浪の碎けては又よせ來つゝ又くだけとり
船の動きはげしく成ぬくらき夜のなだの浪風荒らくふくらむ

折にふれたる

うなる子が小石投入るゝ川のせを蝶二つ三つひれて飛ぶなり
くれてゆく空の名残の惜きかな再あはん今日にしあらねば
わが身世に生れいでての嬉しさは人のやつこにあらぬなりけり

何とかやいひけん島のつちくれを神ともいつく世にころ有けれ



詩歌における音意の諧調

武島 羽衣

詩を作るべき要素に三あり、曰く實質、曰く文体、曰く聲律、言を換へて之を言はば、則ち Pneumatic 及 Linguistic 及び Rhythmic との三元素なり、詩歌中に起るべき思想と、詩歌ならざる文章中にをこるものとの間には、さやかなる區別あるは更にも云はず、其文体並に聲律につきても、言語修飾の使用上、あるは音韻章句の排列上、兩者相混すべからざるの特質を存せるは、何人も知る所なり、而して今こゝに述べんとする聲と意義との諧調とは、やがて此第三要素の中に屬するの一事なりとす、

るも人間の聲音は、實に無限なる種類と段階とを有す、吾人が日常、歡樂悲哀、あるは苦痛、あるは哀願を表はせる聲音の變化につきても注意せよ、Explosives の鋭げなる、Liquids の滑かなる、あるは母音の流暢なるなど、其精緻にして巧みなる配合は、よく人間が萬般の感情を、洩れもなく十分に言ひ現はすを得るにあらずや、

これ聲音の各種類には必ずや、ある一種の性質を備へて、以て之に適ひたるある一種の事物感情を言ひ現すに足るものあればなり、
 されば、吾人は、高橋殘夢一輩のごとく聲音の各種には、各離すべからざる固定の特質ありなど信するものにもあらず、ホイットニーも、各種の聲音には、*Natural and inherent significance* なしと言ひたるごとく、吾人は固く、聲音と事物感情との間の必然なる關係を否定するものなりといへど、只各種の聲音が其性質上、外圍の事物の形狀性質と相類するの時、其聲音が、最適當に、又最判明に、其事物を言ひあらはし得べしといふに過ぎざるのみ、一例を擧げていはし、いなる音は、其性、軽くして、且短く發音せらるゝものなるが故に、おのづから小にして細かき事物を現はすに適し、(ちいささ、ちつとの類)あなる、音は極めて平易に、何等の障碍發音もなくせらるゝがため、自然苦痛愁歎、其他自然の感情を現はすに適し、(あはれ、あな)の類)あるは、ろの音は、口中の空氣を外部に吐出するごとくにして發音せらるゝよりおのづから、最よく外圍の事物を指示するとき性をそなふることし、(それ、その、

ろこなどの類) (ホイットニーの説の詳しきことは、其著 *Language and the study of Language*.
 他、宇田甘冥の本朝辭源、あるは竹内布久の五十音分生圖なども見るべし。)

かゝる聲音の性質を利用して、之に適したる外圍の事物を現はし、以て人心に與ふべき感激を、成るべく巨大ならしめんとするは、詩歌に於て最多く見る所なり、また、詩歌中にも、自然界の音聲などを云ひ現はす場合に於て、殊に最効力ありとなす、かの所謂 *Onomatopacia* なるものにして、例せば風のねを「そよ〜」鼓の音を「ちりたり」雁がねを「かり〜」などいふがごとし、Bürger の Lenore に、
 奔馬の音をうつして、

Und immer weiter hopp hopp!

といひ、あるは Ovid が蛙の鳴聲をいひて、

“*Quamvis sint sub aqua. sub aqua*

maledicere tentant”

など、ヲノマトポエイアの巧みなるものなり、蓋し、詩歌は、色彩なく趣味なき抽

象的の談話にあらず、散文は、單に、意義をだに通達すれば、其能事終れりとすれど、詩歌は必ずや行墨のうち常に具体的形象を現はさんことを勉む、されば、詩歌に用ゆる言語は、そを只にシムボールとして用ゐんとするとき常軌を離れ、外圍の事物の状態に類し音聲に類するとき聲音を撰びて、成るべく言語に、指示的繪畫的の力を與へ、以て唱誦の際、風光事物をして、おのづから眼前に髣髴たらしめんとするの傾向あればなり。

さてこの單純なる Onomatopocia、即ち只一事物の音聲を真似ることより進みて、數語以上若くは全体の文章に渡りて、此音意の諧調あらしむるときは、吾人は、一の状態舉動あるは複雑なる風光などをさへ、宛然として、楮表に躍らしむることを得るにいたるべし、これぞ、詩歌に最須要なる一點にして、古今東西の大詩人は、いづれもかゝる諧調に注意留心せざるものはあざりしなり、されど、これにもまた一定の度あり、もし限りなく、一言一句にいたるまで強めてこの諧調を求めんとするとき、遂には兒戯に類し、彫蟲に陥るべきこともまた忘るべからず。

今左に、この諧調の二三の例を擧げんに、總じて、ら行の各音は調和優美なる心をあらはすものなればこれを多く用ゐたる章句は、またおのづから、優美調和の心あり、テニズンの詩に、

“Morn, in the white wake of the morning star,
Came furrowng all the orient into gold”

とあるがごとし、また發音に困難なる子音濁音などを多く用ゆるときは、自然章句をして、險艱澁晦ならしめ、時として、莊嚴偉大、あるはするどく、あるは恐ろしき心を添ふることあり、たとへば、方丈記に

山崩れて川をうづみ海かたぶきて陸をひたせり土さけて水わきあがりいはわきて
谷にまろびいり……

とあるごとく、あるはシルトンの詩中に、

“Grate on their scranuel pipes of wretched atraw”
などあるごとし。

グレーがカントリー チャーチャードにて、ものしたる哀詩の劈頭に、

“The loving herd wind slowly o'er the lea”

とある一行を読むもの、誰かは夕ぐれかゝる田舎の風光の、静寂として身にしむものあるを覺ゆるらんや、これ蓋しこの詩中に數多く用ゐられたるr、rなるリクイツドの性質が、物靜かにして事物の緩慢なる状態を寫すに適當し、ために、最よく音意の諧調を得たればなるべし、またシエークスピーアがキンググリーフに、洪濤怒浪のありさまをうつして、

“The murmuring surge

That on the unnumber'd idle pebbles chafes”

とあるときも、また頗る聲音の使用に巧みにして、吾人をして磯ひやく荒浪の、只このもとによりくるの感あらしむ、ことに、ミルトンが失樂園に、地獄の開門の折の状態を叙して、

“On a sudden open fly

With impetuous recoil and jarring sound

The infernal doors' and on their hinges grate harsh thunder”

といへがことは、まことに大詩人の手に出たるものしく、莊嚴雄大、巧妙いはんかたなしといふべし、

西歐の美學者、詩學者の、かゝることにつきて、早くより研究したりしは云ふも更なれど、日本とても、又古來この點に注目したるものなきにあらず、遠くは、平安朝の中末、いはゆる歌學なるもの、おこりてより、鎌倉時代徳川時代を通じて、其間にあらはれ歌人歌學者のうちには、この音意の諧調をもて、詩歌に欠くべからざるの要素と認めたるもの甚だ多く、そが中には、これもて歌の唯一の目的と定めたるものさへあり、尤も、彼等はかゝる諧調をば Onomatopoeia とか、あるは其の他の名稱の下に、判然、かゝることありとして研究したるにはあらず、彼等は、聲音と意義との諧調ある歌を見ては、慥かに、其諧調の結果の、いみじくして、歌にかくべからざるものなるを感じたり、然れども、このいみじき結果が、果して聲音と意義

どの諧調によるものなりとは知らざりしなり、されば、彼等は、かゝる諧調を總稱して、姿と、なへ、あるはしらべといひぬ、尤も中古にありては、この姿、あるは語路しらべといへる言中にはかゝる諧調の意義のほか、いはゆる續けがら、あるは語路などいふ意も含まれたれど徳川氏の末、景樹の頃にいたりては、このすがたしらべといふは、全く音意の諧調の心とはなれりしなり、公任が新撰髓腦に、すがたころ相かなひたるを歌の最上乘なるものとし、さて「すがたころ相かなひてよまんとことかたれば、まづ心をとるべし、姿といふは、うちさゝ清げにゆへありて、歌とさこと、もしはめづらしくそへなせしたるなり」といへり、彼が、意義の諧調を、暗々の裏に認めたること、これにてもしるく、またその撰らびたる和歌九品中、上々に、「これはことばも、たへにして、あまりの心さへあるなり」とて、

ほのくどわかしのうらのあさきりにしまかくれゆくふねをしうねもふ
はるたつといふはかりにやみよしの、やまもかすみてけさはみゆらん

の二首をあげたり、公任は、何が故に、此二首の秀絶なるかは知らざりしも、只打

讀むの際、おのづから言ふべからざる興趣を感じたればこそ、かく上々の品には定めたるならんが、今見れば「ほのく」の歌中には、かの發音しやすきが爲に、自然流麗の趣ある母音を含むこと多く、又「はる立つ」との歌中には、ま行な行など、柔軟にして長閑けき性ありと見ゆること、Nasal sounds を含むこと多きがため、一は朝靄縹緲たる海中のさま、他はのどかなる朝のあしたの有様と反映して、其間、自然の諧調を得たるによるなりけり、又八雲口傳に「只心詞かけあひたるをよしとしるべし」とあるも、思ふにこれ諧調の心なるべく、あるは、長明が瑩玉集に、

めつらしき心を思ひ得たれども姿はよろしからねばよき歌とはせずことなる
秀句なけれども歌さまたらかなるはよみ人のしはさと見ゆるなり……

清見かた月すむ夜半のうきぐもはふしのたかねのけふりなりけり
此歌ふかき心ももらずことなる秀句もなくかされる詞も見えねどもたゞきよ
げにうるはしくとてほる所もなくいひ下せるもろくのすがたの中にくれ
たる体なり

などあるも、全く姿の清げなること、月光清く冴えたる夜半の景色との相調和したるをいひしにあらざらんや、其他、後鳥羽院口傳に、俊頼が「うつらなくまの、入江のはま風におばなみよる秋の夕ぐれ」とある歌を俊成の評して、これはどの歌たやすくはできがたしといひ、あるは定家が「あきとだにふきあへぬ風にいるかはるいくたのもりの露のした草」とある歌を、まことに秋とだにと打始めたるよりふきあへぬ風に色かはるといへる詞つゞき、露の下草とをける下の句、上下あいかねて、優なる歌の本体とみゆなどあるがごとき、いづれか音意の諧調が、これら諸歌の成功の一部を助けたるに因らざらんや、近くは、景樹が調べを論じて、

こゝに調といふは世にまうけて整ふる調にあらずおのづから出くる聲同じあといひやといふも喜の聲はおのづから喜び悲みの聲は悲みと他の耳にもはかるゝを姑く調といふ

といひ、また

人は人らしく犬は犬らしく何の上にも其語調自然とあらんこと常の談話にも大

やうたかはぬことにて候へばまゝ合點すればやすき筋に候
など、あるは、

調といふはせはしきものにはせはしきか調のどゝのひたるなりゆるきものにはゆるきか調のどゝのひたるなり云々

といひて、古歌中、この調べの最すぐれたるものとして、

春たつといふはかりにやみよしの、山もかすみてけさは見ゆらん

秋風にたゝよふ雲のたねまよりもれいつる月のかけのさやけさ

の二首を挙げたり、彼が、調べなる名稱の下に、知らず識らず音意の諧調よりおこる著しき効力を認めて、ふかく其研究に心をゆたねたること、また疑ふべくもあらざるなり、

この音意の諧調に俱なひて、なほ詩歌に欠くべからざる一のもの、は、意義とミーターとの諧調なり、たとへば、アイアムビツクは、アイアムビツクの特質あり、ダクナルには、ダクナルの特質あり、日本の詩歌にていはゞ、七五、五七、あるは七々、

あるは五々、皆其特質ありて、各用ゐらるべき所を異にせり、されば雄壯なる叙述には、雄壯の調子を用ゆべく優美なる叙述には、優美なる叙述を用ゆべし、これまた詩歌が、人心に興ふる感動上、大なる力を及すものなれば、決して輕々に觀過すべきに^非あらず、吾人はこのことにつきても、やゝ知り得たることあれども、そはなほ後回を待ちて、述ぶることあるべし。



讀書漫言

天涯茫茫生

●讀書論(一) 讀書は思想を練磨し整へし人間を高尙ならしむるものあるが如し、讀書せざれば空想起り失望起り不平生じ放逸となり亂雜となり煩悶となり懶惰なるものいよく懶惰なるに及んで徒に諷し悶へ憤り苦みて而して空しく止むのみ讀書は或意味に於ては人に安慰を與へ忍耐を教へ其行を秩序あらしむと、之れ常に書籍を蔑して多く讀まざる友人某の言亦た一説なり。

●讀書論(二) 讀書固より嘉すべししかれども讀書嘉す可らざるもの有る亦た認むべきなり今日新紙に雜誌に文字を列へて思想を記する者の言を看よ、多くは是書籍を讀んで書籍に讀まれ爰に全く本來の我を没して他人(書籍)に同化し他人の感し而して定めたる説を以て自個の思想に出でたるもの、如く忘想し而も其の愚を悟らずして揚然傲然たるものなり、余は天下に滿ち充てる這般ヌケ売先生の言論に出會ふ毎に知らず幾度ぞ讀書の嘉す可きを忘れて其の嘉す可らざるを叫びたるを。

●讀書論(三) 讀書の弊害を認むるを得て最も較著なるものは政治を議する思想家(所謂政談者流)の言論と爲す、近時新聞紙上に議せらるゝ所の天爵と人爵との双對論の如き即ち其の近例なり、人爵を抑へて天爵を揚ぐるが如きは常に純善純美を口にする所謂宗教家なる者詩人なる者の間に於て之れ有るも固より可なりと雖も根が俗の最も俗なる政治社會の事を論ずるに際し而も名利を看版として世に立てる政治家なる者に對して、宗教論者若くは文學論者の口吻を擬するもの果して時務を論ずる者の言なりとして之を見るを得べきや、蓋し是れ一時の權道よりして論を天爵に取り物を咎めて人を非せんと欲するの意に出でたるものなるべしと雖も好し其の論旨の那處に在るに拘らず苟も議を政治の上に立つる以上は政治界の何んたるを辨ひ其の者の占むる位置の範圍内に於て宜しく言を立つべきなり、言此處に出でずして宗教家或は文學者の言ふものと混じて敢て怪まざるものあるを見れば我が政談者流の價値の程度を推し得て果敢なきもの有るは憐む可き次第ならずや、是れ政論家が一に書籍の上に於て政治の何んたるを知れるのみにして而して未だ事物の眞を究むるを爲ざる罪に坐するものなしと言ふ可らざらんや、

●讀書論(四) 余輩爰に最も怪訝に堪えざるは世相を描くものと稱せられ人間を詠ふものと唱ひらるゝ所の文學者なる者の描く所の人間の世相の概ね書籍の裡より出でたる世相にして、孰れも眞を失し實を離れ殆ど空中に樓閣を築いて天地と爲し社會と呼び、僅に人間活動の一端を捉へて直にヒュマニチーの眞諦を得たるが如く速度、或は認めて人生なりと言ふもの若くは人間の運命なりと稱するもの大低作者其れ自身が冥想慘憺たる中に幾多の苦悶を経て而して洞然自識し得たる靈臺の感觸に非ずして多くは摸型を西洋の小説に依り、或は門左西鶴の糟粕を紙り甚しきに至りては馬琴三馬の流を汲んで而して作者なるもの其の愚を悟らじ、揚然として詩人なり文學者なりと自ら誇るもの嗟呼其れ何等の怪事ぞ、叱、叱、今日を以て文學の進歩せりと云ふもの果して誰ぞ、俗間語あり、小説にでもある様な」と是れ人間の間に尋常有り得可らざる不可思議の事實生ずる際に發する語なり、馬琴種彦の小説を讀んで此の感あるのみならず、更に當代明治の小説家なりと稱せらるゝ所の諸子の

●讀書論(四) 余輩爰に最も怪訝に堪えざるは世相を描くものと稱せられ人間を詠ふものと唱ひらるゝ所の文學者なる者の描く所の人間の世相の概ね書籍の裡より出でたる世相にして、孰れも眞を失し實を離れ殆ど空中に樓閣を築いて天地と爲し社會と呼び、僅に人間活動の一端を捉へて直にヒュマニチーの眞諦を得たるが如く速度、或は認めて人生なりと言ふもの若くは人間の運命なりと稱するもの大低作者其れ自身が冥想慘憺たる中に幾多の苦悶を経て而して洞然自識し得たる靈臺の感觸に非ずして多くは摸型を西洋の小説に依り、或は門左西鶴の糟粕を紙り甚しきに至りては馬琴三馬の流を汲んで而して作者なるもの其の愚を悟らじ、揚然として詩人なり文學者なりと自ら誇るもの嗟呼其れ何等の怪事ぞ、叱、叱、今日を以て文學の進歩せりと云ふもの果して誰ぞ、俗間語あり、小説にでもある様な」と是れ人間の間に尋常有り得可らざる不可思議の事實生ずる際に發する語なり、馬琴種彦の小説を讀んで此の感あるのみならず、更に當代明治の小説家なりと稱せらるゝ所の諸子の

作に於ても同じく此感に離るゝ能はず、斯の如きは是れ今日の文學者が一に書籍に由りて思想を定め他に鍛錬するに無く僅に輕薄なる所信を拉して宇宙の事乃ち盡せりと爲すものあるが故に非る耶、

●讀書論(五) 近時或る新聞紙に於て數日間稿を續け思想の潮勢と呼んで社會學の教科書を見たるまゝの青き口を開きて揚然たる者有るを見たり、而して其の記し、ものを見るに可笑しきは社會は社會學の爲に存するもの、如く認め或る一の現象を見れば曰く是れ社會學的思想の侵入し來りし徵候なりと、更に讀みもて行くに或は政治家は社會學を學はざる可らずと叫び社會學的思想の缺乏せる政治家は恰も盲人の如しなど嘲れり、社會學は今世記に及んで漸く名を出したる學問なり、知らず、未だ社會學の名あらざりし己前の政治家なる者多くは盲人的傀儡者ならざりしか、

●讀書論(六) 常に大家を以て任ずる某なる者あり、人より書籍若干多く讀みたるを以て驕ると甚し、而して斯の人の僻として讀書の多少を以て人物を秤量する程度

と傲し好し如何に天才の認むべきものあるにもせよ美德の揚ぐべきものあるにもせよ單に書冊涉獵の薄きを見れば先づ一も二もなく其の者を蔑し去らんと擬す、而も常に懐くところの想、言ふところの説を聽けば一として彼が自ら關きたる見なく、専ら其の書某の冊に於て得たるものを受け賣して之を彩色し左も賢こげに嚙舌するなり、人あり、曾て斯の大家を評して曰く、あれは書物を讀んだ平凡の人なりとあゝ天下實に書物を讀んだ平凡の人の多き事よ

●讀書論(七) 大工と語り左官と語り人力車夫と語りくづひろひと語れば大に耳に快きものあり、言、世情に觸れ人生に關す而して所謂人生を語る者世情を論する者……讀書子の言を聽けば旨遠くして意に解する能はず、是れ或は余が書を讀むを爲さるが故に則ち然るに非る耶、非耶、



七部集

高濱虚子

七部集といへば名什ばかりと心得る人多けれど、うはあやまりなり、詳論は限りある紙上の許さざるところなれば、俳句のみについて極めて畧評を試みんに

春の日

貞享三年の撰にして、歌仙のみなる冬の日の撰に遅るゝこと二年、阿羅野の撰に先立つこと三年、猿蓑の撰に先立つこと五年、其風調時に尙延寶天和のおもかけを止めたるを見る、例之ば

曙の人顔牡丹霞にひらきけり

杜 國

傘張りの眠り胡蝶のやどりかな

重 五

等の如し、されども亦

かつこ鳥板屋の脊戸の一里塚

越 人

の如く直ちに猿蓑の壘を磨せんとするものあり、其他

逢坂の夜は笠見ゆるほごに明て

馬替ておくれたりけり夏の月

聽 雪

帚木の微雨こぼれて鳴蚊かな

柳 雨

脊戸の畑なすび黄ばみてきりくす

且 藁

朝顔は末一輪になりけり

舟 泉

馬はぬれ牛は夕日の村しくれ

杜 國

隠士にかりなる室をまうけて

新らしき茶袋ひとつ冬籠

荷 兮

等は姿情共に備はりて誦すべく

芹摘どかけて酒なき瓢かな

且 藁

花に埋れて夢より直に死なんかな

越 人

の吟興亦愛すべし

今朝の松海は程あり麥の原

雨 桐

鯉の音水はの闇し梅白し
山や花塔根くくの酒はやし

羽 笠
龜 洞

春野吟

足跡に櫻を曲る菴二つ

杜 國

曉の夏陰茶屋の遅さかな

昌 圭

待 戀

こぬ殿を唐黍高し見おろさん

荷 兮

武藏坊を弔ふ

商 露

すゝかけやしてめく空の衣川

等は先きの「曙の人顔」傘張りの「二句と共に幼稚なる詞を以て却て調和するもの、別に雌黄の加へやうもなし、否斯の如き句に曼りに曼りに雌黄を加へんは、唯當時の質朴なる風姿を傷ふにすぎざるべし、然れども

元日の木の間の競馬足ゆるし

重 五

終十二字にて起る連想は春風駘蕩たる光景にして、元日とは受取れず、而して之を元日となすものは、もと元日なる概念より割り出したる理屈に根して真情なし、

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな

荷 兮

は春の方適當なるべく

行燈の煤けう寒き雪の暮

越 人

は雪に非ずして、木枯など吹きて天地からひ果てたる方、一層其感強かるべし、其

他

朝日二分柳の動く句ひかな

荷 兮

麓寺かくれぬものは櫻かな

李 風

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春の暮

重 五

蓮池の深さわする、浮葉かな

荷 兮

夏川の音に宿る木曾路かな

重 五

雲折々人を休むる月見かな

芭 蕉

山寺に米搗くほどの月夜かな

瓦ふく家も面白や秋の月

馬をさへながむる雪のあしたかな

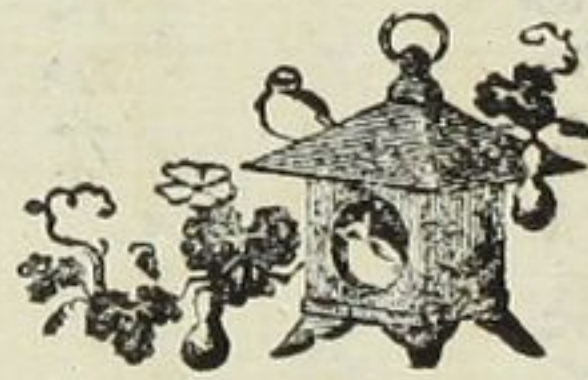
等多く暴露にすぎた餘韻なく姿いやし、

此他僅に取るべきあり、一顧を値せざるあり、古池の吟の如き、終に凡句たるを免れず、

越 人

野 水

芭 蕉



玄武朱雀 (第一)

泉鏡花

「開いねむか〜やい唐變木、狸穴の次郎さんたい、かう、誰だと思てやがる」藪に立ちほだかつて喚くのは、職人躰の壯佼で、自から名告つた狸穴の次郎さんといふのである。「やい、新宿へ交際ふのが嫌だからッて、人の手に喰ひつくといふ奴があるかい、痛えぞ、畜生、何してくれるんだやい、」戸の内は寂りして返事もしないで静まつて居る、取合はないから戸外の壯佼は張合がなくなつたが、黙つて醉眼をとろりと睜て、小路の前後を眺したが、其の眼を返して半被の左の袖をかゝつて二の腕の處をぢつと見た、漲るやうに血の通ふ小筋の張た二の腕に文久錢ほど血がにぢむで、輪取つて腫たやうになつて居た眉を擧めたが、其手を廣袖の中へ納れて、長く露はした右の手の握拳でどむ〜と藪を拊つて、

「見ろ、こん畜生、血が出るせえ、申戯ぢやあ無え、何だつて人の手なんぞに食ひつくんだ！かう、石塊で打欠いたンかな、鳶口を叩き込みやあがつたんなら了見

してやらあ、人をつけ、馬糞ッ齒で、わむぐりやられた奴を袖の中へしまつて歸られるかい、やい、合點ならねえ、唐變木、出て来て何うかしろい、出て來ねえか、やい、

「騒々しいぢやあないか、何うしたんだよ、」といひながら、棟割長屋の一ならびに寝静まつた中の一枚破の入つた板戸を開けて、鐵のやうな冷い戶外へ、寝衣の上へ半纏を引懸けた、つゝかけ下駄で櫛卷の天窓を出したのは、隣家の車夫が女房である、

「静におしよ、誰だ、次郎さんだね、」と出て懐手のまゝ聲をかけてひつたり寄る、無性に戸をたゝいた壯俊は、向直つて踵を据えて、

「何でえ、」
「あら、何だぢやあないやね、お前、町内が割れるやうぢやないか、何うしたといふんだね、」

「餘計な世話だ、汝、三公が女房だらう、」

「あゝ、御念にやあ及ばないよ、」とうつくしい染めた齒で莞爾する、壯俊はつゝかゝつて、

「だから話せねえツてんだ、打棄ツとけえ、入らざるこツた、へい、媽々のある野郎だの、亭主のある女子に我のいふ理屈が分るかい、次郎さんが相手にやあしねえや、引込むでろ、くゝると背向いてまた拳をぶつける——どむ、どむ、どむ、どむ、

「開ける、やい、唐變木、こん畜生、媽々の臭え尻なんか抱え込みやがつて着むでら、我が奴を鹽磨きだせえ、湯賃が上つたつてしも湯で済ましどくやうな客なんぢやあねえ、なあ、女房さん、」
と云つてまた見返つた、壯俊は掌で頬邊を撫で、見せて、

「え、おい、これが分らねえやうぢやあ、お前なんぞもしも湯の部だ、」
「餘計な世話だ、」

「へむ、顔でも洗へだ、」
「れ前は酔つてるんだよ、可から騒々しくつて仕様がありやしなから、どむ

「ゆるなあよしておくれ、何だつてまた野郎が戸をたゝいてる位氣の利かないッたらありやしない、翌日にでもなつたら出直して来るさ、ね、左様じゃあないか見ツともないやなあ、お前、」と氣が強いのだが女房は欠伸まじりに無遠慮にいつて退ける、と黙つて聞いて居たが思ひの外で、食つてかゝらうともせず、ひとく落着いたものさひで、

「いや、分りました、」と眼が覺めたやうにいつて頷いたが、其まゝ身を返して戸口を放れた、

(第二)

「何をいつてやんだい、黙つてりや、何だ、媽々の臭え尻だ、」と湧上がったやうにたけり立つて、ばた／＼と人の立つた氣勢、

「可いからさ、まあ、あれさおよしつてばねえ、」とれる／＼したうら少い女の聲、二三度あせりあつて、引摺られるやうな物音がする、爾時むかふの辻の角まで立去る壯俊を見送つてた彼の車夫の女房が板戸へびつたりと兩手を縫つて、

「源さん、うちやつてお置きなさい、もう去つちまつたよ、居やあしないから、」

「女房さん難有うございました、ねえ、まあ、お前さん、じつとしておいでよ、」

可から、いえね、つい、良人も酔たもんですから、」と戸の内て返事をして、壯い聲は立つて出さうにする、

「まあ、お休みなさい、」とおもてから取押へるやうにさういつた、

「唯今開けますから、」

「いえ、またあしたの事にしましやう、左様ならお休みなさい、」

いひすて、女房は身を退いた、其時内なるが近寄つて、直ぐ蔀の際で、

「何うも濟みません、」

女房は、ハヤ自分の家の戸口に居て、これには答へないで、身ぶるひした、

「お、寒、」

半纏の袖を引重ねて、束髪の白い顔で、ちよいと振返つて空を見て、

「清ちゃん、良月よ、」

といつたが土間へ嵌まつたやうに其後姿は隠れて、手は見えないで、がたりと戸が閉る、

長屋は六軒の棟割で、透間だらけの羽目、葎て一ならび、これが古びて黒くなつて居るのに、揃つて板屋根が新らしいで、薄く雪を被つたやうに月あかりで眞白である、皆平屋で奥が浅く、廂が矮い、此六軒の長屋のはづれに新粉細工の影法師のやうな、ぼやけた枝のささの鈍な、幹の高い、桐の樹が一本葉の落盡したのが、磨ぎ出した星のキラ／＼とする中で空高く立つて居る、梢のあたりに硝子窓が見える二階家で、瓦屋根の背後は判然した黒い森で、一輪の寒月は恰と其上に蒼すむだ色で冴えて居るので、北から東へ弓形に麻布の一方を貫いた月の小路の見渡す果に月かすれ／＼に靄がかゝつて、鏡の中の晝である如き澄渡つた此長屋のあたり、屋根、軒端、道の上、斜に傾いた電信の柱、其線にまでも音はしないで、轟々と霜が下りる、森とした夜は一時であらう、

小刻の足音軽く、頬冠をした二個の身軀は町の片側に肩と肩とくつつさあい、手首を引込めた袖口で、三味線の柄を素直に脇の下に掻込むで、男の方も二人とも、下を向いて頭を垂れて、足並もちやむと揃ひ、同一處を見詰めながら、傍眼も觸らす、ものもいはないで、北の方から刻足で來た、あの傾いて立つて居る電信柱を背後にすると、偶然立停まつて一齊に顔をあげたか眼を見合つて道を片除ける、前途の辻の角へ身を翻して露はれた、半被、股引の、跣足で、向願卷、まくりでに鳶口を提げたのは前刻の壯俊で、いま辻の角から翻つて出ると、横なぐれになつて踏直した勢疾く、黒い姿か流る、ばかり、月あかりの晝のやうな、小路を來り、恰と二人がイむだ、電信柱の筋向ひになる源が家の葎へまつしくらに身を以て飛び懸つた、

(第三)

氷を碎く音がする、突然羽目板へ二ツ三ツ黙つて鳶口を打ち下ろした、壯俊は足場を取つて、胸を張り、得物を眞向に振被むりながら身を反らして

「次郎さんだ、出直して來たむだから左様思へ、家臺骨を畜生、たゝつこわす

から覺悟をしろ。」
まつすぐに立つて、

「様あ見やがれ、」

ぱりりと打つたのは確に羽目板の真中を割つた、板目に食ひ込むた鳶口の尖を、
こちつて両手で後ざまに引きながら、

「えゝ！板までが様あ、へばりついて手答かねえや、ユン畜生！」と憤つたやう
にまた喚いた、

「何を！黙め」と息巻荒く、内では躍上つたけた、まじい物音で、どしどしと飛
出しさうに聞こえる、

「たよしよ！危いから、あれさ、酔つてるんぢやあないか、怪我をしちや詰らな
いわ、ねえ！向不見ぢやあないか、鳶口なんか持つてるから、」

と飛紐つて押留める、若い女房の聲はあはて、居るから高いので、いらだつてる良人
より、仕懸けておひき出さうとしてぢらして居る戸外の次郎が耳へ真先に入るのて、

「様あ、いびたれ女めい、汝も若え癖に了見の悪い奴だ、すべため、鳶口や、鐵
管が恐くつて町内の若い者が女房になれるかい、こんな時が打つてつけど、次郎さ
んがたたきのめして抱心地の可やうに汝が良人のむくむだ顔を鍛へ直して遣るから
難有いと思つて、やい、源を手放して戸外へ出せえ、男の珍らしい女にやあ氣の毒
だから、なけなし一張羅の良人を叩き殺してな、此寒のに不自由をさせるやうなこ
とあ、この如來様遊ばさねえ、ほんの一寸身體の何處かに抜裏を拵えてやる位なも
のよ、はゝゝ」と快けに笑つたと思ふとまた言鋭く、

「貧乏神あ其處から遁げ出さあ、やい、まだ出ねえか、え、おい、チヨツも一ツ
景氣をつけてやれ、」と更に抜いて取つた鳶口を上段から打つてあてた、

「放しねえ、放せつたら、えゝ！あ、あんなこと、いはれて、汝なんざ、何だ、
おたふく、媽々でも何でもねえや、媽々なんぞ、汝、畜生、いま出てるから遁げや
あがるな、」と内では地鞆を踏むで憤る、

「さう來りや頼母しいや、さあ、出る、お手の物の鳶口様お待兼だ、」

「何を鼻ツ垂、汝、安穩に内へ皈つてお茶漬が食べられると思つてると間違ふぞ、え、これ放さねえか、やい放さねえか、」

「あれえ！女房さん、女房さん、お隣の女房さん、」と取押へてるのは泣聲をあげた、

隣家の車夫が女房は、さつきの今で委く様子を知つて居やう、出直して来いなどと、いつた當の敵手は自分なので、かゝりあひ免れ難しだ、分けて入らうにも鳶口が劔難だから裏口へ廻つたらしい、直ぐ来て源の内て其聲がする、

「まあさ、かつたいと棒打だあな、お前さんに嵌る役じやあないから、此方は大人しくしておいでなさいよ、まあさ、」と當惑してこれは愚痴をいふ、

「だからお前さん、落着いておいでよ、よう落着いておいでつてばねえ、」
あとは口早に女二人がくどうも何かいふのが聞え、男のブウ〜が其に交つて一所に奥の方へ遠のいたが、内はまた静になつた、

若い者は憤然として開き直り、

「いよく〜出ねえな、可、こんな家や鳶口の尖へ引かけて葛西街道へ投げ出してやらぬ、覺悟しろ、」

と滅多打をやる、この景氣ではほんとに寝すも知れない、

(第四)

暴れる音が打返し、打返しまた立續けに寐静まつた、寂とした、眞蒼な、明い町を貫ひて亂調に響き渡る、十間ばかり北へ隔つた同一町の辻のあたりを兩側へ左右に開いて、兩人月夜の明暗の中を打並び人家の庇の下とまた溝の縁を渡つて、あるくにつれて斜形に其背と、腹と、脊と腹とを見せながら静かに、落着いて、足袋跣音も立てず、然も高く地を踏むで、應揚に練るが如く來た、
右なのは乳の下から斜めに落して鳶口の長いのを腰に横へたが、片手を懐ろで片手の肱に眞赤な線を描いた縦に三番組と墨で入れた看板を抱いて居る、
左なのは少るれよりも小造で、これはおなじはどの鳶口を提げて柄を落し、頭を胸

に取つて逆に持つて居る、これも片手を懐にした、いづれも鶯の装束で「身を鎧つて頭巾を眼深に被つて口あてもしつかりした、眼ばかりの其顔を兩個ともうつむけて、近い處は眼を配り、遠さあたりは耳で聞く、一寸も隙のない身構、看板の灯は薄く黄色を帯びて、照らさないで其の形ばかりが、見える、厚子の鎧は霜を浴びたのに凍てた月の光かさして、黒い姿を白けさせた、濡れた灰のやうな色で固く冷かにニヤ／＼するのを、身肉の形にしつくりと着こなして、浮いてあがるやうな身輕な足取、咄嗟眼を配る其瞬間、ものゝ音を聞定めてまた一步に見て、一步に聞いて更に一步を進めながら刻々町の一部分を巡見する、火の番の意氣、あたりを拂つて、悠々と近づいた、

真中を通つて、さつきから若い者が壞方をやつてるのを電信柱の前にイむで、無言で見て居た夫婦連の藝人は、此時小走りに行過ぎたが、五六歩離れると小路の中で三味線抱へた方が、しなやかな腰をのして一寸立停まつたと思ふと、一步先になつた男のあとを追さまに附着いて、齊しく刻足で急いで行く、

其姿を右なるが振返つて、舊來の方へ見送つた時、左なるが屹と前途を望むで、いさ勢餘つて、よろけなりに得物を横に振つた、源が軒下の若い者の手と足と動いてるのを見て取つた、

兩個はいひ合はせたやうに左右から身を寄せて、道中でひつたり肩を合はすと、双方逆に三角の形をした、其厚子の頭巾の中から、鋭い眼と、愛くるしいばつちりした眼とを見合はしたが、瞳を返して再び亂暴な若い者の舉動を見て、齊しくやゝ其足をはやめた、

あばれ者は獨で景氣をつけて、すりやりやん／＼と懸聲で打込みながら夢中で壊してるから些少も氣が着かない、

背後へノノリと寄つて、

「おい、」と落着いた聲をかけたのは背の高い方で、看板を持つた手を組むたま、一指をも動かさないでさういつた、それでもかまひつけぬからまた力を入れて、

「騒々しいこら、巫山戯るな、」とぎつすりいふ、

「誰だ、」

「我だ、」

「何奴だ、」

「我、」

「何だ、」

「我、我、」いつたばかりで済まして横を回いて居る、若い者は躍起となつて鳶口を持直した、

「我、我、へむ、何をいつてやあがる、見損なつたか、狸穴の次郎さんだ、」

(第五)

「可よ、分つた、其次郎さんが何うしたんだ、」と、これは自若としていつた、

「源が屋臺骨を叩き壊す分の事よ、何も六ヶ敷ことあねえ、」と活々した眼を睜る、

「止しな、止しな、詰らない洒落た、また木葉のやうな、喧嘩だらう、」

「何うして叩き壊すやうな喧嘩だ、構ふない、へむ、差配さんぢやああるまいし、」と冷かに言放つてまた得物を取直すから手甲かけた、大きな掌で其腕を押へ、

「止せよ!」といつたが力が入つたので、若い者は拵いて放した、

「畜生手を出したな、」

キツと立直つて對手は擇ばぬ、誰でも来いで、若い者は喧嘩に餓えて居つたと見える、

火の番を當の敵手にして一ツ取組むで、あまり無事だから何處かへ怪我でもして見たいのだ、

取つて鳶口を構へると、平和な眼ばかり頭巾の裡に微笑を含み、無意識に垂れて居た片手を上げて提灯を持つた手を袖口で組合はして、對手は平氣で居る、

「驚くな!」とばかり身悶へして、アハヤ掴みかゝらうとするトタンにすツと寄つて同一扮装ながら、身の細りした、小造で肩の優しいのが、清い聲で、

「ちよさ、」

猶豫ふのに引冠せて、

「お前さん、又から、」

と言尻の切れたものいひである、これを聞くとおぼれものは其あばれが懐中から抜け出して、フイと失くなつたやうに落膽した、

で、きよとくとした眼でちつと見ると、重いものが横様に弛むで片眼を蔽つた頭巾の縁を真直に揺り直した、

瞳の清い、色の白い、くつきりしたうつくしい、眉も翻れて伺はれさうである、

「おや、」

「よく始めるのね、」と云つて、一歩退つて、一ツ瞬いた、其すゞしい眼に微笑を
含む、

「頭ン家の……」

と若いものも一度見直して、

「驚いた、珠ちゃんだ、」

「今晚は、」と笑ひながら故と濟まし切つていま顔を合はせたもの、やうに此小造の細りした、火の番の一人はさういつた、

「驚いたい、何うも、へい、串戯ぢやあゝりませんせ、うして此方のは？」と若いものは一寸屈むでいま一人の頭巾の中を差覗く、

「甚さんだわ、」といつた小造なのは其方を向いて、

「ねえ、甚さん、」

「今ソア」と軽い調子で、あらたまつて故とらしく頭を下げた、いま、で寒巖の如く、生抜いたやうに立つてたとは打つて變り、聲も甚しく碎けて聞こえる、

「串戯ぢやあねえ、」

「甚さんたら、作聲をして可笑くツてよ、」

「串戯ぢやあねえ、」

「次郎さんがまた大時代をいつてるぢやあゝりませんか、源が屋臺骨を叩き壊す分の事よツて、お前驚口を振つて木遣をうなつて居てよ、お演戯のやうで私おもし

ろかつたむ、

「串藏ぢやあねえ、

「でも、やい、手を出したなッてお前キツパリとなつて威勢が可かつたこと、

「串藏ぢやあねえ、

「一人で居るとまるで見違へるは、お前、父上の前で、膝小僧を出して、畏つておいでの時とは別の人の様よ、可かつたねえ、」と櫛られたように身を揺つて手甲かけた大きな嵩張つた掌をしつくり二個合はせたが軽くボンと拍いた、若いものは苦笑ひで、

「串藏ぢやあねえ、

(第六)

「へい、へい、御最負に難有う存じます、いえ、恁う申しちやあ我慢のやうに聞こえますが、全くでさ、番太の菓子召食つた舌でなくツちやあ私等が鮎を食つちやあ下さりません、

何しろ屋臺店で汚うがすからな、砂だらけだとばかりで門構の中に住まつてやうといふ旦那方ア振向いても見ちやあくれません、田舎ものでさ、皆電氣燈のあかりで甘えもんだ、酢ッばいものを召あがらうといふ手合なんで、
と小手に腕力を入れた拭布をぐいと占め、海苔を巻いて居る屋臺店の鮎屋の亭主は片頬に笑を含んで上を向いた、

「は、は、は、ねえ旦那、

「ぢやあ何か、割に買れないのか、」と屋臺の暗い處で亭主が腰を休めやうといふ、小さな床几に腰を懸けて少し横顔を見せて亭主にもものをいふのは二十八九の品の好い瘠形の男である、色の淺黒い苦み走つた、其癖何處か鷹揚な、柔みのある、おつとりした眼鼻立しまつた、人物で、少しのびた頭髪は横撫にひつたり額を環取つて、帽子の形は印されてるが、被つては居なかつた、

亭主は二ツばかり鐵炮巻を軽く叩いて、暖簾越に霜のやうな月の大道を透かしながら、

「何まの何うにかやつちやあ居りますが、異なことあゝりません、何うせ分りませんからな、旦那の前ですがカラ話せませんよ、全くでさ、私が家の鮓を食つてやらうてえ方あ、かう申しちやあ何ですか、え、贅澤です、驕つてるんだ、」

「意見をいふなよ、だから前ならび五文といふ處を頂くから可、出来たら早速頂かうせ、」

「いゝえ、價のこつちやあゝりません、口の悪い、」と莞爾して俯向いた亭主は片襷かけた襟元を扱いたが、其手で庖丁を取つて真中を切つて四にした、

「召わがりまし、お茶は沸いてますか、」と斜めになつて手を揉みながら、地に置いてある火鉢の中を屈むで見る、

品の可客は綿の薄いのを無雑作に三枚襲ねた、兩足で跨いで、土瓶をかけたまゝの跨火鉢とやつて居たが、甲斐々々しく袴の短いもの一ツ衣込ひで居るかすりの羽織からしやツきりと手を出して、細い、小な、火箸を取つて炭をほぢつて見た、

「可からう、」といつて、其手が上へ出ると仰いで一個取つたが、俯向いて火鉢の

上で食べるのであらう、屋臺の蔭に姿が隠れる、

「あとは鮓にしやう、」とやゝあつて其眉の秀でた顔が見えた、

「まだあがりますか、」

「あがるよ、」といつた姿はまた屈むで見えなくなるとカサ／＼と炭火を突く音がする、

其時衣すれのするのが聞こえて、

「おゝ、寒さ」

「もやがすつかり晴れましたから恐ろしく寒くて來ました、」

「良月だ、」

「此寒いのだ、馴れつこになつてるので、お月様なんざ氣がつかまませんが、宛然かう海の底にでも入つてるやうな景色ですせ、更けました、」

と亭主はちよいと手ささを拭ふ、

「一時か不知、」

「もうそんなものでございませう……。」といつて、黙つたが、飯をならべながら見返つた、

「此大道商人といふ奴め、よく刻限を聞かれるもんですが、ねえ、旦那、」

「大きに、」とばかり、客は其顔は上ずらさういふ、

(第七)

「演劇なんどにも能くやりますな、大抵夜鷹蕎麥が擱りますせ、蕎麥屋、へい、何時だらうの、六ツでもございませうか、ふウ熱くしてくむねえ、かう天水桶の水を汲込むツていふが眞實か、御串戯おつしやりまし、手前のは神田上水を絹漉にいたしまする、うんなに手間が取れるのか、道理でぬるいや、御串戯おつしやりまし、あい、と代を置く、毎度難有う存じますと、荷をかついで下手へ入りますせあとは、四天で忍といふのになります、皆作者がやるんださうで、古くツて、いけません、旦那ア縮屋をお使ひなすつて、彌助や、何時だ、は新らしうがす、え、何ですかい矢張うんなこともお作りなさりますか、」

「何をさ、」

「そんなものでさ、」

「何、誦らない、何のこツた、」

「だつて、何んで在らつしやいますとね、其の何なんぞおやんなさるんださうで、」

「お前の方が餘程作者だ、」

「いえ、おかくしなすつたつて、旦那ア黒頭巾ですな、」

「何のこツた知らぬ、」といつた客の言は嚴格であつたから、亭主は心着いたものと見える、浮いた調子に笑つて紛らかした、

「は、は、黒頭巾といや、今夜外套も召しませんな、どちらのお飯でございませえ、」

「宅から来たさ、」

「大分お晩く、いつも書生さんをおつかはしになつて下さいますが、ね寒いのに

何うも難有う存じます、何ですかい、奥様はおあんなさりませんか？」

「無いよ、」と投げるやうにさういつた、

「道理で、」

「何うした、」

「何うして奥様が今時分お出しなさりますもんですか、」

「うまいこと知つてるな、お前は持つてるのか、」

「何、ありやしません、」

「舊から、」と口を狭むた、

「いえございしました、濱で三階造の家を持つて遣つてました時分にやあゝりましたが、こんなになつてから居らなくなつたんでさ、出て参りやしたんで、婦人てえ奴お實のあるもんですせ、(決してお前さんが身上をすつて其日ぐらしになつたのかつて、其で出て行くのぢやあございせん、夜一夜大道でを稼ぎだから皆が寐る時分に寐られせん、それぢやあ女房の役目が濟みません)ツていやあがつて、ね、其ツ

切ですが、それから旦那え、十年あまりも一人でやつてますが、面倒ツ臭え、憚りながら媽々なんぞ持つて居て今時分までこんなことをして居られるもんですか、何うして女房なんかついてちやあ、こんな心持のいゝ旨え鮎を、旦那に夜更てから食べさしてあげますことが出来すものか、」意氣昂然といつた、客は胸を正して真直になつたが、屋臺の中で凍とした其面が出た、

「何うも左様だらう、此位旨いのは何處にもないから大方女房のない男だらうと思つて居た、」

「へえ、」

「私が行く處に床屋があるんだ、いつも病身で、初中苦い顔をして居るが、名人といつて可むだね、其代餘程折がよくないとあたつちやあくれないが、矢張ひとりもの、お前とおんなじで私の顔さへ見りや莞爾々々するんだ、其上手なことツたらなさせ、」

「へい、何しろお氣に適つて結構でございます、床屋と鮎屋はひとりものに限る

ますかな、

といつて何々と笑つた、

「何、さうとは限らない」と客もまた微笑むだ、

(第八)

「女も何でさ縫のする襦袢や友染の長襦袢で押廻して内あ可うがすけれど、ママとなるど、一体何ですせ、女房に不景氣はついてまはるもんですせ、」と少い威勢のいひことをいふ、其辯顔がといふと間ののびた、殊に顔の長い、眼のきよとりとした、福相で團十郎が二人袴の高砂尉兵衛といふのに肖て年紀ははや四十八九である、

「不景氣ばかりじゃあない、第一お前世間ぢやあ女房といふものは家を拵えるものだといふけれどな、さうぢやあないよ、却つて破の基だ、疾い處が女房のある長屋なんぢ、鳶口で壊されるわけのものだ、」と實面目にいつた、

「何、まさか、」

「處があるさ、私ん處の近所に近い頃越して來た少い夫婦が居るがな、何か植木屋の下まはりだつて、二人とも柔和いんで長屋中譽物だつてよ、勿論なか、可とさ、さうするとお前今夜鳶口で以て部を打抜さに来た若いものがあらうぢやあないか、夜中だ、びり〜と硝子戸へ響くから、何だらうと思つてあけて月明で見ると、遣つてるワ、

月も良かつたし、何うする知らんとそれから門へ出たが、一人もんだらう、あの若い奴も何うして女房持ぢやあ木遣で打壊をやらうなんて、小氣味の可、豪勢なことあ出来るもんぢやあない、

小蔭で見てたら寒くツて堪らないので、もう入つて寝やうかと思つたが、鯨屋さんといふこゝのいろを思出しちやあ了見出来ないから其まんまでぶらり〜來たわけだ、

「へ、何、そんなこつてひとりものをね賞めになるんですか、御串戯もんですせ私あ眞劍だつた、」といつてぎうと一ツ上下を返して握つた、鯨屋は拍子ぬけのした

形で黙る、

人通はちつともない、

處へ笛が聞こえた、急に、短い、追つた、節の無い調子で、高かつたが次第低になつて音が消えた、

「御亭主、」

どや、ものいはないで居た客は呼びかけたが、亭主も耳を澄まして居たから確にいまの笛を怪むで、いふのであると思ひ取つた、

「旦那口笛です、」

「何うも左様らしいよ、盗賊でもつかまるのか、」

「何とも分りませんな、」

「さういやめさつき此先であの火の番といふんだらう、鳶のもの、装束で二人兩側を歩行いて居た、すつかり身躰を鎧つて、玄武、朱雀といった將軍のやうな威勢がある、晝間あ、たゞの少い者なんだらうけれど、きまつて出た處は指一本させん

んぢやあない、きびしくした心持の可格合だ、女房があつちやあ矢張あんな眞似は出来なからう、男だければほんとに惚々するよ、なあ」といひかけたがフと其口をつぐむだ、客は屋臺のうしろに腰かけたまゝ、捻向いて通を見た、

すぐ其耳近にまた笛の音がしたのである、見ると此店を十間とは隔たらない、此方側は塀に沿ひ、巾六間の町を挟んで、向側は屋ならびの軒下をおし寄せるが如く、静かに、火の番が二人で来る、

また笛が聞こえたが確に向側のもの、口からと思はるゝ、但近づいたにもか、はらず、此度は細く、幽かに、極めて短かく響いた、

が、やがて来るともなく、來らざらむとするでもないやう、自然に悠々として件の結束した、灰色に水をあびせたやうな月下の姿は近くなつた、ト思ふとはやくも屋臺に釣つた洋燈の灯の中に小作で細うしたのが明るくなつて、思ひがけず眼のささへ立停まる、

「入らつしやいまし、」と透かさず聲を懸けて新來の客を迎へた亭主は、吃驚して呆れた、美少年だと思つたのである、

「親方、大分晩いのね、」

と優しくいつて、新客は極めて普通に無意識に、婦女が癖として其鬢を搔上げるが如く、ふツかり被つて居た厚子の兜を重いもの、やうに背後へ脱いだ、

「ねや!」といはれて、新來の客は天心の月を脊中に浴び、屋臺の洋燈に照らされた其瓜核形の輪廓の下頤のふつくりした、紅をさしたやうな唇の可愛らしい、しまつた、鼻筋がキツと通つて、口元との間の目立つて短い、これはゆつたりした、氣の長い、悠々した、甘ツたるい、押の強い、間ののびた、六十七まで生きやうといふ田舎もの、持たない相で、眉もキリツとした、うつくしい、はり切つたやうな清い眼の、眊は切れてるけれど、まだ少いので、あどけない故で、愛嬌がある、生際のくツきりした、濃く、艶やかに房々とする髪を、構はず白の手拭で向顔巻をして居るので、頭巾の下だから思ふさま髪も亂れ、前髪も割れて島田の根が横に抜け

て、いまにもばら／＼になつてかつくりしやうだけれど一筋もこぼれ懸らない、です、はつきりした曇のない晴々しい顔が暖簾を潜つて出ながら嬉しやうに莞爾した、

「氣がつかかなかつたのねえ、」

「誰がお前様、は、は、は、」と鮎屋の亭主は快けに笑つて身を反らした、頤の長い兀げ上つた額は屋臺の屋根にかくれて大口をあいた、

其額を下から覗いて、

「さあ、」

「え、」といつた亭主は故らに此「さあ」なるもの、何を意味するかを聞かうとする、新來の客は促がして言を迫つて、

「さあ、よ、親方」といつた時後前をちやむと見て、また振返つて背後を見た、

向側の軒下にいま一人の鳶は描かれたもの、やうにイひで居る、黄味を帯びた月夜の提灯に影も射さな、

亭主は悠然と構へ、切口上で、

「珠ちゃん何でございます、」

「あれだよ、さつさと、しと、甚さんが待つてるかとさ、」

「へい、お連様がございますか、此方へ入らつしやれば可のに、」

「いゝえ、お腹の工合が悪いとさ、」

「また飲過ぎだ、」と亭主は合點した獨言をいふ、

「何うだか、」と投げたやう、珠は小手をはづした、大なのがばかりと取れて、片一方腰のあたりへぶらりと下ると、皮を剝いた筈の根よりも白い、細りした手を屋臺にかけた、胸のあたり纔かに紫の半襟が厚子の鎧からすいて見える、

「頭アまだ捗々しく参りませんか、」といひながら亭主は手の利いた握早に飯を撮んだ、

「だからチヨイ代に出たの、」

「何しと、お前さん故ツとでしやう、とかくこんなことがお好きな風だ、え、珠ちゃん、またあのイギリス巻にいつた、ひよろ高いお嬢様にね轉婆だツてなぶられま

すせ、お前さんまた口惜がらうと思つて、」

「可のよ、あのお嬢様はね、情人が出来ないもんだから口惜がるんだわ、」

「へい出来ませんか、」

「あゝ、」

「何故でしやうな、」

「だつて學問なんかするからさ、長いのに肩掛を引張つて、六ヶしい顔をして晩方になると歩行してるワ、書籍を読む眼色だつて、嫌ぢやあないか、男の顔に字が書いてありやしましいしねえ、」

(第十)

「變な眼色だね、」

「あゝ、だからね、今井町の源さんが近所に硝子戸の入つた二階家があるワ、」と言が途絶える、亭主はゆつくりと口を挟むで、

「待つて下さい、何だかお話が分らなくなりましたせ、」

珠は些少も氣がつかない、

「何故さ、」

「え、と、最初は其れ轉婆でしやう、それから其お嬢様でしやう、あとが肩掛で、晩方で、書籍を讀む眼色で、男の顔で、だから源さんの近所に硝子戸の二階窓は分りませんね、」

「だからさ、」とセツついでいひかへした、珠は眞顔になつたが、思出したやうにばつちりと一ツ瞬した、

「知らないよ、分つてるッ、」

「い、え、分りませんが一向、」とばかりけろりとして居る、トせき込んで、

「あら、左様ぢやあないの、」

「へい、何が左様ぢやあございません、」

「まわ、お聞つたら、ぢれつたい！」とついた手に力を入れて、口惜さうに眼を睜つた、

「へい、へいなるほど、やれいそがしい、」とまた働く、

「彼處はね、貴賀さんてえの、何だか、學士とやらだッ、」

「なるほど」と頷きかけたが亭主は小蔭に先刻から故とか不知、それとも極が悪かつたか、こゝに人がありと知られないやう、ひろまり返つてぐつと腰かけた胸を折つて、跨いだ火鉢に胸を載せるやうに俯向いて隠れて居る、お馴染の最負な客は、てツさり其だとさう思つたらう、

氣色にも見せないで、

「なるほど、」とあらためてモーツいつて置く、

トつい釣込まれて、

「其貴賀さんにすツかり嫌はれてしまつたの、分らないねえ、其お嬢様がさ、だから口惜がつてるんだわ、お邸お御身分が可んだつて、あすこの竹どむがさういつたッ、江戸ッ兒が眼の敵だつて、睨むよ、田舎ものは出来ないのかねえ、」

「ぢやあお前さんが出来るでしやう、」

莞爾して、

「お生憎よ、」とあどけなく小さな聲でちやんといつた、

「其代此方あ、さあ、出来ました、」とうつくしく鯨を並べた、

黙つて見て居て、珠は露ならでは觸れさうもない、白い、細い、節の立たない指を出して、動くとおあつらへに手が懸る、

「姉さん、お湯をあげましやう、」

と此時聲がして、屋臺の灯の届かない隈に、床几に腰懸けたまゝの、今珠の口からいひ聞こえた、源が近所の二階家の硝子窓が住家である、其貴賀文學士は、寢衣で潜出の胸から上を屋臺から見せて、かすりの綿入羽織と三枚重ねで揃つた八丈の袖口から、無雜作にづつと手を出したが、湯呑に番茶を汲むであつた、口からむら／＼と立つ白い湯氣は渦いて、屋臺店の片隈に束ねてある眞蒼な根笹をかすめてこの寒月の大路の屋根の下に、さも暖かさうに蔽ひかゝるト冷い風で、横なぐりに珠が赤らめた顔に靡いた、

文學士は思ふことのない打あけた音調で、

「御遠慮には及ばんよ、」

「はい、」とかすかに會釋する、珠の聲はふるへたが立直つてちつと見て、

「有難う存じます、」とはツきりさういふトいま取つたまゝの鯨を一個、後ざまに思はずも落して棄てた、

(第十一)

其まゝ中指のささの節に、萌黄と、桃色と、紫と、赤と、白と、鳶色とで、きれいに綾をかけた裁縫用の指環を嵌めてるのを憶せずと出してうして貴賀の手から湯氣のいま淡くなつた茶碗を取つた、

「おい、まだなんかいい、」

どのツそりと来て背後でいつた向側だつた格服した鳶の者は待兼ねたのである、珠はハツとしたやうすで手にしつかり持つた茶碗がふれたが、横に立直つて斜めに顔をあげた、事ありげに見えるおもゝちなから微笑むで、

「今よ。」と言さういつたばかりである。

「親方、早くしてあげなさい。」

「へい。」といつたが何か不知、場が白けて、其處等工合が悪かつた。

「歯が痛んでね。」

珠は活きた人形のやうな顔を傾けて、片々はまだはづさなかつた厚子の小手のふツくりしたので頬を支える、

「だからお止なさいツてツたんだ、虫歯だから左様でなくツてせえ痛むのに、鮪の立食は亂暴だ、なあ、親方。」

鳶の者は苦笑する、これは顔を知つた甚三であるから鮪屋は事もなげに笑つて、

「何んなものでしやうか、何しろ手前あきなひます品物ですから、は……は、」

「む、ろりや左様だ、え、だが珠ちやん、」

「あら、私お食べやしないワ、」

「これから、やるのかね、」

「もう止しました、お、痛い、」と眉を擧げる、

「頭巾を取つたから冷えたんだ、え、其だ、もう歸るんだから勘忍なさい、そして、其うがひをすると可やね、え、うがひを、」と勧められて珠は何か猶豫つたのである、

「熱かないでしやう、がぶりと、え、がぶりとおやむなさいな、」

「だつて、」

「よくならあ、口そゝぐと紛れらあ、そして意地汚は止して歸りましやう、」

「だつて、」と珠は困じたやうだ、鳶の者は氣がつかないから、

「ね、やつて御覽なさい、きつといゝんだ、」

「あの……だつて、」

「ち、え、」

「私、御免よ、お前、」

「何もこれにあやまるて奴あねえ、なあ親方、」

「さればさ、」

「よし、珠ちゃん、」

「御免なさいよ、」

「あら、御免なさいッていはあ、」

「だからさ、」

珠はせむ方なげに打まもられつゝ、茶を含むだ、

文學士はじつと見た、鳶の者は引添ふて、

「が、ぐツとやつてお出しなさい、あら飲んぢやつた、串戯じやあねえ！、

珠はあてやかに微笑んで、

「御免なさいよ、」

二人はならんで屋臺を出た、暖簾の外で珠はまた頭巾を着たが、今度は左右に開かないで、鳶装束の二個の後姿は姿をひとつにして身躰を合はせた、恰どさつと夫婦の藝人が並むだらう、

月あかりに形は薄くなつた、が影をさやかに地に宿して、次第に町中を遠ざかる、鳶口の柄の影も見えた、爾時脩屋の亭主はうつかりして居た文學士を見返して、顔を合はせた、

「旦那、」

「怪しからん、」といつて眞顔の構を破してカラ／＼と笑つた、

微かにまた笛が聞こえる、

「何も氣がつかかなかつたが、」とこれは溜息をしたのである、

また口笛を鳴らした、

男が口笛を留めると、女は俯向いてあるいてた顔をあげた、

「ちよいと、威勢が悪いなんて云つてないで早く何うにかしておくれよ、」

「え、」

「さうでないよ、私、氣が變ると悪いワ、」

試験

爪抱子

試験といへる事實は、今にはじまれるにあらざれど、近世に至り諸學校にて、必ず試験を行ふこととなりてより、幼童少女も皆試験の何物たるを知ること、はなりぬ、封建時代に於ても、學塾には御試みといへることありしよし、今の試験と同じ事なるべし、今の世は學理の研究杯に、試験を要すること多く、文官吏の採用にも試験、醫師の開業にも試験、辨護士の許可にも試験とて、試験の聲は、うるさきほどやかまし、試験の大切なること如何はかりぞや、畢竟試験とは、彼此の區別を明にするの手段にして、理の眞偽を別ち、人物の優劣を判す等の類をいふなるべければ、似而非者の少からざる世の中には、殊に試験の多きも、尤も次第なるべし、されど同じ物を観るにも、青目鏡にて視れば青く、赤目鏡にて視れば赤く見ゆるの例にて、試験する人の如何に依りては、却て彼此の區別を混亂して、太た取間違ひたる確信を來すこと儘々あるの習なり、己れに一定の標準なきものは、時々其の看様を

試

驗

異にして、試験せらるゝものも、其都度異様の觀を爲すと思ひ、初めより大なる變化なきものも、丸で別物にはあらざるかと疑ふものも珍らしからず、何とも見分けかねて、何時までも試験にのみ月日を送くるも多かり、甚しきは君の大御寶をも、塵芥の如くに看做し、人のゝに眞似たる法律を、其の儘我に施行して、其の利害得失は、多年實行の後に判断すべしとて、初めより毫も定見なく、全く試験するの考にて當然なりと思ふものあり、痛ましとも痛まし、福澤翁の語氣丈を借りて言へば、汰沙の限りとも謂ふべし、されども試験の大切なることは、疑ふべくもあらず、他の事はしばらく措いて言はず、人を知るが上にて試験の大切なるは、古も今も變はりたることなきに、人は儀式通りの試験一邊にては、なか／＼知りがたき事なれば、古より人を知るに志あるものは、尤も意を此に用ゐたること、見ゆ、何時の世にても、人の鑑識に老けたるものゝ少からざるべけれど、人を知るの心得ともいふべきものゝ、筆の跡に書殘されて、後人の参考ともなるべしと思ふ一ツ二ツを擧げんに、宋の蘇軾は

委之、以利以觀、其節、乘之以、猝以觀、其量、同之以、獨以觀、其守、懼之以、敵以觀、其氣、

といへり蜀の孔明は

夫知、人之性、最難、察焉、美惡、既殊、情貌、不、一、有、温良、而爲、詐者、有、外恭、而内、欺者、有、外勇、而内、怯者、有、盡力、而不、忠者、然知、人之道、有、七焉、一曰、問、之以、是非、而觀、其志、二曰、窮、之以、辭、辯、而觀、其變、三曰、咨、之以、計、謀、而觀、其識、四曰、告、之以、禍、難、而觀、其勇、五曰、醉、之以、酒、而觀、其性、六曰、臨、之以、利、而觀、其廉、七曰、期、之以、事、而觀、其信、

といへり、皆明哲の言なれば、熟味するの價はたしかにあり、されど聖經賢傳なりどて、看るもの、如何に依ては、却て害毒の因ともなることあれば、此等の如き人を知るの術とも謂ふべき覇氣を含めるものは、凡庸の人間には、尤も危険の事なり、例へは小兒の莫邪を弄するか如し孟軻は

存乎人者莫良於眸子、眸子不能掩其惡、胸中正則眸子瞭焉、胸中不正則眸子眊焉、聽其言也、觀其眸子、人焉廋哉、

子謂焉聽其言也、觀其眸子、人焉廋哉、
といへり孔丘は

視其所、以觀其所、由察其所、安人焉廋哉、人焉廋哉、

といへり、此等は弊害を來すことなかるべきも、亦容易に及ぶ能はざるなるべし、人を知らんと欲するものは兩つなから經權に明通するにあらすは、殆んど能はずと謂ふべきか、已れの力量を知らずして、濫りに聖哲の皮相のみに模倣せんとするは、病夫の鼎を扛くるに異ならず、人已れを試みつゝあると知れば、強て試みられまじとて、其真相を掩はんとするものあり、試みらるゝと知りて、殊更にえらううにするものもあり、又試みらるゝと知りながら、常の如くにして、隱蔽もせず矯飾もせざるものもあり、孰れにても達人の眼識をば欺くこと能はざるべしと雖も俗眼の及ぶ所は、其皮相に止まり、且つ私意を交ふるを以て、眞に之を知悉するに至らざることなり、又試みらるゝと知らずして試みらるゝものあり、試みらるゝと知りつゝ、試みさせ置くものもあり、例には少しく疎くもあらんが、全く縁なきにしもあらず

と思へば、左に家康の秀吉に振舞はれたるとき逸話を載せんに

太閤秀吉權現様を御振廻被申たるとき掛盤にて御膳を被差上候尤掛盤並諸器ども葵の御紋を附被申御馳走大方ならず權現様被遊御歸館本多佐渡守へ被遊御意候は今日太閤のちそうけつかうの体如何致したることにて候やかやうの儀は心底に乗たるがよきか其方などは如何様に存候やと被遊御意候に付佐渡守御請被申上候は御前には先年小笠原與八郎を被爲思食候ごどくの御心得可然やと奉存候旨被申上候へは御うなづき遊被尤もなる了簡なりとの上意なり小笠原は武勇のものなる故其比はうゝより旗本へ參り候得と被申かたありしといへ共權現様へ二萬石にて出被申候下心は此已後信長公朝倉と一戰可有之候其時定めて信長公へ爲援兵御し可有之左候は、其期にて家康公の御領國は某がものよと心推しける故一人に存入たるごどくにて有之候となり然るに案の如く姉川合戦の時信長より權現様へ御加勢の義を申こされ候に付御加勢被遊候となり此時權現様小笠原與八郎を御先手に被仰付候與八郎下心に思ふ所ありといへども辭退に不及して姉川にて御先手を

いたし武名を顯はし御勝利ありしとなり此時與八郎家來渡邊金太夫伊達與八郎中山是非之助杯申者働さ殊に勝れ權現様より三人共御感狀被下金太夫には吉光の御腰物を拜領被仰付候となり權現様へ與八郎無二の心底に相見え候といへとも御のりなされず御心に乘せられぬ處有し故先手を被仰付候は乗る所のらじとするも一物有がごどくに候へのる所は有ながらのらぬ心有之をよしとす太閤の御振廻御のり被成候處も右の御心にて御あしらひ被成候事御尤なり

東に更に東あり、西に又西あり、考の上に考ありて、人の智慮はなか／＼測り極めかたきものなり、管より天を窺へば、天は小なるもの、如くに見ゆれど、其の實は廣大無限にして何とも名狀しがたきほどなり、已れの力量を知らずして、妄りに憶測を逞うし、遽に聖哲の人を觀るの法を聞き未だ其の神を得ざるに、獨り其の形のみ竊みて、輕忽に人を試みんとするは、烏が鶺鴒の眞似をするの類にもやあらん、家康或時本多佐渡守へ言へるやう

秀忠はあまり律義すぎたり人は律義なりといふばかりにてならぬものなり

とありければ、佐渡守は、之を秀忠に申上げ、さていへるやう

御前にもおりくはうそをも御意遊ばされたるが能候と、秀忠笑ひて

内府様の御うろは買手があるがわれらは何もしたる事がなければうそをいふても買手のなきにこまる。

と面白きとなり、断して行へは鬼神も之を避くとして、断して虚事を實事と爲し、人をば己のが氣儘にせんとするもあれど、鬼の假面は、小兒のみ畏るべし、内面を洞察するものは、さにもあらざるべし、うろかまことかは左右前後の脈絡を詳にし、内外表裏の關係を觀て、虚心にて考察するときは、大かたは判断のつくものなるべし、識慮の淺くして分りかぬるもあるべけれど、分りかぬるは仕方もなし、之を知るを之を知るとし、知らざるを知らずとして、自ら欺かざるのみ、私智を運らして却て自ら躓くものもあり、戒しむべきことにころ、今の世は試験の世の中なれば、人を知らんとて、先づ之を試みるはあながちあししともいはず、只た常に機心の止まざるものは、到底人を知るの鑑を得ざるものなるべし、機心の止まざるものは、用心深き様にて實

は智慮の粗漏なるものなり、人を試みんとするものは、試みるものよりも、其の力量の勝れ居るか、否らざるも同等位のものなるが、常なるべければ、動もすれば之を試みるの間に輕侮の念を起すもありて、種々の虚事杯を設け、流れて翻弄するの過に陥るもまゝあれど、是れは大なる僻事なるべし、日用常行の間の實際の事柄に觀れば人を知るに餘地あるべし、人を試みるもの、必ずしも虚事を設くるに及ばざるべきか、人を弄べは徳を喪ひ、物を弄べは志を喪ふともいへり、人は未だ知ること能はざるに、己れは先づ徳をも志をも喪はく、智者の事と謂ふべきかは、東坡や孔明の言は其人之を用ゐて、害もなからんが、妄りに其皮相を眞似するものを生し易きの弊なきにしもあらざるか如し、霸氣を含めるゆゑにや、之を用ゐる人は慎むべきことならん孔孟の言は、遙に之に優れるは疑ひなし、但た尤も及ひがたきのみ、されども日用常行の間の實際の事柄にては到底人を知りがたしとならば、時には虚事を設けて之を試みるも、誠より出でたる虚言ならば、大なる罪はなかるべきか。但た先達の君子が、世間の子弟を取立つるの地位に在りて、獅子の子にもあらざる

ものを、千仞の谷底におとすが如くに試みられては、子弟も魂を喪ひ腰を折ることもあるべし、是れも心得べきことにや、試験にのみ月日を徒消する世の中に遇うて思へる節の一二を、かくはものしつれど、天地爲爐兮、造化爲工、陰陽爲炭兮、萬物爲銅とか、又は世界は大學校なりなどといへる人達の眼より看れば、人の爲す所、何事にても試験にあらざるものはなかるべきか、爪抱子は今かゝる達觀を爲したるにはあらず、



歌反古

藤 村

四鳥の別れ、うき別れ、夢路の夢の生別れ、西東南と北の別れ霜、朝の雲夕の雨、逢ふといへば別るゝといひ、別るゝといへば逢ふといふ、それは世上の憂別れ、逢はぬ別れといふものゝ、露の是世にありとせば、それにも似たる吾心、夢か現か春の夜の花にも似たる身を持ちて、生きて別れて泪川、こゝを瀬にせん蜻蛉の吾身、一つの別れ路や、無限の別れこれぞこの、覺束なきは身の契り、傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易はまた吾子を先立て、枕に残る藥を恨む、それは子故の別れの涙、蘇武は古里遠く捨てられて、高樓の上に砧を擣ち、桃葉はまた仙女に別れて、鏡の桃の花を悲しむ、それは妹背の別れの涙、浮世の春は花もちりぐ、神祇釋教戀無常、品もあはれも様々の、數ある中に忘れじよ、こひしや昔、はかなや別れ、花の色はうつりにけりと讀捨し、吾母の名は小野小町、母が殘せし言草の、其のふしゝも今は早や、草葉の露の手向草、今は形見の忘草、夢の

名残の忍ぶ草、昔を忍ぶ思ひ草、夢どころいふべかりけれ仇し世に、双兒と生れし
 身を持ちて兄は友則、妹は千草、我は兄、君は妹、我幼少にして千草に別れ、人を
 知らねば顔も見ず、生きて別れのはらからや、消さは消えなん春の霜、今は吾身に
 ふりかゝる、袖の涙の身の昔、言はずや時に感しては花も泪を瀧ぎ、別れを惜んで
 は鳥も心を驚かす、あゝ千草、いつかは君と、君と我と、我と君と、いつかは逢瀬
 に頼みをかけて、互ひの顔を見るべきぞや、君と我と、我と君と、かゝる別れに心
 を染めて、盡させぬかなしみとなりぬるかや、琴の音は人の心を寫すといへり、慰
 めかねし吾心、いざ弾かん、琴を弾かん、あらかなし、琴は吾心の糸にあらざるよ、
 わが樂みを寫せども、また湧き上る悲みを寫すあははず、笛ころよけれ、いざ吹か
 ん、笛を吹かん、あらかなし、笛はわが心の竹にあらざるよ、わが悲みを寫せども、
 また湧き上る喜びを寫すあははず、通ふ千鳥の、通ふ千鳥の、千草に通ふ吾心、君
 も戀しや、別れもつらや、泣いては哀しみ、泣いては喜び、笛と琴と、琴と笛と、
 君ならで何をかよるこび、何をか悲しまん、行く水に數かくよりもはかなきは目に

見ぬ人を思ふなりけり、思へば世上のはらからは、かゝる嘆きも知らましを、我と千
 草は双兒ぞや、君星ならば我も星、君露ならば我も露、君花ならば我も花、君霜な
 らば我も霜、譏り易きは世の人の、言の葉草の露霜の心の花にかゝるとも、我は恐
 れじ關はじよ、うもや双兒と言ふときは、聞く人言ふ人の譏りさげしみ、母の小町
 の戀の罰、まのあたりなる天罰と、人の笑ひも身の涙、なまなかに千草の生きて世
 にありと、はかなき事を頼むは劫か、逢はんといふも劫か、別るゝといふも劫か、
 春くれば入相の鐘に花もちりく、散るは花、降るは春雨、春雨にわれさへ深くぬ
 れてしを、君が赤裳の裾やぬれなん、あゝ千草、山寺の春の夕暮きて見れば、ゆか
 りうれしき紫の、花はむらさき、薄紫の花染衣、君がためには染めてまし、染めて
 甲斐なき花染の、袖も泪にぬれひちて、臙ににじむ春の夜の、月こそ物を思はずれ、
 あゝ千草、思へ皐月のあやめ草、あやめも知らぬ夏の夜の、闇夜の水を飛ぶ螢、闇
 に迷ふは螢ばかりか、君故に我も心を闇にして、迷ふ螢の影も恥かし、天の戸渡る
 彦星も、泪に見れば楫を絶え、五百機たてゝ織る布の、たなばたづめも我爲めに、

梭を留めて泣くぞかし、あゝ千草、君ならで誰にか見せんと庭に植えし、吾宿の花
 橋も散りにけり、散るは橘花、吹くは風、其の橘花を袖に入れて、見すべき君の無
 きが哀しさ、あゝ千草、秋や哀しと告顔の、軒塲の風も心せよ、庭にさいたる萩萩
 も、雁に逢はじと言へれば、聲を聞いては花に散りぬる、あはれ知れ、かなしさ
 ものは秋の月、うれしきものは君と我、短きものは秋の日と吾等が命露の花、吾膝
 に照る月も、君が挿頭の花に照る月の光はかわらねど、別れはてたる身の契り、さ
 りとても、秋の夜を長しといへど物思ふ、胸に心を敷ふれば、短かゝりけり短し
 や、あゝ千草、吾袖にふるや霜花雪の花、ふる霜雪よ流れ行きて、君がたもとに
 觸れざるか、君よ戀し、韓藍の花にしあらばころもてに、から紅に染めつけて、か
 らる別れはよもせまじ、君よ董の花にしあらば、紫のこぞめの衣に染めつけて、か
 らる嘆きはよも知らじ、吾身もし是世に人と生れざりせば、かゝる嘆きも見まじき
 ものか、あはれ吾身の水ならば、しがらみ越えて遠く行き、君のはどりに流れなん、
 あはれ吾身の月ならば、三笠の山も越えて行き、君が洗へるぬば玉の、るの黒髪を

照さんん、あはれ吾身の花ならば、流るゝ水に浮び行きて、君がわたりの瀬にこり
 よらめ、あはれ吾身の露ならば、花よりさきに散りうせて、かゝる嘆きも知らまし
 ものを、夢よりも果敢なきものはかげるふの、幽に見えし影とは言へど、かげるふ
 の其譬へよりはかなきは、見も聞きもせぬ其人を、うつゝに慕ふ今の身の、それか、
 あらぬか、幻か、千草の影の春の夜の夢の寢覺にはの見えて、起きてさぐるに無き
 が哀しさ、あはれ世に深き縁のありながら、はらからと生れ出でたる身を持ちて、
 顔も見ず、姿も知らず、聲も聞かず、よしやいかなる是契り、露の浮身のはかなし
 や、あゝ千草、目にのみ君を見るものは、よしや世に君の姿を見ざるども、君の
 聲だに聞くならば、君の姿を耳に聞き、君の形を聲に聞き、耳にも聞いて戀やせん、
 よしや見ることも聞くことも、かなはぬ縁なりとせば、君が匂ひの花の香を、嗅い
 ても戀は知るべしや、よしや見ることも、聞くことも、香を嗅ぐこともかなはねば、
 君の袖だに觸れもして、戀する業もあるものを見ることも聞くことも嗅ぐことも、
 觸れさはることすらも、知らぬ吾身のいかなれば、かくまで君を思ふらん、君の踏

む地は吾踏む地、君の見る月は吾見る月、あるひは翠帳紅閨に枕する床の上、な
 れし襖床の夜すがらや、春は三月、花は落ち鳥は驚けども、桂の眉墨細くかきて、
 袖に匂ふ蘭麝のかほり、君はいづこぞ、夢は姑蘇臺の春を欺き、姿は金谷の花どう
 つるひ、大液の芙蓉、未央の柳、翠翹金雀君の泪に浮びて、ほのかに細き琴の音に、
 國を傾けんと彈き鳴らすらん、あるひはまた下總の國にありといふ、真間の繼橋繼
 ぎ渡し、涙に凍る振分の、髪も手古奈の深翠、口唇の紅落ちて、野末にさける芥子
 の花、朝にさいて夕に落つる、花の風情の賤が伏屋、君はいづこぞ、黄楊の小櫛も
 さ、ずきにけりと、灘の蘆屋のためしもあるを、世は濁江の芥川、芥に月もかさ
 濁る、濁る入江に身を投げし、荷き處女の優心、その心にも似たるべき姿を持ちて
 賤が屋に、泪にぬるゝ花の袖、ひとりうき音を泣き明すらん、あるひはまた出船入
 船引船の、恥ころ旅はかき捨ての、伊達の花さく江口の里、假の浮寝の露やどり、
 夜毎にかはす枕には仇し心の世は情、君はいづこぞ、比翼連理のかたらひ、ゆふべ
 の移香には其にも籠る花の雫、落ちては夢の夢も無き、朝妻舟のあさましさ、こぎ

行く人は君やらん、あゝ千草、思へば多し花のいろく、闇はあやなし梅の花、春
 は彌生の八重櫻、おぼろ月夜の糸櫻、花橘、藤の花、これを花に譬ふれば、君はい
 かなる花とや言はん、桃の花、芥子の花、朝がほの花、白は卵の花、百合の花、行
 末は誰が肌觸れん紅の花、何をかくねる女郎花、紫に染めたは茄子の花、黄に染め
 たは瓜の花、松の花、梨の花、柿の花、露の戀の花すゝき、秋風の芙蓉、白露の
 菊、ほろくゝと散るは萩の花、醒めたるは茶の花、酔へるは紅蓮、落つるは椿、菖
 椿、つらつら椿、山椿、神社の紫陽花、草庵の莖、行く水に影もうつろふ山吹の花、
 はかなきものは露草の花、あゝ千草、花を見れば風をも待たず、落ちては早く色褪
 せて、黄や白やうすむらさや紅や、露に染めたる姿さへ、皆塵埃となりぬるぞや、
 短きものは其命、はかなきものは其姿、うつろひ易きは花の色、どいまり難きは花
 の影、何をか燃ゆる其こゝろ、何をか動く其かたち、色うつくしき花は先づ、早く
 落つると定まりし、かなしき譬のそれにも、君もなごか散らざらん、散らば散れ、
 落ちなば落ちね、散りなばいかに其形、落ちなばいかに其姿、花は何の花、色は何

の色、心は何の心をや、もしもそれとか我獨り、心に畫く千草の姿、目鼻耳口長格好、花のにはひの袖の露、髪はつや／＼振分髪、しか／＼しかじか／＼と、心に書きは書いたれど、それは千草とならずして、もぬけの殻の空蟬の、色もなく、形もなく、何の香もなき影となる、あらかなし、知らぬ千草を畫くとすれば畫かぬ前に消えて行く、花の花ころあはれなれ、よし／＼姿を畫くは我の過り、心に千草の心を畫かん、いざ畫かん、夫れ菊の姿あればまた菊の色あり、菊の色あればまた菊の心あり、姿もなく形もなく影もなく色もなく香もなき小野千草、いづれをいづれと分さ難き、花の心を畫かんとは、あらかなし、何を心とし何を心とせん、何を畫き何を畫く、吾身一つを譬ふれば、ひたと盲たる兩眼に、見れども見えぬ様花を、せめて一目は見まほしと、目に押當て、泣くごとく、何の心を狂亂ぞ、夢と思へば彌増して、心にかゝる花のつゆ、人の譏りもあるぞかし、とは思へどもこれやこの、行くもかへるも別れては、知るも知らぬも逢坂の、うれし思ひ出す度毎に、立つては思ひ居て思ふ、人ごとの一つの夢はあるものを、我が夢を我が泣くに、誰

かは譏り誰か恨む、いははすら行き通るべきますらをも、戀には後の悔ありと、古き歌にも聞いたれど、世にはらからを忘れかね、後悔ありといふことは、ついに聞かざる歌ぞかし、あるひは桃葉の智にならひ、我も鏡を取出し、千草に似たる人や誰、双兒の契り今見ると、鏡に影をうつせども、驕慢多きは人心、誰かは鏡の顔を信せん、あるひはまた山吹の花にならひて、流るゝ水の岸に立ち、まことの鏡、まことの姿、影もまことに似よかしと、立ち寄つて差覗けば、影は流れてしばらくも留らず、あゝ千草、静かに夜の月を見よ、盈つれば缺くる世のためし、ためしは今の今の今、露の是世の宿のみならで、天の上にもあることか、あるひは花の色を見よ、色うつくしき花は先づ虫を誘ふと極まりし、天の定めもあることか、よしさらば君もなぞか缺けざらん、缺けて哀しき花の身の、心のろれは驕慢か、嫉妬の思ひ執着の鬼の呵責に逢ひけるか、人を恨むかさげずむか、泣くか、笑ふか、狂亂か、缺くれば缺けて落つる程、あはれ彌増す花の色、熱や瘡や百病の血につきまどふ如くに、色はつや／＼花橘の、染めてうれしき人の身も、不幸薄命とやらいふのも

、其むとらしき足下に、まのあたりなる無間の呵責、無間の鐘をつきつくる、呵責の涙、血の涙、それぞれあはれな世の細工、天の細工もあることか、思へばかなし別れ路の、誰がより初めし糸なれや、母は出羽の郡司小野良實が娘、大江の惟章が心がはりせし程に、文屋の康秀參河の掾となつて三河へ下る、縣見には出で立たじやとありければ、身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ、いなんと思ふ夢の世の、浮身は同じ浮ぐさの、戀の深草の四位の少將、淨衣の袴立烏帽子、豊の明の節會にも、逢はでぞ通ふ庭鳥の、時をも返す曉の、榻の羽がき百夜迄、百夜といはず九十九夜、三三が九十九夜のあかつき、露となつて花に散りぬる、母の歌といふは遠く衣通姫の御流を汲み、清涼殿の文の花なりしかど、老いて誰をか松坂や、四の宮河原四つの辻、花となつて開き花となつて散り、ちりては夢の夢もなき、關寺の鐘のこゑく、大方の聖の御道も、願ふともなく願はぬともなき世に生れ、髪はつやくまつくるぐる、桂の眉墨羅綾の衣、色はたちばな花橘、襦は紅、帯の結紐うす紫、染めてうれしき花染の、衣の襦に通ふは千鳥、胸には炎ゆるかげるふの、

あ、ら、ゆ、る、花、の、悲、み、喜、び、心、は、風、に、さ、そ、は、れ、て、う、ら、が、へ、り、易、き、戀、の、葛、の、葉、く、る、り、く、る、く、る、く、る、り、譬、へ、ば、世、上、の、言、草、に、も、越、鳥、南、枝、に、巢、く、ひ、胡、馬、北、風、に、嘶、く、と、い、へ、り、親、を、思、ひ、古、里、を、思、ふ、は、心、な、き、鳥、に、も、あ、る、習、ひ、子、と、し、て、親、に、肖、る、は、畜、類、に、も、あ、る、た、め、し、蟬、の、子、は、蟬、に、似、る、蝶、の、子、は、蝶、に、肖、る、あ、千、草、君、も、な、ど、か、肖、さ、ら、め、や、さ、り、な、が、ら、舜、は、瞽、瞍、の、爲、に、井、を、浚、ひ、伯、奇、は、親、の、爲、に、霜、を、履、み、し、と、か、や、こ、い、ろ、な、き、一、つ、葉、の、一、つ、だ、に、子、は、親、に、似、る、世、の、た、め、し、定、め、な、き、世、と、言、ひ、な、が、ら、人、界、の、定、め、な、さ、花、に、假、寝、の、草、枕、仇、し、心、の、情、に、も、親、の、知、ら、さ、る、佛、を、宿、し、見、ぬ、て、は、消、ゆ、る、石、の、火、の、ひ、か、り、待、つ、間、の、戀、こ、い、ろ、假、の、情、の、戯、れ、に、か、は、す、手、枕、朝、妻、舟、朝、妻、舟、の、中、に、だ、に、親、に、似、ぬ、子、の、泣、く、ぞ、か、し、一、世、の、契、り、身、の、縁、母、の、小、町、の、戀、の、花、君、な、ら、で、誰、か、に、散、り、誰、に、か、落、ち、ん、君、と、母、と、母、と、君、と、似、た、は、形、か、姿、は、か、り、か、目、元、の、汐、と、引、眉、と、母、に、似、た、は、似、た、れ、ど、も、似、さ、る、は、口、唇、の、花、な、る、か、花、こ、う、似、た、は、似、た、れ、ど、も、似、さ、る、は、く、ろ、く、振、分、髪、か、ま、つ、く、ろ、く、ろ、の、黒、髪、も、目、鼻、耳、口、長、格、好、見、る、に、甲、斐、な、き、別、れ、路、の、糸、よ、り、細、さ、身、の、契、り、何、に、つ、な、が、る、縁、な、る

らん、さつさまつ花橘の香をかげば、もしも千草の袖の香の、かゝるにはひにあらぬかど、反て花に涙を流し、南の軒に秋の月、膝にうつして眺むれば、君の姿のうつるかと、反て月の色をかなしむ、あゝ千草、かゝらざりせばかゝらざらまし、何の春雨何の霜、春の寢覺の夢枕、枕を照すともしびの、丁子の花も落ちうひて、影にかいよふ虚蟬の、君のえまひし面影も、朝に見れば夢もなし、寐覺の里は遠けれど、君よ砧を好むとならば、我も寢覺に行きてまし、關の藤川遠けれど、君よ伊吹の山ざくら、さくらの花を惜みなば、我も藤川越えてまし、横野の村は遠けれど、君よ堇をつまんとならば、我も横野に行きてまし、物聞山は遠けれど、君よ五月のほどさす、鳴くや其音を好むとならば、我も伊香保に行きてまし、窟の八島は遠けれど、君よ無常の薄けふり、野中の清水汲まんとならば、我も八島に行きてまし、深母の浦は遠けれど、君よ岩間の蓼の花、花にもうつる磯の月、月にも通ふさよ千鳥、啼くや千鳥を聞かんとならば、我も繪島に行きてまし、泪の池は遠けれど、君よ恨みの世を詫びて、泪ににじむ染衣、袖にうき音を泣かんとならば、我も泪に通はま

し、心は筆に語るども、筆は心に及びもなき、いかなる果の身なればか、薄きえにし、今の身よ、焼野の雉子夜の鶴、同じ音を泣く戀を泣く、うれは子に泣く老の鳥、われははらから呼子鳥、せめては暫し慰むと、あやしき歌の根無草、かさあつめたる藻鹽草、花も香もなきふしを、なにぞゝろなく筆にまかせて、

夜 半

大和田建樹

(一)

天しづか地もしづか	木の枝にねぐらあらうひ
さわぎつる鳥はいづこぞ	吠えくる牙がみたけりて
友よびし犬はいづくろ	奥山の穴にすむ熊
大峰の木に巢ぐふ鶯	晝の間の慾もわすれて
蝶と飛ぶ夢はいづくぞ	春の夜は今ころなかば

里人の見すて、いにし
夜あらしのこゑ

(二)

山もしづか海もしづか

柴人が妻木の斧の

おとたえて鳥も歌はず

おとたえて帆影も見えず

舟人が漕ぎゆく楫の

磯ぎはに貝はる少女

山里に糸くる少女

丸寐する枕はいづく

世の中の戀も忘れて

浦風のさめて友よぶ

春の夜は今ころなれば

ねばるよの月

波のうへに歌ふはひとり



静御前

残花生

若菜の上に「友まつ雪のはのかに残れる上に、うち、りうふ空を詠め給へり」と云へ
る一段あり、この友まつ雪の文字ほどをかしき言はあらじ、今の世にもてはやす擬
人法にもかなへり、かの末摘花にある「橘の木の埋れたる御隨身召して拂はせ給ふ、
うちみがほに松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼる、雪も」といへる雪は怨み
がほに起きあがりて松の白雪さらくと仇なるふしあり、されど、間垣の下にひと
りさみしく友を離れし残んの雪は、恰も是れ青塚一叢の秋草に喘えぐが如き孤螢の
光、昭君が氈帳裏の涙に映するの觀あり、上天下地道里悠々として音書寂々たり、雪
もし情あらば日影まつまの身をかこちて涙欄干たる時ある可し、
非情の残雪情糸を織り就して有情の趣味を人間に與ふ、況んや美人の悲歡離合に於
るをや、恨人の感測る可からず、
義經姫静が吉野の奥にてあかぬ名残りをすて判官殿に別る、や、雪の下行く細谷川

の水の音、さびしかれよと一、聲二、聲梢になく鳥の聲、からくして藏王堂の廣前にぬかづき判官殿に今一度合せてたべと祈りしは亦た是れ友をはなれし谷間の白雪か、

「ありのすさみのにくさだに、ありさのあとは戀しさに、

あかではなれし面影を、いつの世にかは忘るべき、

別れのこと悲しきは、親のわかれ子のわかれ、

すぐれてげに悲しきは、ふさいの別れなりけり、」

噫、夫妻の別、若大衆も荒法師も理せめて袖を絞らぬはなかりしならめ、靜女は何者ぞ、磯の禪師が娘にして都に名立たる白拍子なり、當時朝家の御覺めでたき源判官義經の妾なり、堀川夜討の當日と云ひ大物の浦より其主判官と同船し終に吉野の奥まで従ひしを以て考ふれば、靜が義經に於る情交、義經が靜に對する鍾情の有様は世情の炎涼富貴の外にありしなる可し、北の方と仰がれし平大納言時忠の姫君は璽の箱を乞得ん爲に意ならずも情を籠めし女なり、川越太郎重頼が女は本妻なれども義經が最愛の人にはあらざるが如し、多妻の弊風は今日の道徳を以て論ず可から

ず、情交の濃疎を以て男女相愛の道を考ふる時は何時何代として尊貴なる戀愛の活潑々地に人世に現はるゝを視ざるとなし、義經と靜に於けるは戀愛の極致に對し千載の下恍として艶羨に堪えざらしむるものあり、試に思へ、六條堀川の館に夜半端なく鯨波を發して土佐坊が率ひし兒玉黨の六十餘騎が押し寄せし時、酔倒せし義經を呼び覺まし、は誰ぞ、緋緘の鎧ザツクと取りて義經に投げ懸けしは誰ぞ、平大納言の姫君に非ず、川越重頼の女に非ず、今様をかしく唱ひ、時としては太鼓打たせて一番舞ひいでたる白拍子靜なり、鵬越の戦、壇の浦の闘ひに身を鍛え、金賣吉次に從がいて奥の果まで流浪の身となり、陰險なる兄頼朝の機嫌氣稜を取り、熊熊に似たる坂東武者を兄頼朝の代官として指揮したる九郎義經なれば豈に手もなく足もなき深閨の姫君等に世波に倦みし心をば慰めんや、世路に悶えし情をは懐ましめんや、白拍子靜が水干姿は見る人の腸を斷ち、袖飄かへす舞の手ぶり今様唱ふ聲音、柏子をかしく踏みとゝろかす舞ひの足どり、公卿も殿上人も坂東武者もあれよくと手を搖かせば手をのみながめ、足を動せば裳裙をのみながめ、笑めば物怪の付きたる様

にわなくと振ひ、唱へば心耳を澄まして恍惚とし、たゞ線糸をもて見る人の心も身も静が織手に引かるゝに似たり、斯の静が艶姿は明眸皓齒細骨輕驅の外形に現はるゝ而已に非ず、其心意其情緒、所天に對する謹嚴と情夫に對する密話の趣味を具へ、呂律調ひ琴瑟和し、簾中の北の方も赧顔む行儀あり、又た火邊にばうぞくなるもてなしにて、白き羅の單襲、二藍の小袿なつどのないがしらに着て聲低くに歌唱ふが如きうちどけし夫婦間の情味を露すをりもあり、武藏坊辨慶も三井寺にて釣鐘ひきずりし手を袖口に縮めて盃を給ひ、佐藤忠信も碁盤をつかみて北條の軍兵を擲り殺し、怒顔の鬢の毛艶に搔き上げて會釋す、又土佐坊昌俊が夜討の初夜、女の童子を渠が陣所の近傍に遣りて其動靜を偵知しめたるが如き、靜御前は才色兼備の白拍子なり、節操凜乎たる烈女なり、嬌艶たる美人なり、義經が鍾情も宜ならず哉、詩伯テニンソンがイサベルを詠じたるは何如なる美人をや觀し、假令渠が理想の美人には適せずとも義經姫靜の事を地下の詩伯に語らまほしきと多し、曰く

“ Eyes not down-dropt nor over bright, but fed

With the clear-pointed flame of chastity,

Clear, without heat, undying, tended by

Pure vestal thoughts in the translucent fane

Of her still spirit ; locks not wide-dispread,

Madonna-wise on either side, her head ;

Sweet lips whereon perpetually did reign

The summer calm of golden chastity,

Were fixed shadows of thy fixed mood,

Revered Isabel, the crown and head,

The stately flower of female fortitude,

Of perfect wifehood and pure lowlihead.”

カインはアベルと争ひ殘酷の一撃の下に其弟を殺しぬ、このアベルの血は流れてカザリアに至り、カインの嫉妬の念より上騰せし熱血の色も數千年の後まで人世の

色相となり畢んぬ、曹丕は曹植を除かんと欲し七歩の吟を以て骨肉が生死の運を試む、噫、同源分流混々たる汚濁の長江は鏗琤たる清泉を呑みて飽かず、七歩の吟に未だ満足せず、必ず之を罪に陥れんとして聲に應じて「兄弟」の詩を作らしむ、曹植が當日の光景は白刃を頭上に垂下して一縷の危きを吟聲の中に繋ぐに似たり、曹丕が背後には地獄の暗黒後ひ來りて彷彿の中に惡鬼火炎を噴きサタン切齒し毒蛇青烟を吐き劍山湯池が朦朧として現はるゝもの、如し、兄の曹丕は峨冠金帶錦袍の閻羅王か、穀艸として死地に就く小羊は誰が子ぞ、父曹操の子にして丕には弟なり、煮豆燃豆箕、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急、豆を以て豆を煮る其聲慘、惡趣甚茫茫、冥々無日光、屍のあるところに驚あつまりぬ、

鎌倉の巨頭公も亦た曹丕の一類、其弟義經を觀ると蛇蝎の如く渠れ才を懷き智を抱く終に池中の物に非ず若し早く除かずんば必ず後患を爲さんと、腰越より追ひ歸せり、土佐坊を以て害せんとせり、大軍を發して誅伐せんと爲せり、諸國に關を置きて恰も狩場の狐兔の如くに追へり、英雄とは木石の化して人と爲りし者か、豪傑とは

夜叉の變して世に現はれしものか、相韓卿趙棍中風、霸楚王吳檻外猿、王侯畢竟一文錢に値せず、賴朝は名利の潮流に舵を握りし一舟子のみ、野老家風至淳、只管村歌社飲、夕顔棚の下涼は渠等終生知了せざる所なり、

靜を八幡の社殿に舞はさしめし者は誰ぞ、源二位賴朝なり、舞はさせられしは白柏子靜と稱する磯禪師の女に非ずして、從五位尉源義經が妾なり、當時の社會より論ずれば妻妾の別も輕重を其間に爲す可きに非ず、正しく靜は賴朝の舍弟義經の妻なり、其靜をして稠人の前に舞はさしめ、渠を看ること一舞妓に過ぎず、賴朝非情の動物なる哉

殘雪も友まつ空には望なきに非ず、梅花籬下の村消え斷魂の情趣あり、然れども櫻桃の紅白研を争ひ美を競ふに及びては、天地の良緣茲に斷絶して上天下地の宿因終に滅し、殘雪は無情奇酷の天日の影に消失す可し、靜女が命運も亦た陽春の殘雪に似たり、判官殿は白河の關のあなたに逝きて音訪なし、都に時めき給ひし頃の配下の將士も郎黨も悠々たる行路の人と去りて今は誰れ一人我を訪問ふ人もなし、靜が

八幡の廣前に立ちし時は四圍皆な渠に同情を表す人に非ず、弓矢八幡も内陣深く坐し給ひ源家の骨肉が相争ふを知り給はざるか、吉野の藏王權現もかの雪の日にぬかづきて祈禱りし聲には應じ給はざるか八ツの耳振り立て、聽し召すとは空言なるか、秋雨になやむ叢間の胡蝶、嵐にもまると高嶺の花か、坂東武士の錚々たる工藤祐經、島山重忠が鼓と銅拍子の音色につれて力弱くも舞ひ出でたり、仰けば高く翠簾を垂れて坐するは誰ぞ、他は右幕下とも云へ、二位とも仰げ、源氏の棟梁にもあれ、正しく我には夫を困しむる當の敵なり、妹背の中を押し離したる無情の人なり、氏の神も見そなはせよ、舞の手振りも今様も夫の仇の情を慰むる爲にとは學ばざりしよ、習はざりしよ、如何なる責苦にあふとも厭はじ、如何なる苛責を蒙るとも避けじ、殺さば殺せ打たば撻て、やはか頼朝を祝す可きやと一ト聲高く唱び出でしは

しづやしづ倭布のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな

昔を今になすよしもがな、六條の春の風、堀川の秋の雨、大物の波、吉野の深雪、安きにも危きにも鸞羽未だ嘗て孤ならず蓮頭常に自ら並びしを、鎌倉の焼鎌もて、

夷心のまだ去らずや妹と背の中を裂き、斬り、断ち、口惜しど、柳眉も舞袖の風に逆立ち、桃蹠も断腸の涙に色褪め、雪に伏す吳竹の力を籠めて起ちしが如し、社殿も廻廊も寂然として人聲なく、四邊物音断えて神寂たる擔頭に天籟のをりく、銅鈴に觸るゝ響あるのみ、島山も工藤も轉た凄慘の情に堪はず蕭然として其座を退出でぬ、簾中は如何、頼朝の怒を靜むる政子が同情の温かさ聲あるのみ、陪覽の諸士は聲をのみ、頭を垂れて肅然たるのみ、纏頭は綾か錦か威儀めしき士一人靜の傍に携わ來りぬ、嬌として力なき雨中の垂枝櫻、やうやく他に助けられて社殿を退けり、靜が一生の大事は鎌倉にあり、鎌倉の以前鎌倉の以後正史は憑るに足る可き事實を載せず、靜は東に行きて途に死せしか西に歸りて家に死せしか、諸説紛々として確實なる傳記を編むと能はず、假令詳細なる事實を識り得るとも靜が精神を露はし、は鎌倉の舞曲に在り、靜が凜然たる節操も、脈々たる情緒も亦た鎌倉の舞曲に在り、

ダンテが理想は少女ビートライスに在り、渠はこの美人より、美の極致を採れり、

静が美は誰が汲みて鏘然たる泉をひすぶや、我は信ず静が鎌倉の舞曲の一段を讀みし、男女の胸間には中將姫が藕系の曼陀羅の如く、さゝ蟹の蜘蛛の糸細くとも白玉の如くに、光輝を飛し、我が國粹の理想を織り出して眞善美の三尊の光明となりしならめ、静は容色の美によりて義經に愛せられたり、一、静は機敏なる才によりて義經に愛せられたり、二、この一と二は都の静にて白拍子にも見ることを得可き點なり、

静は冷熱によりて其情人を離れず爲に義經に愛せられたり、一、静は雪になやみ荒法師に責られ止むを得ずして良人の行衛を敵に白狀せり、この所豪邁なる武夫の歡心を獲る故なり爲に義經に愛せられたり、二、此一と二は吉野の静にて白拍子の能く爲す可き點に非ず、

静は良人に別れ同情の友なく鎌倉に送られ現身の義經には愛せられずと雖も、夜に孤灯の下に心靈上の相愛を楽しみたり一、静もし情を断ちて秋波を他に微しく動かすとあらば、錦衣玉食は言も更なり、母磯禪師を安穩に養ひ鎌倉山の星月夜に燦爛た

る光輝を争さふの榮もありしなる可し、静は此を取らずして彼を採れり、彼とは何んぞや寡婦となり遺子を殺され江湖に落魄するこの三悲劇なり、一、この一と二は鎌倉の静なり、

友まづ雪は鎌倉山の旭に消えぬ、消えしは姿、消えざるは神」

等しく年頭の廣告に一は謹賀新年と云ふ、賀するなり、一は旅行中若くは多忙に就き欠禮と云ふ、賀せざるなり、某の如きは此區別を明かにし旅行中年始拜趨欠禮、謹賀新年と廣告せり

炬火御禮と云ふは宛かも火事に禮云ふが如し一時世に論ありたることありき内務省免許の肩書ある賣品は多くは怪しげなる品物あり

酒屋、藥屋、小間物屋など頻りに何々會御用、何々殿御用と言ひふらす、御用畢竟何の看板ぞ

定價定價に非ず、正價あり、特別正價あり、正札も近頃あてにならず、店によりては眞正の正札何錢と書きつけたるものあり

學海偶筆

學海 居士

軍中に鳩を使用して信を傳ふる事は、昔佛戦争の時、行はれて、大に利益ありしことは、人の知る所なり、近來ますます、その法を練磨し、吾邦にも、この使用を講せらるゝよしなれば、事新しくいふべくもあらず、こゝに燕もまた使用すべきにやと思ふよしあり、されど、これは常にあるものならねば、鳩の如くには用ふべくもあらず唯今の奇なるをもてこゝに録出す。

金國の益都宣撫使田球といふもの、金の明昌丙辰の歲、塞外の軍に従ひ合虜山の野舎にありしが、この地は荒涼として、實にろのさびしさいふ可らず、折しも、春の未なりしが、二匹の燕ありき、この家に巢を作りてけり、土人は燕といふことを知らず、これを捕へんとせしが、球これを憐みて、捕ることをゆるさず、つねに、餌を與へて養ひけり、この燕晝は出て、夜かへること、少しも時を違へず、球必ず夜に入りても戸を鎖さずして、つねにその歸をまちにけり、しかるに、或る日、この燕羽たゞ

して、家のうちに、飛び入り、座隅に止りて、しきり囀りやまず、球ふと思ひ出るに、はや明る日は秋社の日なり、この日は燕が、へり去るを常とす、さらば別を告んとて鳴くにやと、なほ憐さまさりければ、詩を作りていふ、幾年塞外歴_二崎危_一。誰謂烏衣亦此飛。朝向_二芦陂_一知_レ有_レ爲。暮投_二茅舍_一重相依。君憐_レ我處頻迎語。我憶_レ君時不_レ掩_レ扉。明日西風悲_二鼓角_一。君應_二先去_一我何歸と球は斯く詩を作りしが、唯このまゝにてやみなんも、忍びがたく、萬が一、この燕我を知りて、再び尋ねくる事もやと、細かに、この詩を紙に寫し、蠟丸のうちまろめ入れて、織き糸もて、飛にも障りなきほどに、燕の足に縛りて、放ちやりけり、この明る年四月球が代りとして、こゝに來るものありければ、都にかへり、八とせを歴て、泰和甲子の歲路州の觀察判官に任せられて、かしこに赴きしが、四月十二日廨舎の含翠堂といへるに座しむたりしに、何許よりともしらず、二匹の燕飛び來り、その一は簷端のうへに飛び上りしが、一匹は屋のうちに入りて、球が机の上なる研屏に止りぬ、球はいと不審くおもひて、眼を定めて、つらくみるに、その脚に繫あるは例の蠟丸にてありけり、あまりの

不思議に驚きて、いろぎこれをとりにしかば、燕はすなはち飛び去りぬ、文字少しも消えうせず、八年の前にしるし、墨痕宛然として讀まれけり、よつて諸友を呼び集めて、これを圖に寫し、題詩を求めしかば、皆これを感じて、詩作るもの多し、かの有名なる元遺山の集にも、此詩あり、以上の事實は田琢が自らしるせし文あれば、作り構へし、説に非ず、おもふに、燕のみにかざらず、すべて人家に狎れ近き動物は、これを利用するときは、大に助けをなすものなり、山柄といふ鳥も、これに技藝を教ふるときは、さまざまの戯を爲すも同じ道理なるべし、後來ますます文化開けゆかば、海中の小島など、この燕によりて、内地の信書を通はす事も自ら出來べきにこそ、

兒島備後三郎高德の事、先年重野成齋ぬしが、太平記の偽造にして、實にこの人無しとて、一時史學の爲に大に議論起り今に至るまで決せず、成齋博士は高德は有功の人物と稱すれども、建武二年記を始め、當時の文書類に見えず、獨太平記にのみ載せられたれば、覺束なしといはれたり、げに太平記は、文飾多く恠談の説も多ければ、

盡く證とし難く文書等には、及ばざるべけれども、さりとして、事實は文飾多しども、その姓名などは、全く偽りともいひがたし、殊に多くの人名を偽造すべくもあらず、博士の説に従ひ高德一人を無きものとするも、こゝに高德の一族數人の名、太平記に見えたり、此等をも、盡く偽りとすべきや、第四卷備後三郎高德の事とある段には、二心無き一族共を聚めて評定しけるとも、心ある一族どもみな此義と同じどもありて、その名見えざれども、第十六卷兒島三郎熊山に揚旗事の段には、今邊の親類共に事の仔細を告げたりければ、今木、大富、和田、村越、原、松崎の者ども取物も取敢ず、馳付けるとあり、この段の末に、今木太郎範秀、舍弟二郎範仲、中西四郎範顯、和田五郎範氏、松崎彦四郎範家主從十七騎と見えたり、高德の父を備後守範長といへるは、この範の字一族實名の排行と見えたり、高德の徳も、もとは範の字にやありけん、晩年に剃髮なせしとき、實名をや、かく法名として、その時字を改めしを、太平記を作りし頃風と後の名をしるしにけんも、知る可らず、とにもかくにも、一族の名字斯く明らかにしるしたるからには、その事蹟のおもしろき事

は、偽造とするも、その人無しとはいふ可らず、もし高德を無しとするときは、一族すべてろの人無しと塗抹せざる可らず、太平記の作は足利の時に出来しものなれば、足利に對して罵詈を縦にせし人を故さらに作り出すべくもあらず、範長が足利の御教書を破り棄てし事は殊に足利方にては、忌むべき事なるを、少しも諱む事無きも偽作にあらぬ一證とすべし後世小説などを作らんには、幾人も人名を造り出すは、怪むに足らずといへども、此太平記はさまでに、年代隔てしものにあらず、しかるに、斯く數人の人名まで、偽作すといふは、人情にあるまじき事ならずや、又博士は建武二年記の武者所及雜訴決斷所等の人名のうちろの名見えす、よりて高德は全く無き人なるべし、實にろの人あらば、この記などに、必ずのせらるべき人なりとあるは、一わたりは聞えたる説なれども、高德ははじめ主上を奪ひ奉らんとて志を得ず、そのうち千種中將忠顯に従ひ、京攻の兵を率ひしかど、不幸にして忠顯敗北して、功無し、又足利氏と備後の船坂の戦にも敗北せり、いづれもく戦功無き事なれば、南朝にても、あまり用られぬ人物なり、要するに、志ありて、才無く、勇あ

れども、智乏しく毎戦功無しと見えたり、されば、北條征伐にもさせる功名なく、武者所等の人名のうちにも加へられず、さばかりの、恩賞も無ししならん、ろの不幸は實に憐むべし、しかるに、數百年のうちに至り、また博士の爲にろの姓名さへ抹殺されしは、實に不幸に、不幸を重ねたる人といふべし、成齋博士が名家談叢にのせられたる、織田信長公の話のうちに、明智光秀が公を弑せしにつきては、こゝと擧ぐ可き實録なし、こは不意に起りしものと思はる、ろは愛宕山にのほりて、連歌の會を開きしとき、山より本能寺は目の下に見えたりしかば、風と反逆の心起りしなるべし、ろの時光秀が連歌に時は今あめか下しる皐月かなどよめり、これその天下を取んとするの意を、あらはし、なり、此句によりてみれば、山より、本能寺を見おろして、その備無さをみて、風と起りしものとしらるゝとあり、博士は太田和泉守が信長公の記にのせたる、愛宕山の連歌の事をよみ、ろの記のうちには、さらに光秀が叛謀の次第をくわしくのせられざるがゆへに、しかるはれしと見ゆ、されども、此記はきはめて、外にあらはれたる事實をのみしるして、

殊にあらくしるしたるものなれば、此記に見えずとて、さらに他證無しとはいひがたかるべし、甫庵の太閤記は博士はとらざるやうに聞えたれども、この甫庵も和泉守と交りて、當時の事をさし得たる人なれば、その記は中には誤もあるべけれども、おしなべて、作りものとも見えざるなり、そのうちに、惟任はらくろに思ひ籠めし宿意は家康御滞留中饗膳等善盡し、いとなみ可申旨に依て十日計の用意おびたしき事にて侍りし處に、備中表出勢の儀、御ふれにより恨奉りけり、いはゞ心にかくべき事にて無し、又信長公も惟任が勢計を至_三于西國_一遣はし、其身は在_三安土_一家康馳走いたすべき旨にてあらば、宜しからん物と、御心任せのみにて大臣を憚り給ふと無りしに依てあやかりしなりとあり、これによれば、徳川公を饗應の役を蒙りしうへ、俄に出勢を命せられしかば、その役使の酷暴をいかりて、俄に亂を起し、やうに見ゆ、但これ等の事にて見るときは、信長が光秀を虐使せしと、この一事のみにあらずと覺ゆ、この文中に大臣を憚り給ふと無りしの一語にてしられたり、徳川公饗應の事のみにては、弑逆の心を起すべきほどの事に非ず、普通の信長記に

いふ如く、信長が兇暴にて、しばし光秀を罵り辱め又は不法の逆使多くして、この饗應の如きは、度々にありしにより、光秀怒を積みて、事を起し、なるべし、唯風と愛宕山にて、その本營を看をろして、起りしとはあるべからず、いかに當時の人心といへども、風瀾の人にあらざらむに、いかで、己が主の本營を目の下に看ばかりの小事にて、弑逆の心を起すものあらんや



風流妄語

十千萬堂 紅 葉

〇まつよひ

吾兄子の來べき宵なり鶏子酒

此の俤をおもふに、姿は肌薄の風を怯れず、立膝に火あふぐは懐紙な
るべし、さりりや櫃子の月は残粧の頸に寒く淺草寺の鐘は癩をおさへ
て聽くらん

〇しのぶよ

忍ぶ夜や水漬ふかす緋縮緬

歌ならば涙の氷るべきを裏口の咳合圖もあだに時來ること遅く頻に催
す水漬のをかしみ、俳には之を憐むべし逢ふ嬉しさに長襦袢の袖はを
しまぬ魂介子推が股と雖も志は一なるをや、

〇わかれじ

別路や氷にすべる物おもひ

或は犬の尾を履み按摩に行きあたり、俯しては移香のなつかしきを嗅
ぎ仰ぎて口舌の忘れたるを憶ふ、覺束なの足もとや、行々重ねて昨夜
の夢路を行く

〇たしなみ

思ふ人に此面見せじ煤拂

好き男の惜しげもなく埃に塗れ、煤打被きて、戸棚を這出で雑巾桶の
水鏡にふと我影の、獨り興さめて佇むを、志ある婢の忍び寄りて背を
撲け、茶漬くへどや喚くらむかし

〇てなべ

手鍋さぐる胼をかくすや閨の内

今はと翠帳を忍出で、皂角子原の奥を志し、身はならはじの粉炭を
つかみ、豆腐を刻みて、樂みの夕は袂に残んの伽羅焚いて燈火に向ふ

を、横顔の羸疲に男は泣くゆり、

○むふんべつ

恨みわび河豚くうて寐る夕かな

惜しからぬ命なりけり、日頃の望この時と、河豚食ひたるはいやしげ
なれど、理せめて情はなかく勝れるにや、死ぬとばかりに食過ぎて、
無理心中の夢に驚くなかれ、

○ふしゆび

わりなしや言寄るべくも葱の口

折から人も無さに、今日を免さじとすれば、口の香のはしたなきに心
付きて、ためらふ間に遁けられたる、いと優し、なにがしの博士の娘
も、極熱の草藥を服しては、物越にて逢ひて侍りけるよ、

○えんきり

縁切りて歸る夜更けぬ川千鳥

門を出づる心の闇路、生きて別の盃は酔を成さず、涙痕風に氷りて、
浮世の義理は腸を断つ、春や昔に柳枯れて、安んぢ人の行末の流に似た
る、



孔子と馬琴

大町桂月

英國人民を化せしものは、半はバイブルの功にして、半はセークスピアの功なりと云へるもの、決して偶然にあらず、沙翁の作中、時に耶蘇教の臭味を帯ぶるものありと雖も、必ずしも耶蘇を祖述せるにあらず、而して能く耶蘇と並稱せらるゝものは、豈に文學の餘徳にあらずや、

今之を東洋に覓むるに、人心を化せしとは、孔子、耶蘇よりも更に大なるものあり、トーマスが孔子を評して、孔夫子の智慧は高尚の意味に於て、確精若しくは深奥と云はむよりは、寧ろ賢明透徹と云ふを妥當なりとすと云へるは、中らずと雖も遠からず、極はめて精確なるにあらずんば、宇宙の眞理を爬羅剔抉して、以て哲學を組織するを得ず、極はめて深奥なるにあらずんば、思想を過去未來に馳せて、以て宗教を創立するを得ざるべし、孔子は固より宗教家にあらず、又哲學者とすれば遜色なきにあらず、孔子は實に教育家なり、而して區々學校子弟を相手とする教育

家にあらずして、上は王公より、下は士大夫に至るまで、苟くも世界にある人類を化せむとする大教育家なり、うの大なると、耶蘇一輩の能く及ぶ所にあらず、唯其れ孔子は賢明透徹なり、故に現世を達觀して、法を萬世に垂れたり、其言、迂遠ならずして剴切に、其教、空想ならずして凡て實行すべからずといふとなし、西洋の哲學は、主として、吾人及び吾人の住する此世界は何物なるかを探求す、その眼極めて冷やかに、血もなく、涙もなし、支那哲學は、主として、吾人は如何に行動すべきかといふ點に、立脚地を求む、眼中唯人間の行爲あるのみ、身を修め、家を修め、國を修め、天下を修むるなど、一に人類が社會を爲して生存するに欠くべからざる方則を説く、學問としては或は高尚ならざるべし、然れども血あり、涙あり、一に社會の爲に盡せり、孔子が聖人と呼ばれる、所以のもの、實に此に存す、

西洋哲學も主として、吾人及び吾人の住する此世界の何物たるかを探求せしが、近世の傾向は、更に一步を進めて、重きを倫理學に置くに至りぬ、倫理學とは何ぞや、人の義務を説明する學問なり、試にカントを見よ、カントは、哲學其物を研究

するの意あるにあらざして、唯、吾人の竭すべき義務を研究せりと云はるゝにあらざや、カント先づ、クリチック、オフ、ピユア、リーゾンを著して智力を説き、次に、クリチック、オフ、プラクチカル、リーゾンを著して道徳を説けり、カントの主意、智力にあらざして、道徳にあり、智力は道徳を説くの準備として之を説きたるなり、又スペンサーを見よ、哲學原論、生物學、心理學、社會學などを順次著はし來りて、最終に倫理學を著らさむとせしに、年漸く老い、精力漸く衰へて、完全なる書を著はすと能はず、わづかにデータ、オフ、エシックスを世に公にして以て倫理學の一斑を説きしにあらざや、スペンサーの意も、倫理學を主とせり、而して哲學原論以下の書を著はしものは、倫理學は至大複雑にして最も多くの準備を要すと信じられたるなり、然れども天之に春秋を假さず、スペンサーの心中、實に想ふべきなり、

孔子の説きし所は、必ずしも科學的ならず、孔子が唯冷かなる理屈を以て説明するに止まらずして、實踐躬行を期するなど、固より今の所謂倫理學とは異なれども、

人の義務を教ふる終極の目的に於ては、更に異なる所を見ず、孔子は前世を説かず未來を説かず、亂神怪力を説かず、既に生を知ざれば、また死をも説かず、彼智力を説き、哲學原理を説き社會學を説きなどして準備を作るが如きをもなさず、直に吾人は何が爲に世の中に生存するかの大問題に着目し、更に進みて如何にして完全に生存すべきかの方法を研究せり、固より宗教の如く、人の弱點に付け込みて、神を説き、未來を説くが如きことをなさず、又西洋諸哲學者の如く、準備の研究に遡巡せず、吾人の何物たるか、世界の何物たるかなどは、暫く之を度外に付し、直接に人心を化せむとせり、これ宗教の迷信なき人種に向て之を説くを得べく、明慧、孔子の如き人にして、始めて之を能くするを得べし、哲學を研究したる後、漸く着目するに至りたるカント、スペンサーなどの諸哲學者の傾向をば、孔子、數千年の前に於て、既に早くも之を爲せり、今の所謂倫理學は科學なり、冷やかなる理論なり、直に人心を感化せしむべきものにあらざ、また自から應用を期するものにあらず、唯科學として之を研究するなり、されども更に一步進みて、否一步下りて、

直接に社會に盡さむとせば、必ず孔子の取りし方法に歸着すべきなり、

トーマス又曰く、若し數百年間永續して、數百萬の人心に感化を及ぼせることを以て、偉大なる徵候なりとせば、吾人は、支那の聖人に偉人の名を拒否すること能はざるなり、もし名聲の播布を以て偉大を組織するものなりとせば、吾人は、孔夫子を以て、人類中の最も偉大なる者となさざるべからざるなりと、これ猶足らず、獨り感化と名聲とに關して偉大なるのみならず、孔子の言行に徴するに、人物として尤も偉大なり古今茫々數千年、孔子は實に人間隨一の模範なり、釋迦耶蘇の如く、一方に、偏せずして不偏なり、圓滿なり、玲瓏なり、彼れ、身を貧賤に起し、天下の人類を化するを以て任となす、其氣憑陵として、山岳を凌ぐも、一に着實を期して、敢て細民を諉れず、安んぞ功名富貴を翹望する豪傑輩と年を同じうして語るべけんや、夾谷の會に齊侯を回ますが如き、魯の政に方て少正卯を誅するが如き、決して學者的のお人好しにわらず、遊説の途に年老いて、大志遂げず、桓魋の難に遭ひ、陳蔡の間に困するも、敢て人を咎めざるが如き、これ豈に感情一方の釋迦などの能

く及ぶ所ならんや、其終焉の如き、殊に人を動かすものあり、彼スクラチースが毒を飲みしが如くは無殘ならずと雖も、哲人が空しく大志を齎らして、千金骨を黄土に委するの遺恨は、曾て異なる所を見ず、而して司馬遷が勁拔の筆は、毫もプラトンに譲らず、曰く、孔子病、子貢請見、孔子方負杖、逍遙於門、曰、賜汝來何其晚也、孔子因歎歌曰、太山壞乎、梁柱摧乎、哲人萎乎、因以涕下、謂子貢曰、天下無道久矣、莫能宗予、夏人殞於東階、周人於西階、殷人兩柱間、昨暮、予夢坐奠兩柱之間、予殆般人也、後ち七日卒と、われ史記を讀んで茲に至る毎に、覺えず涙潜然として下る、

世の教育家なるものは、徒に空言を以て人を教しへむとす、孔子は然らず、身を以て天下を化するに足れり、天下の至理を説くのみを以て足れりとせず、禮を説き、樂を説き、春秋を著はし、詩にも亦重きを置けり、ナイトン曰はずや、夫子の弟子が吾人に傳へたる教道に於ては、一も慘刻過激なるものなく、又禁欲主義の規則を以て、吾人の精神を拘束するが如きことあらず、却て人心を作興して、之を高貴なら

しゆひが爲め、歌謠音楽を奨勵して、崇高の感情を發育することを務めた、之を誤解して、徒に文學を德育の道具に遣ひたるものとなす莫れ、文學の至れるものは、自から道理の至理と融和冥合して、間接に人心を化し、人類發達の功に賛せずんばならず、セーキスピアの如きは、能く此域に至れるものなり、惜問す、東洋には此點に於て、果してセーキスピアはなき乎、

伊藤仁齋云へるあり、曰く、昔、孔門の諸子に在て、顔回より以下、穎悟なるは子貢に若くなく、篤實なるは子夏に若くなし、而して、夫子唯二子以て始めて與に詩を言ふべきのみと稱す、而して、其餘の弟子、得て與るなし、夫れ愚夫愚婦與に知るべくして、孔門の諸子と雖も、亦其人を難んずる、此の如きものは何ぞや、蓋し街説巷議、皆至理を存し、鳥鳴風韻、盡の妙道に通ず、唯明者之を知る、苟くも其智以て之に及ぶに足るものにあらずんば、則ち奚ぞ以て能く詩を讀んで悉く其義に通せんや、而して語の言たる、うの詞平易明白にして、其義高大悉く備はり、左右深淺、隨て取れば隨て在り、これ愚夫愚婦も共に知るべくして、孔門の諸子と雖も、

亦其人を難んずる所以なりと、然り孔門三千の子弟中、孔子が眞に共に詩を語るに足れりとせしものは、唯子貢、子夏の二人のみなりしなり、孔子古詩を撰擇して三百篇を得たり、詩經即ち是也、これらの詩は、古代の人が眞情に發して、自から章をなせるものにて、強ひて道德的の理窟を寓したるにあらず、孔子一言以て之を盡して曰く、思無邪と、唯其れ思、邪なし、故に言々至誠に發して感嘆、諷咏、自から、天地を動かし、鬼神を哭せしめ、知らずく、人心を化して、高尚の域に進めむとす、孔子が詩を刪りしは、實に此至徳を知らばなり、詩の眞趣は、徒に空論虚禮を以て、世を矯めむとする迂儒の解する所にあらず、孔門三千の子弟中、眞に詩を解するもの唯二人なりしも、亦怪しむに足らず、孔子の遺作數首、後世に誦せられずと雖も、孔子に詩才なしと譏る勿れ、琴を師襄子に學び、旬日にして成らず、孔子に音樂の才なしといふなかれ、孔子は詩人にあらず、音樂家にあらず、孔子は實に尤も能く詩と音樂とを解したる人なり、

美は、美其物が目的にて、他の手段に供へらるべきものにあらず、然れども、ユーヅ

レ、スハ語を誤解して、直接、間接共に全く人世に用なきものとなすことなかれ、詩歌、音樂、繪畫、彫刻などの美術はユーズレスなり、即ち日常生活に用なきなり、されど、全く無用の長物と云ふことにはあらず、その直接に用なきは、たゞの間接の用の大且つ遠き所以たらずんばあらず、理論は冷やかなるものなり、或は能く人をして服せしむるに足るも、未だ人を動かすに足るの動機を有するものにあらず、之に反して、美に打たる、時程、人は神聖にして、清淨なるものはあらず、人間が神仙に近づき、化工に參はるは唯美に打たる、の瞬間のみ、而して美は感情の最高點に達したるものにして、全く前後の關係を忘れたるものなり、善は能く前後の關係を顧慮して、一時の爲に、將來を誤らざらんとす、されば、各其極端に至れば、善と美とは必ずしも相容れずと雖も、人生終極の目的に對しては豈一致あらんや、人の精神は、美のみを以て生活すること能はず、人は又孤棲すること能はず、二人以上、社會をなして始めて道德生ず、既に社會をなす以上は、人は遂に道德的の動物たるを免れざるなり、而して職業の何たるを問はず、苟くも多少の知識あるものは、必ずや、吾人は何が爲に世の中に生存するやの問題を、常に胸中に浮べざるを得ず、或は知て之に向ふものあり、或は知らずして之に向ふものありと雖も、要するに、農夫は鋤鍬を執て、商人は牙籌を執て、詩人は詩を以て、哲學者は哲學を以て之を解釋せむとするなり、

美術品は應用すべきものにあらず、文學は道德の下に立つものにあらず、然れども餘徳の人を化するもの、其歸を同じうするを以て、詩歌音樂を獎勵して社會を化せんとするは、能く詩歌音樂を解するものと云はざるべからず、孔子が詩歌音樂を興したるは、即ち是也、もし詩歌が單に道德を謳歌するに至らば、これ實に文學の眞趣を解せざるのみならず、亦孔子の眞意をも解せざるものなり、孔子一たび去て、儒者また詩を解するものなし、彼儒者なるもの、詩を見よ、勃卒乾燥、毫も詩的の風韻を見ず、ことに支那の小説傳奇に至りては、誨淫の書にあらざれば、則ち任俠の物語たるに過ぎず、文學者として、哲學者たる孔子と並立するに足るものなきはもとより、孔子を祖述せんと企てたるものだになし、支那の文學

何ぞ其れ寥落たるや、

余は馬琴の技倆及び其人心に感化を及ぼせし功を以て、彼沙翁に比せんとするものにあらず、然れども彼は東洋の孤島に生れて、文學を以て、取て孔子を祖述せんと企てたり、

當時朱子學と云ひ、陽明派と云ひ、徒に末流を趁うて、區々門戸の間に彷徨する儒流社會を去りて、枉げて戯作者と輕蔑せらるる小説界に入り、曾て孔子が哲學者として、はた教育家として人を化し世を導きたる手段を、文學に於て之に擬せむとせし殊勝さよ、馬琴は恐くは未だ孔子が詩に對するの見を了解し得じ、又今日より見れば、多少文學の意義を誤解せし事もあらむ、馬琴は唯文學を利用して以て人心を感化せんとせり、その人心を感化せんと企てたるは、必ずしも孔子の遺志に負かず、その度を過して、一に道德の方便となし、小説の伎倆を逞しうするを得ざりしは、惜しむべしと雖も、馬琴を説かむとせば、又翻て當年の思潮と時勢とを察せざるべからず、當時儒教一般に士大夫の間に行はれ、儒教の弊も亦行はれて、とにかくに

堅苦しき世の中なり、而して輕文學は多く所謂戯作者の手に歸し誨淫、風をなし世を害し俗を敗ること甚しきものあり、馬琴此際に處して續々讀本を著はして以て、儒教を祖述せしは、勢蓋し已むを得ざるに出づ、馬琴は當時の俗文學を矯め直さむとして、反て他の極端に走れり、小説として其本色を發揮するを得ざる所ありと雖も、毫も儒教主義と戻らず、されば水野の天保の改革にも、馬琴の作のみは、絶版の厄を免れたりき、これ猶孔子の選擇せし詩經のみが、秦火の厄を免れたるが如し、秦の始皇は學者の横議を憎んで書を焚きたり、さるに、詩經には毫も理窟なきを以て之を焚かざりしが、何ぞ知らん、詩經にも、孔子が教化の眞意のこもれることを、天保時代の思潮と讀者の程度より割り出せば、馬琴の小説は、當時の國民に恰好のもの云はざるべからず、

東洋には固より未だセーキスピアあらざるべし、然れども多少人心に感化を及ぼせる國民的文學者を求むれば、支那に一人もなく我國に在て近松も未だし、西鶴も未だし、馬琴にして稍之を庶幾するに足るべきを覺ゆ、馬琴の反動によりて俗小説其跡

を潜むるに至りて、始めて真正の文學を得んとす、もし馬琴をして今日に生れて、
 廣く外國の文學を味ひ、海外の思潮を知らしめば、その力を文學に伸さむこと、當
 代紛々たる小説家の比にあらざるや必せり、惜むべき事どもなり、
 吾人は未だ馬琴に満足せずと雖も、その小説の伎倆は、我國にては前後比なし、勸
 善懲惡に偏して、或は活人間を紙表に躍らすことを得ざりしと雖も、とにかくに、
 或る方面に於ては、徳川時代の人心を化したること、儒教と孰れか切なりしを知ら
 ず、馬琴は實に徳川時代に於ける國民詩人也、愉快にして淡泊なる東亞人の思想は
 哲學となりて孔子によりて發揮せられ、文學となりて馬琴によりて發揮せられたる
 なり、馬琴は或は孔子が詩に對する眞意を解し得ざりしなるべし、又文學として沙
 翁の作に比すべくもあらざれど、當時の哲學と一致して、社會の人心を化せしこと
 は、前後絶えて其比を見ず、文學の未だ發達せざりし東洋に於て、孔子の哲學に對
 するに足るの文學者を求むれば、馬琴を措て、また誰かあらんや、
 思想もや、進み、文學の意義もや、分かり掛けたる今日より見解を下して、漫に馬

琴の作を唾棄し去ること莫れ、馬琴は欠點多きにもせよ、孔子が實益を目的として
 哲學をたてし如く、馬琴も亦實益を目的として筆を執り、當時世に知られたる哲學
 と能く相一致したるにあらずや、彼の徒に花柳の事情などに通がりて、以て寫實の
 眞趣を得たりとなすの徒、安ぞ能く文學の眞相を解せんや、今や我國は東西古今の
 思想をあはせて、諸種の哲學もたやすく之を伺ふことを得べし、而して今の文學の
 よく之と一致し、之と並行すること、馬琴が當時の哲學と一致せしが如くなる能は
 ざる乎、借問す、當代の文學家、卿等は未だ人は何の爲に世の中に生存するかの問
 題を解し得ずとも、せめて之を研究せんとする丈の意氣込はなき乎、此問題は職業
 の何たるを問はず、苟くも人間として解釋せざるべからざる問題なり、哲學者は哲
 學を以て之を解釋せんとす、詩人は請ふ詩を以て解釋せよ、ゲーテを目してヘーゲ
 ルにかぶれたりと云ふ莫れ、今日露伴氏の他の紛々たる小説家より一步高き所ある
 は、多少佛敎の素養あるにあらずや、前蹤既に孔子と馬琴あり、後の文學者たるもの、
 馬琴の至らざる所は之を補長せよ、文學は道德の奴隸にあらず、而かも哲學と相提

携して、其及ばざる所を補ひ、以て人生終極の問題を解釋せむことを期せざるべしんや、

夕の星

晚 翠

ちぎれくに雲迷ふ

夕の空に星ひとつ

光はいまだ淺けれど

思深しや天の海

嗚呼カルデアに牧びどの

なれを見しより四千年

光はどわに若うして

世はかくまでに老いしかな

またしく光露帯びて

今はた泣くか人のため

つかれ、争ひ、わづらひに

我世の幸は遠ければ、

曼珠沙華

虚 子 生

俳人の第一の覺悟は詩人たるに在り、俗人の十露盤片手に俳人氣取りは我神聖なる詩壇を瀆すものといふべし、詩人はミューズの脚下に奉侍するの外餘念ある可からず、俳人亦ミューズの脚下に奉侍するの外餘念ある可からず、余は俳人仲間に黨派なるものなきことを信ず、否凡ての詩人仲間に於て黨派なるものなきことを信ず、然れども唯其趣味異なるよりこゝに一團かしてこゝに一團を爲すは勢の免れざるどころ、然れどもこゝは互に相究むべきものにして、決して相闘ぐべき性質のものに非ず、假令は珊瑚の如し、こゝに一枝を爲し彼處に一枝を爲すと雖ども相互相通して離れ難き所謂共通肉なるものあるに非ずや、我は詩人就中我俳人仲間に在ては充分の雅懷を保持せんことを望む、其趣味を同うし乍ら乙の派を作りて甲の派に當らんとするが如きは君子の事に非ず、又ミューズの脚下に奉侍する外餘念なかるべき詩人の行に非ず、

又眞の詩人たるべき俳人は、決して十七字を以て其終生を依托すべき城閣なりと心得べからず、十七字は其の感情を宿すべき一の樓閣なることは固より然り、然れども終生其外に出づ可からざる唯一の樓閣には非るなり、然るも嘗て其樓閣によつて名を博し、其樓閣によつて地位を得たるものあるより、退て其樓閣を守るにこれ急なるが如き傾向を顯すは、到底其の詩人に非ずして一の俗人たることを證明するに過ぎざるなり、

詩人は決して斯の如く小膽にして、斯の如く陋劣なればきものに非ず、其俳句に於ける趣味は和歌に及ぼすべく、漢詩に及ぼすべく延いては小説に及ぼすべく、又戯曲に及ぼすべく、若し十七字に盛るにあまる内容を、強ひて壓して十七字に盛れといふが如きは必竟詩の何たるを解せざるものといふべし、若し其内容十七字に餘らば何ぞ三十一文字とは爲さざる、何ぞ新体の詩とは爲さざる、尙甘んぜずば何ぞ數萬言を連ぬる散文の詩とは爲さざる、若し其思想にして重んずべく、其趣味にして尊むべきものならば、其外形の何たるは毫も關するところなきなり、詩人たる務は其趣

味其思想を他人に運ぶを得れば足れるなり、其或物は俳句となり、或物は小説となるが如きは、種々の異なる思想を、各完全に且容易く之を連ばんとして、種々の形を需むるより生ず、或思想を運ばんに、十七字恰好なる形なれば俳句となせ、三十一字恰好なる形なれば和歌と爲せ、尙數萬言を要すれば小説と爲せ、戯曲とも爲せ、

我は新体詩、小説の如き長篇の詩を以て、直ちに俳句、和歌の如き短文章の詩より勝れるものなりと斷ずる以て早計なりとす、假令は數萬言を重ぬるとも卑陋なる文字莊重なる十七字にだも若かざるなり、彼の徒らに形によりて制せらるゝの徒、其内容の價值を論せず、長文字を以て直ちに短文字を壓せんとするが如きは、自ら其識見なきを表白するもの、我れ何んを與せん、直に詩として價值ある十七字の排列は決して容易なるものに非ず、詩として眞の價值ある小説を作すると殆んど同様に困難なり、其精神其趣味に於て俳句、小説と何の撰ぶところぞ、若し夫れ俳句の趣味に於て深く得るところのものは、亦小説に於て必ず得るところあるべきなり、修養漸く積み思想膨大十七字の形を以て甘ずる能はざる或物あるに至れば、一切外形の上

の執着を離れて其思想を盛るに足るべき恰好の形を求めよ、新体詩可なるべし、小説可なるべし、我は決して卿等が或一派の俳人たることを聞いて喜ぶものに非ず、唯卿が眞の詩人として成功せんことを希望して止まざるなり、



片影録

(隨筆抄)

春雨庵主人

●猪飼敬所 常に好むで人の文を批し、凡る目を寓する書其の批評あらざるなし、知不足齋叢書の始めて舶來するや、京師の官醫福井丹波守、百兩を以て漸く一部を購入す、敬所一たび之を閲みせんと欲し、人に依りて借る、其の人戒めて曰く、此の書主人の珍惜する所なれば、君慎んで批評を加ふる勿れど、敬所既に諾したれども、瀏覽に及んで夙癖頓に動き、全く前諾を忘れて批を數十處に下だし、後ち頗る悔ゆると雖も及ぶ能はず、遂に人を介して懇ろに福井に謝したりと云ふ、然るに、此の書は、其の後轉輾賣買して敬所先生批評本と唱へ、更らに一層の聲價を増したりとぞ、

●頼春水 曾て柴栗山に問ふて曰く、何の著書かあると、栗山答へて曰く、僕、著書は一片紙だもあることなし、蓋し、著書は人を益せんが爲めなり、僕か如き迂腐儒生にして不急の書を著はさば、之を讀む者、却て損する所あるべし、僕が書を著は

さ。い。る。は。則。ち。書。を。著。は。す。所。以。な。り。と。
●服部南郭 常に好むで小豆飯を喫す、嘗て喫飯の際平野金華到る、問て曰く、喫する所何物ぞと、南郭答へて曰く小豆飯のみと、金華笑ふて曰く、何ぞ好尚の俗なるやと、

松 青 砂 白
●古賀穀堂 氣宇豪放才識人に絶つ、父精里其の爲す所に一任して苛責せざりしかど、時ありて亦た之を戒む、穀堂嘗て龜田鵬齋菊池五山大窪詩佛等と舟を墨水に浮べて詩酒放浪す、蓋し、其の人は皆な一時稱して名家と爲す者なり、事を好む者あり、書を作り上に題するに其の人の詩を以てし、印刷して扇と爲し、人争ふて傳稱す、某なる者あり、偶々其の扇を得て精里に示す、精里悦ばず、穀堂を呼び、其の書を指點して曰く、舟中皆な鬼怪の輩なり、汝何爲れぞ此の徒を伍すと、

●佐藤一齋 後進子弟の俊秀なる者を見れば則ち曰く、吾常に神童を見る、未だ神翁を見ず、汝輩必ず之を勉めよと、

●藤田東湖 趙子昂の書を愛し之を學ぶ、然れども、未だ嘗て法帖を机に上げさす、

人怪みて其の故を問ふ、東湖答へて曰く、子昂書は誠に妙なり、我が學ぶ所以なり然れども、其の人物は實に無耻の陋男兒なり、彼れ、宋末に仕へて翰林院學士に累遷し、頗る宋帝の眷遇を蒙りながら、一朝宋亡べば、身を翻へして元に仕ふ、是れ我が其の書を愛して其の人を鄙くる所以なり、既に其の人を鄙く、何ぞ其の法帖を我が机に上げすべけんやと、

●頼山陽 池田の酒肆某に贈る書を作り、既に終り、復た如何を改めて奈何と爲したり、其の用意周密平生一字を忽にせざりしこと、尋常書牘と雖も、尙ほ且つ此の如きものありしと云ふ、

●梁川星巖 其の室紅蘭を携へて四方に客遊し、囊中屢々空しきも毫も意に介せず、月夕風晨夫妻聯吟以て樂と爲す、嘗て一年江戸に來り宅を八丁溝に賃して居る、然るに、此の時貧最も甚しかりしかば、星巖、乃ち五絶句を作りて自ら戯る、其の第五に曰く、越蹤歴々幾山川、破費弓鞋也可憐、又是旅庖煙不得、脫君裙衩拔君鈿、其の夫妻投合の情濃かにして相猜せざる狀、髣髴として眼に在るが如し、

◎中島棕隱 放誕自ら分とし、嘗て名節を檢せず、鴨東雜詞を著はし、多く隈紅倚翠淫靡厭ふべきの辭を爲す、然れども、晩年江都に來り根津に僑居するに及んでは、彼も亦た殊に追悔に堪へざるものあるなり、乃ち詩を賦して情を陳ぶ、曰く、觸物易揮懷舊淚、逢人先誦解嘲詞、

◎大槻磐溪 幕府の末造に方りて江都の雅客鐵心海鷗秋帆南華等と深川飛鸞樓に會飲す、紅袖座を圍み絲竹湧くが如く頗る盛會たり、然るに、時恰も三伏に際し、酷暑燬くが如し、海鷗乃ち衣を座に解き立て別室に往き浴す、南華偶々海鷗の禪を見、醉に乗して筆を執り梅花を一揮す、是に於て磐溪忽ち之に贊して曰く、昔者劉隆準解腐儒之冠溲溺其中、既已爲快事、今解書生之幘鼻禪、奮筆一掃梅花、以此防醜夷腥膻之氣、洵爲千古大快事矣、抑小西行長揭藥戶巨紙囊以征韓、今試以此禪爲章旗橫行醜夷中則其爲快果如何也と、一座絶倒す、

松島に遊ぶの記

青 琴

雪いたくふれる又の日、四方のけしきのえならずをかしければいでや松島に遊ぶむとてきもあへる友どち五人六人して日高きはとにいづ、師なる道人は鹽釜にてまち合せむと氣車にてゆき給ふ、此日空いとよく晴れ日影のどかなり、とく原の町をすぎ左に折れて行く程に、遠山の雪に埋れて空高く白うみえたるいとをかしきに、をちこちの木々うこはかどなく霞み渡りて、梢なとけふりわたらあさ緑に匂へる、いと心地よし、繞石匂あり、

松原に虚無僧ひとりかすみけり

むら／＼と小松みねけり春の山

かへり見れば宮城野はなべて白妙なり、時に綾孫のよめる、

白金の海とみるまでふりしける雪にはてなき宮城野の原

道すがら託寄口を開きて、檜の梢に雪のかゝれるは遠目にころいみじうめでたけれ

といへば孤舟、なべての木皆しかり、雪の朝など庭の木々よりは山の端の松杉など
こゝろをかしからめといふ、ある人之を聞きて、ひとり木のみやは、かねて音にさ
たる人の、いかばかりいみじからんとおもはるゝを、共にかたへばやがて心おど
りのせらるゝ世にはいと多かり、何事につけ遠からんは近からむよりゆかしき物ぞ
かし、さあらずやといへばみなく、いしくもいはれたりといふ、ゆきくゝて岩切
につきぬ、こゝにてひるげをすまし、しばし勞をやすめて又ありく、とある家の前
にて繞石口すさむ、

ほろくくと枇杷の花落つる二月哉、

氷わつて鍋すみあらふ女かな、

綾孫しばく後れたるから、うここゝに待ち合して行くほどに道はかどらで、やう
く、三時もすぎつらむとおぼしき頃鹽釜に入りぬ、

師はさぞなまちわび玉ひけめと急さてかぬて定めおさし宿にいたれば主出て已に茲
につき玉ひしが御身らの來ると、あまりに遅かりければまぢあぢみて獨り先だちて

舟出し玉ひぬといふ、いと本意なけれと詮なし、やがて舟にのるべき所にわたる、

佳期幽會太關情、誰負松洲詩酒盟、無限春潮鹽浦水、扁舟只要趁蹤行、

と口すさむ、舟もとのへり、みなく打のりて千賀の浦をこぎいづ、繞石吟あり、

春風や此浦船に帆を揚げて、

綾孫の三十一文字出來たりといふを聞くに

鹽釜の浦に心のとまらぬは千松島ねのみえはなるらむ、

ひたすらに舟はいそけともしほやく浦のけふりもすてかてにする、

風。す。こ。し。吹。き。た。れ。ど。、波。い。と。静。か。な。り。、日。の。光。か。す。み。て。は。の。か。な。る。に。、松。生。ひ。た。る。
島。影。一。つ。二。つ。浮。び。い。で。た。る。、す。ゝ。か。な。る。人。も。あ。は。れ。と。お。も。ひ。つ。べ。し。、折。し。も。汀。の。
蘆。間。よ。り。水。鳥。三。つ。四。つ。に。は。か。に。立。ち。て。松。島。の。方。へ。飛。び。ゆ。く。、二。度。三。度。こ。な。た。を。か。へ。
り。み。つ。し。る。べ。顔。な。る。も。い。と。心。地。よ。し。、か。の。鳥。は。何。な。り。や。、鷗。に。や。あ。ら。む。と。一。人。が。
い。へ。ば。い。な。鷗。に。は。小。さ。し。、鴨。な。る。べ。し。と。い。ふ。う。ち。、青。琴。た。れ。た。る。頭。を。も。た。げ。つ。、聲。
高。に。

潮光濃碧漲痕新、鏡裏細波風纈鱗、天女島邊廻棹去、白蘋吹滿一灣春、
碧波万頃水連天、麗日和風遙渚煙、空際金華松島外、黛光鬢影獨嬋娟、
浦雲島影水濼洄、一幅煙波圖畫開、澹宕心情同調者、白鷗爲侶莫相猜、

と吟す、しばしにして名におふ島々はや目の前にあり、心をかけにし雪は大方さえて島根まだらに残れるはや、はいなきものから、心ことなる松の根ざし、めぐらしき枝ふり、緑のいろさへ世の常ならずをかしきに、海の面は鏡のやうなれば水底の影みだれず、いと清らにみえたる、何心地かはせむ、島は舟のまに、あるは露はれ、あるは隠くる、時に綾孫のよめる、

われも又雄島の磯のあまとなりて千年の松のかけにすまはや、

おもふとち舟こさいて、松島や霞をわけてみるめ摘みけり

青琴、紙をのべて、

詩囊吟筆此時携、獨苦神思試品題、老松殘雪彎環水、好景徧教望眼迷、

一舸風流樂正融、俗情拋去興何窮、看來絶大天然畫、壓倒人間澹墨工、

どかきつく、

折からかなたの波間にてかしましき聲す、おどろきてながめやれば鴨にやあらむ、いくつともしらすつらをなして、浮びる行きつもとどりつ打なくにぞありける、あながま、かゝる所には一つ二つなどさびしげに鳴き居たるこつつき、しけれ、かくては興さむるわざにころと一人がいへば、又一人、先の鴨もかしこにまじりをらむを、なぞてかくつれなくはふとさへば、さりとてもかしましといふもあり、鳥もさすがにのどけきにやあらむ、さなどがめ玉ひをなど、おもひくゝにわけつらひたるこそなかゝにかしましけれ、青琴例のからうたを口ずさむ、

潭蘆長松龍氣腥、沙禽聲隔水烟聽、遙看艇子洲陰轉、孕去翠嵐帆影青、

暝色煙浮海色蒼、鷗沙灣外已斜陽、無端鴨陣翻崩盡、憂憂相呼波上翔、

日暮れかゝりて沖はのぐらき頃、松島につきぬ、とみれば汀にたゝすむ人あり、青琴すなはち、

天風歌嘯韻如秋、高唱怕他鷺鷥鷗、似有埠頭人待我、行教舟子短橈留、

師なる道人なりけり、みなしくいたく打喜びて、いろがはしく舟より上りて定め
宿にいたり、装を解きくつろぎて座す、道人いと笑ましげに事のよしを問はれ、五
絶を示さる、

相約無人到、懶餘詩不成、水天唯一碧、載夢葉舟行、

孤舟之に和す

愧余作違約、舟裡興難成、吟發春潮上、無君奈此行、

やがて端近ういで、ながむ、夕かすみ立ちめて遠き島は更なり、近きもおぼつかな
りもてゆく、繞石まづ詠ず、

一つづ、島くれてゆく春の海

雪空や蟹舟かゝる千松島

折しも入相の鐘ひきわたたりければ、孤舟、

天地をひとつにこめて松島やかすみを渡る入相の鐘、

海枯すなはち、

島山をおほふかすみのひまもりて夕へさひしき入あひのかね

青琴もともに、

夕陽紅閃晚霞濃、暝靄深籠落雁峰、恰似佳人扶薄病、翠迷島島萬株松、

帆影松光暮氣冥、鐘聲緩響隔林聽、洲汀取次糶糊滅、一抹澹煙紗様青、

となひ、

夜にもなりぬ、酒くみかはしつゝおのがじし好める道もてたのしゆ、託寄孤舟は文
をたゝかはし、道人と青琴とは詩を弄ぶ、繞石は芭蕉を氣取り、海枯人まろ然と綾
孫赤人然たり、ろのさま、紅葉散り、櫻みだれ、梅うつろふが如し、ある人聲はり
あけて、

遮莫人呼作酒狂、今宵此會又飛觴、雲箋十丈墨龍躍、七子才葩真擅場、

と歌ふ、いまだ終らぬに座の一方より唐めいたる男傲然吟じて曰く、

萬古奇愁欲問天、歌聲忽起一樽前、君看太白醉中趣、畢竟詩仙即酒仙、

夜更けて宴やむ、みなしくふしとに入りぬ、繞石句あり、

梅さいて誰か柴の戸ぞ灯のもるゝ、
或人ねざめして、

ねさむれと枕にひく音もなし八十島かけて波やねふれる

となむ、

つぐの日朝とく起いづ、空くもりて風さへふきぬればおぼつかなしとみるほかに春
さめふりいでぬ、海の面はなべて霧の立ちたるやうなるもをかし、今少し止まれと
のわざならむとおもへどかひなし、雨のあししめりゆく、時に青琴詩あり、

雨氣煙迷海色寒、曉來低嘯檻前看、四垂天白波痕暗、島影似龍雲裡蟠、

顰後西施情有餘、薄雲成態忽寬舒、汀邊一雁飛迷處、八百青螺浮動初、

ある人吟あり、

春雨や風呂場の軒に煙這ふ、

又ある人、

曉來何寺送鐘聲、雲壓松洲滅又明、海路波高歸不得、無情風雨太多情、

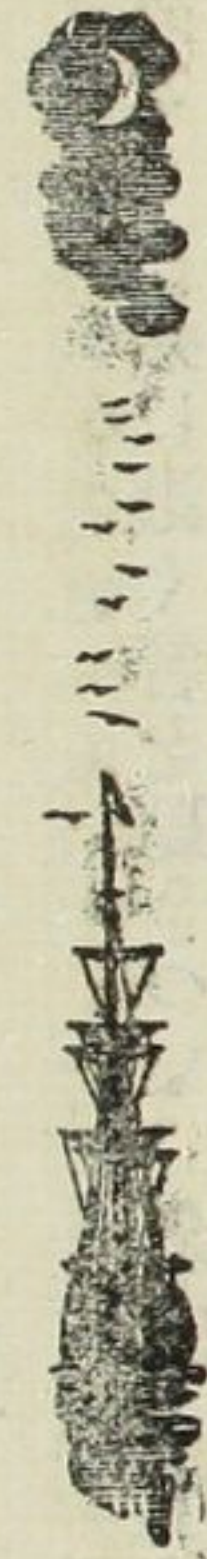
洗面春潮一陣風、小欄干外曉葱々、鐘聲帶雨漁歌暗、八百松洲烟務中、
空や、にくに晴れゆきて、みえずなりつる島々やうやくあらはれ、はては目の及
ばぬ隈もなく、今は只島のたゞすまひ、波の色、繪にいと好くも似たるかな、

雨歇洲汀無限清、松梢翠滴暝煙晴、一奩明水春潮穩、潭底蛟龍眠不驚、

一段風光雨後奇、殘雲微罩古松枝、山青水碧嬌干畫、恍見楊妃出浴姿、

詩筆當期千古傳、地靈絶勝獨云然、彼蒼能解吾人意、變幻江山供眼前、

いつまで眺めたりとてはてしなからむと、うの日ひる近き頃に再び身としらへし
ぬ、さすがに名残のをしまるればみなくかへりみがちに立いで、かへり來ぬる、
つれもなく學びの道にいらがれてなこりをしめせんとすべし



奇童子 [上]

麗水生

春○雨○し○め○や○か○に○窓○の○外○な○る○芭○蕉○に○濺○ぐ○音○を○聴○き○つ○、余は一昨年冬の初めの旅の折に携さへたる手帖を披き、さゝがにの絲より細き鉛筆の痕をたどりて、日記の清書にと取り掛り、其の五頁を寫し終り、六頁の首の『十月十五日、陰る、風吹く』といふに至りて端りなく其の日の事を憶ひ起して筆を擱きぬ、

余は其の日、陸前國栗原郡細倉鑛山に近き金田村に瀧野の古潭を看んとて、若者一人を備ひて路案内とし築館の旅舎を立ち出でぬ、日記にも記せるごとく、此の日は朝より陰りて骨のあるやうな風吹き、落葉も活きて人を逐ふ、頓て山の裾を繞りて深溪に傍ふ松杉昏き路を行く折、若者は淋しく笑つて脚下に見ゆる碧潭を指しながら、『檀那、此處で御座います、彼の六兵衛の身を投げて死んだところは』六兵衛の話は疇昔宿の主人より聴きぬ、

『可愛想に、こゝから身を投げたのか、』

『堪りませんやね此處から水際までが六丈もありませんもの、彼の岩にぶつかつちやあ肉替になつて了ひまゝあね、』と已れ先づ下瞰せしが、骨も鳴るばかりの身震せり、

實に劔を束ね植えたるやうな岩角の鋭さ恐ろしさ、苔の蒸したる邊りに韓紅の痕は正しく亡き人の血潮と胸轟さしが、そは鳶の紅葉せるにてありき、

『だが檀那、氣が小せえ奴で御座いますね、博奕に負けつて、死んで了はなかつても宜からうに、多寡が五十圓ばりの金で、命を捨るなんて、馬鹿な奴で御座います』と、嘲笑つて先に立ちぬ、

『だつて其金は細倉鑛山會社から、隧道工事請負人に拂ひ渡す金だといふぢやないか、家には病人があつても薬も買へず、圃は鑛毒で皆無今年は收穫がなくなる、律氣の爺でもフト魔がさして、ベテン博奕に掛つたもマア無理はない譯さ、極々心の弱い男らしいから、しかし其の子息といふのは、まだ十四だといふけれど、一筋縄では抑へ切れぬ小供だといふことだな』

「あの熊五郎で御座いますか、彼奴と来ちやア驚きますね、行末如何な奴に成るか、到底眞人間にア成れますまい」と語るうちに早瀧野に近き一軒屋の酒店の門に來りぬ、若者は軽く酒屋の主翁に會釋して簷端に垂れる草鞋排し退けて余を内へと導き、背より風呂敷解いて用意の行厨を取り出し、主翁に茶を乞ふて余に晝餉を進め、彼のみ獨り五郎八茶碗に酒を濺せ、一口飲んで棚の砂鉢の焼豆腐の煮べを摘み上げつゝ、端りなく席屏風の陰を見しが、豊然として唇に啣みし下物を放し、余に目挑したり、

何事ぞと余は床几を離れて、席屏風の陰を覗きぬ、其處には襟垢の黒く滲みし衣服着て、上には毛の疾に擽り切れて味噌漉しの底のやうに地の透けた羊羹色の廻しを被つた三十前後の賣藥の行商人らしい男が、黒天鷲絨の襟の附いた大縞の襦袢を肌着もなしに被つて、平ぐけの三尺締めたる、一癖あるらしい五十近い男と對坐ひて、頻きりに賭博を試み居れり、

蟹の甲に覆せたやうな其の額と、凹みし眼の異しき光を放てる彼の男の顔を一瞥見

見て、余は早くも六兵衛を殺せし細倉の坑夫の組頭なる權太なりと覺りぬ、一しきりの勝負終りしと見え、行商人は片頬に笑を浮べて膝立て直せば、權太は胡坐の膝を揺つて馬のやうな齒を露はし「お前、モウ手を引くのか、それちやア餘り手前勝手といふもンだせ、看すく勝れて引込むのは業肚だ、モウ一番勝負を爲ねえな、此の五兩の金を投げ出して、のるか反るか運試しだ、勝て逃げるとは卑怯ぢやねえか」と眼を光らせぬ、

痒くもあらぬ鬢のあたりを男は小指の先で搔きながら、黄い聲で世辭笑ひ、「へ、へ、へ、だつて親方、うれア無理だ、勝たいと思へばこゝろ博奕をするんだ、勝つて止すのは當然ではないか親方、元々私が嫌だといふのを、無理に爲など勸めて置いて、負けたツてソナナに憤らなくツても好ぢやアないか、凄い顔をして睨まれちやア、私や怖くツて成らねえやな、切望堪忍して下さいましね」と下臉から白眼を出して權太の顔を見上げながら、傍に置きし藥箱の袱に手を掛けぬ、

「ちやア如何あつても勝負を爲ねえといふのだな、好し、此方にも了簡があらア、

など、荒ッぱいことを言ふなア、乃公も嫌だ、如何だえモウ一番ヤツて見ねえな、乃公だつて他國の人に勝て行かれちやア餘まり意氣地がなさすぎる、斯うしやう、實はな乃公アまだ懷に二十兩ある、残らず此處で放下して了うから、お前も今勝た六兩とお前の持金十兩を出して了へ、好いかえ乃公が負りやア此の五兩と懷の二十兩、二十五兩綺麗にお前に與つて了はア』と手を懷に推し入れて、肌に温めし二十枚の紙幣を投げ出しぬ、

蹲みながら商人は忙がしく瞬きして『うれぢやア親方が二十五兩、私が十六兩、私が勝てば二十五兩残らず貰つて、負ければ十六兩出せば好いのか、二十五圓に十六圓、丁度九圓親方の方が餘計に出す勘定だね』

『爾うよ、知れたことよ、運符天賦だ、一か八か乃公アこの二十五兩投げ出すぞ、煎え切れねえ男だな、負けた者から果し狀を附けられて、退却するなア博奕の法にやア無えんだせ』

『法なんぞ私は知るもんか、此の土地へ來たも今日が初て、博奕をするのも初てだ、

博奕の法なんぞ知るもんか』と起んとしたる其の袖を權太は捉へて肩を怒らせ、知らねえから教えてやるのだ、如何しても手前は否と頭を掉るのか、明瞭返辭を爲て貰はう、』

『男は首を痿めて少し聲を顫はせ、『うれぢやア爲ませう、だが嫌でならねえな、』

『弱い音を吐くねえ、勢附けに酒でもひッ掛けねえ、オイ爺さん、冷で好いからコッパへ一杯濺いで來て呉んな』と權太はにッたりと片頬に笑ひぬ、

〔下〕

余は心に點頭けり、權太は其初め故らに輸けて彼の男を驕らしめ、其の驕慢に乗じて彼が錢囊を傾け盡さしめんと計りしに、彼は一たび勝ちて却つて再戰の勇氣を沮喪し、其の囊の口を約して早くこの魔境を去らんとしたれば、權太は謀の成ざるを察し、這回は脅かし嚇して更に利を啗はせ、遂に彼をして其の決意を翻へさしめたり、余は未だ其の骰子を投せる時、既に彼の哀れなる商人の全たく敗るゝを知りぬ、

果然、權太は贏ちぬ、油然として笑つて、菜よりも青き商人の顔を見つゝ、十六枚の紙幣を攫んで、己れの二十五圓と合せてこれを懐に藏めたり、薄い唇を『へ』の字様に結んで、商人は世にも情けなき面持して權太を仰見ぬ、眼は涙の光りたり、

『十兩の端下金を捲き上げるに、大分骨が折れたなア』と煙草の烟もろともに吐き出して、『どれ行かうかな、』と立ち上りぬ、『もし、親方へ、少し俟て下さいまし、もし親方、』と商人は、濡みたる聲低く呼び掛けて共に立ち上りぬ、

『負けて啼嘘をかい居るのか、呼んだのは何の用だね、また一番打たうといふのか、まさか負けた金を返して呉るといふのぢやなからうね』と流盼に嘲み笑ひぬ、悄然として男は俛首れたり、

折から一個の童子ありて、門より内を覗き込みぬ、五分刈の髪は今延ひて馬の鬣の儘に頸を掩ふて、鬢の邊寝癖に亂れ逆だち、赭黒き顔の圓く肥えて太く濃き眉の肉高く、眉間に深く皺を疊みて、稍や赤味を帯びし腫の人を睨むが如く光りたるが、身には縞目も垢と埃とに塗れて見えぬ、筒袖の袷一枚、下には鈕子の残らす落

ちし綿フランの襦衣を着て、固く緊しく細帯を釣り締めし年十四五の、見るから一癖あるらしき面魂、

權太を一瞥見て飛び込んで、『やい權太、爹の仇だ、乃公ア昨日から探して居た、』と、左手に腰を探つて挿みし利鎌を抜き取つて逆手に揮上げ、『爹の仇だぞ』と躍りかゝりぬ、

權太は其の不意なるに驚きて飛び退きつ『ヤツ、黒熊か、生意氣なエ、危険ぞ』と壓しかゝつて傾攪まんと右手さし伸すを小兒ながらも一生懸命、横に拂へば腕の肉一寸ばかり薙ぎ取つて利鎌は襦袍の袖を縫ぬ、

『え、この餓鬼め、乃公を斫りやアがつたな』と熊五郎が腕を攫んで捻ぢ上げて鎌をもぎ奪り、屋前の谷へ投げ入れて、片手を肩に加へながら大地へと推し伏せ、二つ三つ拳を啗はして、『善くも乃公を斫れアがつたな』

肩で苦しき息を刻みながら、『斫つたが悪いか此の悪黨め、何故爹を欺して金を奪つた、お前のお陰で爹は死んで仕舞たぞ、阿母も病氣が重つて死んで仕舞たぞ、此の悪

黨め、外道め、盜賊め、』と泣き聲を震しぬ、

『ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、貴様の爹の死んだのも、阿母の死んだのも、乃公の知つた事ぢやねえや、貴様ア逆上て居やがるな、鎮辭いて善く聽きねえ、貴様の爹は乃公と博奕をして負けたんだ、死ぬほどの金なら乃公と博奕を爲ないが善いのだ、死なうが生ふうが、何で乃公が知つた事か、この餓鬼め腕ツ骨を拉ぎ折るぞ』

余は蹶然として起ちぬ、覺えず權太が肩に手を掛けて、この可憐なる孤兒を救はんとせる折しも背後より錆びたる聲の威を含みたるが響き渡りぬ、『權太ぢやねえか、大人氣もねえ事するな』

余も權太も回顧さぬ、人を射る巨眸子の大男、懷手せる儘悠然として入り來れば、權太俄かに拳を解いて立ち上り『親分で御坐えやすか』

跳ね起きたる熊五郎は兩掌に肩を攫んで屹と權太の顔を睨み、やがて今來し男に默禮する時、涙は頬に傳はれり、『巨眸子の亞父さん、乃公ア口惜くつてならねえよ』

『この餓鬼め、罵しいや、今日は堪忍してやるから失せがれ』と權太は睨めつけぬ、

『小兒だと思やアがつて、大人に成つてから覺えて居ろ』凜然として言ひ放ちて、石を噛むがごとき切齒せり、余は其の聲の、胸に浸み徹るがごとき心地せり、

巨眸の亞父と呼ばれし男は黙頭きて、『面白い、其の言葉が氣に入つた、仔細は言はねえでもチャンと知つて居る、やい權太、手前は平生此の乃公の繩張内へ潜つて來て、大分仕事をするさうな、頃日も此の熊五郎の阿父の金を捲上げて、夫が因で阿父は身投げ阿母は病死、今來て様子を見れア、其處に居なさる商人衆の金も捲き上げたに違えねえ、繩張内へ黙つて潜つたことは、今日は巨眸子の勘藏が、大眼に見てやる其の代りに、ちいツと貴様に頼み度え事がある、聽いて呉れるか』、心中九分の怖氣を顔に見せじとすれど、其の聲は痛く顛へぬ『そその頼みといふのは、一体何の事だえ』

『何、さうさもねえ事さ、誰にでも出来ることだが聽いて呉れるか』

『さうさもねえ事なら聽きも爲やう』といひながら勘藏の顔色を窺ひぬ、

『聽いて呉れたか難有え、斯うだ善く聽け、お前は平生素人をペテンに掛けて金を捲き上げるが、今日は乃公と一番勝負を爲やう、金を賭けるンぢやアねえよ、負け

た奴の手の指を切り落すのよ、オイ爺さん出刃でも菜刀でも借て呉れ、』
 余は應に椿事あるべきを想ひて、心鼓の昂まれるを覚えしが、尙は終極まで看んと
 思ひて土間の隅に佇みぬ、權太も余が案内者も顔の色を變えたり、主翁は彼座の席
 屏風の陰に蹲まりて戦き居たり、獨り彼の熊五郎のみはまだ兩掌に肩を攫みし儘、
 豊かに身軀を揺りつゝ見物せり、唇の邊には、微笑を含み居るらし、
 巨眸子の勘藏は、棚より一挺の出刃庖丁を索め得て、兩人の間なる床几の上に載せ、
 樽引き寄せて腰うち掛けぬ、權太は腕を又きて默然たりしが、頓て紫いろに變りた
 る唇を舐つて、『乃公ア他の指なんか欲くはない』
 『男が一度諾哉といつたものを、モウ乃公は何といふても聽かねえぞ、蛇には二枚
 の舌がある筈だ、お前は蛇か』と、權太の手を執つて腰かけさせぬ、權太は屹と思
 案して、門口を背にして勘藏と對坐へり、勘藏は床几の上なる出刃を執つて、『好い
 か、此の出刃を賭けての勝負だ、勝た奴は此の出刃取つて負た奴の指を切るのだ、
 さア遣れ』と骰子と壺とを投げ出しぬ、

此の時四邊は一縷の氣息だも聞えず、視線は皆兩人が中に挟みたる床几の上に注ぎ
 ぬ、

骰子は壺の中に投られたり、壺は床几の上に覆りぬ、

『丁』『半』、

徐かに壺を取つて箇中死活の消息を窺ふの時、兩人の眼は電の如く閃めけり、

『やッ、丁か』と權太は絶叫して急に躍つて臆の如く門邊へと走り出づるを、勘藏追
 絶つて引捉え、床几の上に兩手を推し覆せ、『卑怯ものめ、さア尋常に指を貫はう、
 熊五郎、貴様の阿爺と阿母の仇だ、此の出刃は勝た乃公から貴様に遣る、存分に斬
 り落せ』

力を籠めて黙頭つゝ、熊五郎出刃を執つて、進み寄りしが忽ち出刃をガラリと投げ
 捨て、

『巨眸子の亞父さん、乃公ア他人に仇を取つて貰うのは嫌だ、やい權太乃公が十六
 になるまで生きて居て呉れ、』

勘藏は覺えず手を解いて雀躍して、

「憎いほど氣味の好いことを吐すな、乃公ア貴様に慕れたぞ」



車の走るところ、船の行くところ、草鞋の痕の印するところ、山水雲物は終日にして百變すれど、余はこの日のごとき人事の波瀾を看たることあらず、指僂ふれば彼の奇童子は今年十六歳、彼の一言は凜として猶耳底に響くを覺ゆ、



賢博札記

森 槐 南

●人のすなる隨筆と云ふもの、我も亦して見んと思へり、併かし只隨筆にては面白からず、因つて賢博札記とは名けたり、

●趙歐北に管曝雜記と云へる著書あり、賢博札記と名けばとて、決して其の「もぢり」なりとは思ふべからず、賢博と云ふこと通するか通せざるかは知らねど、拙者一了簡にては孔子が「博奕に賢る」と云ふ語に取りたる積りなり、

●札記は或は劄記に作る、差し向き廿二史劄記など云へるは、誰れでも知つて居るなり、誰れでも知つて居れば、此れ亦頓と面白からず、故に札記とは致したるなり、

●札記と云ふ事、姜湛園と申す男、我に代りて辨明して云はく、「按スルニ爾雅ノ釋器ニ、簡之ヲ畢ト謂フ、郭璞注シテ云ハク、今ノ簡札ナリト、春秋傳ノ疏ニ云ハク、簡札畢牘ハ同物ニシテ異名ナリ、凡ソ書字ヲ作スニ、多アリ少アリ、一行ニ盡ク

スベキモノ、之ヲ簡ニ書ス、數行盡クスベキモノ、之ヲ方ニ書ス、方ノ容レサル所ノモノ、之ヲ策ニ書スト、又云ハク、小事傳聞ハ簡牘ニ記スト、簡牘ハ即ハチ札ナリ、

●此れは彼の男の著書を札記と命名したるに、其の友人閻若璩が札を改めて割とせよと云ひたるより、イヤ札の方、出典なりとて、斯くは並べ立てたるものなり、中々ス子ものなりと謂ふべし、

●下だらぬことも手短かに云へば、何となく珍重がらるゝ世の中なり、「一行ニ盡クスヘキモノ、之ヲ簡ニ書ス、何んでも手ツ取り早やきが肝要ぞ、さてこそ札記と出掛けられ、

●怎麼生んか是れ幽玄ぞと問は、答へて云はく「古池や蛙飛こむ水の音、」怎麼生んか是れ下泄風の如しと問は、答へて云はく「古池や蛙飛こむ水の音、」

●さまでに無きもの、無論作者本人とてさまでに思はざるもの、却つて世人に神聖視せらるゝ事あり、これはと思ひ作り出でたるもの、一向に持て囃されぬ事あり、

凡て詩歌に限らず、何事もこれほど思ふは間違どかし、
●詩の一句にて、世に名あるもの、

池塘生春草、 謝康樂

澄江靜如練、 謝宣城

隴首秋雲飛、 柳吳興

風定花猶落、 謝元貞

鳥鳴山更幽、 王文海

空梁落燕泥、 薛道衡

楓落吳江冷、 崔信明

庭草無人隨意綠、 王 冑

此の餘猶は多かるべけれど、今は尤も人口に膾炙せるものを擧ぐ、又一聯にて名を得たるものは、歴代屈指に暇あらねど、李杜蘇黃など大家と云へる人々を除きて唐宋の名聯として俗に傳へられたるもの、大約と五言には、

雞聲茅店月、	人跡板橋霜、	温庭筠
柳塘春水慢、	花塢夕陽遲、	嚴維
竹徑通幽處、	禪房花木深、	常建
風暖鳥聲碎、	日高花影重、	杜荀鴨
兵衛森畫戟、	燕寢凝清香、	韋蘇州
氣蒸雲夢澤、	波撼岳陽城、	孟浩然
鳥宿池邊樹、	僧敲月下門、	賈島
樹影中流見、	鐘聲兩岸聞、	張祜
曉來山鳥鬧、	雨過杏花稀、	周朴
雨勢宮城濶、	秋聲禁樹多、	劉筠
剛腸欺竹葉、	衰髯怯菱花、	楊黎州
遠水無人渡、	孤舟盡日橫、	寇萊公
井泉分地脈、	枯杵共秋聲、	徐鉉

七言には

麥天長氣潤、	槐夏牛陰清、	趙師民
數聲離岸鷓、	幾點別州山、	魏野
鳥歸花影動、	魚沒浪痕圓、	悟清
河分岡勢斷、	春入燒痕青、	惠崇
山勢蜂腰斷、	溪流燕尾分、	夏英公
柳間黃鳥路、	波底白鷗天、	蔡天啓
雨砌墮危芳、	風軒納飛絮、	秦少游
髮短愁催白、	顏衰酒借紅、	陳無已
着衣輕有暈、	入水淡無痕、	徐忻
爐煙添柳重、	宮漏出花遲、	楊巨源
寒日邊聲斷、	春風塞艸長、	滕元發
漠漠水田飛白鷺、	陰陰夏木嘯黃鸝、	王維

殘星數點雁橫塞、	長笛一聲人倚樓、	趙 蝦
禪伏詩魔歸靜域、	酒衝愁陣作奇兵、	韓 偓
蝴蝶夢中家萬里、	杜鵑枝上月三更、	崔 塗
煙橫博望乘槎水、	月上文王避雨陵、	唐彥謙
水暖鳧鷖行哺子、	溪深桃李臥開花、	鄭文寶
雪意未成雲着地、	秋聲不斷雁連天、	錢惟演
一聲啼鳥禁門靜、	滿地落花春日長、	王 隨
樓臺側畔楊花過、	簾幕中間燕子飛、	晏元獻
珠簾繡戶遲遲日、	柳絮梨花寂寂春、	周 式
峭帆橫渡官橋柳、	疊鼓驚飛海岸鷗、	楊大年
長楊獵罷寒熊吼、	太液波閑瑞鶴飛、	宋莒公
龍帶晚煙離洞府、	雁拖秋色入衡陽、	王文穆
草解忘憂憂底事、	花名含笑笑何人、	丁晉公

風定曉枝蝴蝶鬧、	雨勻春圃桔槔閑、	韓魏公
黃蜂衙退海潮上、	白蟻戰酣山雨來、	錢昭度
園林換葉梅初熟、	池館無人燕學飛、	謝景山
海鵬未擊三千里、	天鳥須歸十二閑、	王平甫
收取桑榆歸物外、	種成桃李滿人間、	李 絢
千重浪裏平安過、	百尺竿頭穩下來、	陳從易
千里暮山橫紫翠、	一鈎新月破黃昏、	孫莘老
倒着衣裳迎戶外、	盡呼兒女拜燈前、	謝師厚
亞夫金鼓從天落、	韓信旌旗背水陳、	梅聖俞
雲頭灩灩開金餅、	水面沈沈臥彩虹、	蘇子美
斜日半竿眠犢晚、	春波一望去鳧寒、	張文潛
千山送客東西路、	一樹照人南北枝、	王康功
穠艷最宜新着雨、	妖燒全在欲開時、	鄭 谷(詠海棠)

疏影橫斜水清淺、

暗香浮動月黃昏、

林 逋(詠梅花)

雙鳳雲中扶輦下、

六鷲海上駕人來、

王禹玉(上元)

將飛更作廻風舞、

已落猶成半面粧、

宋子京(落花)

隴雁半驚天在水、

征人相顧月如霜、

王君玉(聞角)

看來天地不知夜、

飛入園林總是春、

盛次仲(雪)

荒増し是くの如し、まだ抄き出したけれども厭やになりたり、

●中には無類飛切の名句もあらん、天地自然の趣に叶ひたるもあらん、去れど其の人々の集に就きて見れば、是等よりも遙かに勝りたらんと思はるゝもの、將た少なからず、然るに世俗には闇雲に歡迎さるゝなり、

●詩話など種々の理窟は附けあれども皆な駝法螺なり、斯く傳誦せらるゝ所以は、つまる所解り易すしと云ふに外ならず、矢張り「古池や」的なるのみ、何れの國何れの時代にも多きは凡眼と雷同なりと知るべし、

●王阮亭が其の友朱竹垞の爲めに選べりし宋人の絶句にて唐賢を追跡すべきもの數

十首は、吾れ少年の時、熟記皆誦し居たりしが、今は大半忘れたり、を思ひ出し、書き陳らね見るも、興なるべし、

亭亭畫舸繫春潭、只待行人酒半酣、不管煙波與風雨、載將離恨過江南、

春陰垂野草青青、時有幽花一樹明、晚泊孤舟古祠下、滿川風雨看潮生、

冷于陂水淡于秋、遠陌初窮見渡頭、賴是丹青無畫處、畫成應遣一生愁、

竹枝桃花三兩枝、春江水暖鴨先知、萋萋滿地蘆牙短、正是河豚欲上時、

黃葉西陂水漫流、蘆條風急滯扁舟、夕陽暝色來千里、人語雞聲共一邱、

露白霜紅郭外田、山濃水淡欲寒天、參軍抱病陪清賞、一檝呼歸亦可憐、

斷腸聲裏無形影、畫出無情亦斷腸、想得陽關更西路、北風低艸見牛羊、

梁州一曲當時事、記得曾拈玉笛吹、端正樓空春晝永、小桃猶學澹燕支、

斷雲一葉洞庭帆、玉破鱸魚霜破柑、好作新詩寄桑寧、垂虹秋色滿東南、

投荒萬死鬢絲班、生入瞿唐滯瀕堆、未到江南先一笑、岳陽樓上對君山、

江上荒城猿鳥悲、隔江便是屈原祠、一千五百年間事、只有灘聲似舊時、

夜雨連明春水生、嬌雲濃暖弄微晴、簾虛日薄花竹靜、時有乳鳩相對鳴、
 目盡孤鴻落照邊、遙知風雨不同川、此中有句無人見、送與襄陽孟浩然、
 獨凭危堞望蒼梧、落日君山似畫圖、無數桃花飛滿岸、晚風吹過洞庭湖、
 來時秋雨滿江樓、歸日春風度客舟、回首荆南天一角、月明吹笛下揚州、
 梨花淡白柳深青、柳絮飛時花滿城、怡帳東欄一株雪、人生看得幾春晴、
 到處相逢是偶然、夢中相對兩華顛、還來共醉西湖雨、不見跳珠十五年、
 烏塘渺渺路平堤、堤上行人各有携、試問春風何處好、辛夷如雪柘岡西、
 掃地焚香閉閣眠、簾紋如水帳如煙、客來夢覺知何處、桂起西牕浪接天、
 曾作金陵爛漫游、北歸塵土變衣裘、菱荷聲裏孤舟雨、臥入江南第一州、
 皂莢邨南三四里、春江不隔一程遙、雙堤闢起如牛角、知是隋家萬里橋、
 去年此日泊瓜洲、衰柳蕭蕭客繫舟、白髮天涯歎流落、今宵聽雨古宣州、
 山驛蕭條酒倦傾、嘉陵相背去無情、臨流未忍輕相別、吟聽潺湲坐到明、
 照江丹葉一林霜、折得黃花更斷腸、商略此時須痛飲、細腰宮畔過重陽、

洞庭木落萬波秋、說與商人亦自愁、欲指吳淞何處是、一行征雁海山頭、
 陌上花開蝴蝶飛、江山猶是昔人非、遺民幾度垂垂老、游女還歌緩緩歸、
 白髮先朝舊史官、風爐煮茗暮江寒、蒼龍不復從天下、拭淚看君小鳳團、
 濯錦江邊憶舊游、纏頭百萬醉青樓、而今莫索梅花笑、古驛燈前各自愁、
 濟南春好雪初晴、行到龍山馬足輕、使君莫忘雪溪女、時作陽關陽斷聲、
 琵琶絃急滾梁州、羯鼓聲高舞臂躡、破費八姨三百萬、大唐天子要纏頭、
 逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城、
 秋來東閣涼如水、客去山公醉似泥、困臥北牕呼不醒、風吹松竹雨淒淒、
 千詩織就回文錦、如此陽臺暮雨何、只有聰明蘇萬子、更無悔過竇連波、
 落日同騎款段游、倦依松石弄清流、蓬萊漢殿春分手、一笑相逢太華秋、
 舟中一雨掃飛蠅、半脫綸巾臥翠藤、殘夢未醒窓日晚、數聲柔艣下巴陵、
 何人把酒慰深幽、開自無聊落更愁、幸有清溪三百曲、不辭相送到黃州、
 向來松檜欣無恙、坐久復聞南磬鐘、隱隱修廊人語絕、四山滴瀝雪鳴風、

自愛新詞韻最嬌、小紅低唱我吹簫、曲終過盡松陵路、回首煙波十四橋、
 夜暗歸雲繞柁牙、江涵星影雁團沙、行人帳望蘇臺柳、曾與吳王掃落花、
 征帆一似白鷗輕、起揭船篷看晚晴、梅子着花霜壓岸、自披風帽過臨平、

此れ皆な南北宋有名詩人の作のみにして東坡最も多ししかし今は詩句さへウロ覚えなれば、一々作者の名を擧ぐるに由なし、凡眼者流は往々名の爲めに詩の眞味を埋却することあり、されば寧ろ擧げぬが勝れるなり、

●中にはあまり人口に膾炙すぎて珍らしとも思へぬものあり、されど幾度繰り返へしても鑿のこぬが不思議にて、詩が妙なりと謂ふの外なし、尤も唐人に似たるが故に妙なりとは思ふべからず、妙處は全く形跡の上には無きことぞ、

●阮亭は兎角唐宋の界限を胸中に置きて詩を品別したがる癖あり、故に袁子才は詩は古今上下を通じて作者其人の性情を見るものなるに、唐宋とは帝王の國號に過ぎず、人の性情が國號の爲めに轉移せられてたまるものかと謂ふて之を笑へり、至極尤もの説なり、

●神韻とは阮亭の標擧せる所にして、袁子才はイヤ左に非ず、性靈こそ大事なれと云ひたり、神韻と云へる中には、多少詩は詩の品格を重せざるべからずと云ふことを意味す、性靈に到りては品格などはどうでも好しと云へる意氣込みあり、蓋し品格の方のみに傾くときは、終に矯飾に陥りて、眞精神を發揮すること難く、又精神注射の上のみ着眼すれば、一向に粗鄙なるものも、粗鄙なる丈け其れ丈けの精神を賞識せざるを得ざるに至るべし、兩處若し能く其の中を得るときは、神韻であれ性靈であれ、畢竟同じものと見て差支なし、

●斯くて袁子才は敗けぬ氣となりて、亦宋人の絶句を選出し、阮亭の向を張れり、こいつの中々面白し、序に左にもすべし、

鎮日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、歸來偶過梅花下、春在技頭已十分、
 昨日厨中乏短供、嬌兒啼哭飯糲空、阿娘搖手向兒道、爺有新詩上相公、
 十年山館始圓墻、竹裏開門筍最長、一輛小車行得過、不愁花露濕衣裳、
 行盡疎籬見小橋、綠楊深處有紅蕉、分明眼界無分別、安置心頭不肯消、

白頭波上白頭翁、家遍船移浦浦風、一尺鱸魚新釣得、兒孫吹火荻花中、
 桃花雨過碎紅飛、半逐谿流半染泥、何處飛來雙燕子、一時舍到畫梁西、
 金針刺破南牕紙、偷引寒梅一陣香、螻蟻也知春富貴、倒拖花片上宮牆、
 白雲山上白雲泉、泉自無心雲自閑、何必奔流下山去、又添波浪在人間、
 與郎相期月上時、及至月上郎不知、妾在平地見月早、郎在深山見月遲、
 風急雲驚雨不成、覺來春夢甚分明、當時苦恨銀屏影、遮隔仙娥只聽聲、
 寄語沙邊鷗鷺群、也須從此斷知聞、諸公有意除鈎黨、甲乙推排恐到君、
 浪靜風平月正中、自搖柔艫駕孤蓬、若非三萬六千頃、把甚江湖養此翁、
 小桃無主自開花、煙艸茫茫帶晚霞、幾處敗垣圍故井、向來一一是人、
 校獵山陰幾度春、雕弓羽箭不離身、於今老去渾無力、看見飛鴻指示人、
 鳴鶻直上三千尺、風緊秋高雪正乾、碧眼胡兒三百騎、盡提金勒向雲看、
 寒林斜日欲啼鳥、壁裏青燈乍有無、小雨愔愔人不寢、臥聽羸馬鬣殘芻、
 柔麻不擾歲常澄、邊將無功吏不能、四十二年如夢醒、春風吹淚過昭陵、

繡袖翻翻上翠綉、無姬猶是舊精神、座中莫恠無歡意、我與將軍是故人、
 相思無路莫相思、風裏揚花只片時、惆悵深閨獨歸客、曉鶯啼斷落花枝、
 囑咐花香莫過牆、隔牆人正繡鴛鴦、聞香定要停針線、繡不成雙不寄將、
 花飛一片減春光、信逐春風送夕陽、莫放珠簾遮燕子、好教含得上雕梁、
 春風永巷閉娉婷、長使書樓誤得名、不惜捲簾通一顧、怕君着眼未分明、
 南隣北舍牡丹開、年少尋芳日幾回、惟有君家老松樹、春風來似未曾來、
 霧裏江山看不真、只憑雞犬認前村、渡船滿板霜如雪、印我青鞋月一痕、
 牛渚磯邊渺渺秋、笛聲吹月下中流、西風不識張京兆、畫得蛾眉如許愁、
 未得霜晴不是晴、霜晴無復點雲生、鷺鷥不遣魚驚散、移脚惟愁水作聲、
 竹裏茅茨竹外溪、繡夕汨々護漁磯、想因日日來垂釣、石上蓑衣不帶歸、
 春山靈草着花香、誰識仙家日月長、滿院莓苔綠陰匝、棋聲何處隔宮牆、
 田家汨汨水流薄、一樹高花明遠村、雲意不知殘照好、却將微雨送黃昏、
 小白長紅又滿枝、築毬場外獨支頤、春風自是人間客、主張繁華得幾時、

月團新碾瀾花甕、飲罷呼兒課楚詞、風定小軒無落葉、青蟲相對吐秋絲、
 夜涼吹笛千山月、路暗迷人百種花、碁罷不知人換世、酒闌無奈客思家、
 胡虜安知鼎重輕、指蹤先自漢公卿、襄陽耆舊惟龐老、受禪碑中無姓名、
 欲桂衣冠神武門、先尋水竹謂南村、却將舊斬樓蘭劍、買得黃牛教子孫、
 一年春事又成空、擁鼻微吟半醉中、夾道桃花新雨過、馬蹄無處避殘紅、
 簾裏孤燈覺晚遲、獨眠留得畫殘眉、珊瑚枕上驚殘夢、認得蕭郎馬過時、
 淡黃越紙打殘碑、都是先生御製詩、白髮內人含淚讀、爲曾親見寫詩時、

此の性情あり此の興會ありて箇の詩と做る、箇の詩を作らんが爲めに此の興會を
 作り此の性情を造くりしものに非ず、故に人々の言ばんと思ふ所にて、之を言ふ
 も斯く迄に曲盡すること能はざるは、其の人の才分の深淺なり、若し唐調に非すと
 謂ふて之を斥くるものあらば、是は自己の淺才なるを掩はんとするものなりと知れ。

●滄浪相國の絶句偶、其の一を録す、此の作は本年四五月比の事と思ふ、

去年今日侍蠻興、咫尺天顏閱羽書、一轉乾坤事如夢、湘南煙水憶鱸魚、

此れも亦性情の作なり、而かも品格左迄に卑からず、人は其の人に對する憎惡の念
 より、一も二もなく余を阿諛とは謂ふなり、こは彼の名の爲めに好詩を埋却するも
 の、將た唐宋の界域を胸中に畫し、唐なれば好し宋なれば惡ろしと速斷せる類と同
 日の論なるべし、

●秋の夜の徒然永がき寢覺に、千々の思ひ胸に浮びてゐるも寢られず、宵の程の酒機
 嫌にいと能く熟眠してありしものを、夜半の風雨に驚かされしぞいと悔やしけれど
 て斯くなん、

醉入甜卿不成夢、漸知有味是无能、忽然起聽中宵雨、四壁蟲聲秋一燈、



あはれく此月

中邨秋香

はげしかりつる、
 空さりげなく、
 松の梢の、
 名残のつゆの、
 青葉がおくの、
 火影すゞしく、
 すがく琴の、
 いさゝむら竹、
 茂るしげみの、
 夏をよろなる、
 うたふ唐歌、

ゆふ立の、
 すみわたる、
 月のかけ、
 玉とちる、
 高殿に、
 きらめきて、
 音もころくに、
 むらくと、
 蔭しめて、
 窓のうち、
 聲おもしろき、

金剛杵

正太夫

●さる頃よりかけてわが文界に論評の聲いと喧し定めし思召は難有き事ならんがわれは姑らく之れを流行と呼ばんとす流行にろくなものなし就て見るに首肯かるゝし絶えてあらず今の如くんば批評家といふは極めて無用の長物なりたとへば煤掃の手傳ひにめくら按摩の加はりたらんが如し其杖は壘を敲くに邪魔となるもタソクとはならずしかも濟んだ跡で蕎麥は其人の前にも供せざるを得ず迷惑といふべし

◎大文學者は天麩羅屋の屋臺の下に轉がつて居る斑にあらす唯來いゝと呼ばれて尾を掉つて起上る者ならんやとはわれの嘗て言ひし所なり文界に於ける明治は二十三年より前の事なれば數ふるに僅かに六七年に過ぎず露伴あり紅葉あり鷗外あり趙遙ありわれはこれにて満足すべしと言はざるも前後も知らず徒らに大文學者大文學者と叫ぶは恰もきのふ日濟し貸しをはじめたる男のけふ猶岩崎たらざるを啣つが如し無理なる慾にあらすや

●随つてこの程はさまざまの註文出づ莊重の端嚴の高遠の雄大のと軍艦の名に紛ら
はしき事なりされども今の作家を仰の如く健全ならずとすればこは瘠せたる子を捉
へて強ひて荷を負はしめんとする者なり尠くとも批評家に指導の任あらば何故に先
づ之れを肥えしめんとはせざるお馴染の質屋の番頭も元はといへばしら雲あたまな
り小僧も生れながらに三泣車を牽き廻し得るにはあらず

●今の作を易しといふ勿れ今の評は猶易し客待の車夫が往來の人品を見て傍へに叫
くが如きくゝりなきの評は何人も爲し能ふべし渠等はわずかに足袋の白さと黒さと
によりてお店育ちと書生上りとを區分するなり染返しとも知らず紋ある羽織を見れ
ば貴人と思ふなり洗張とも知らず光れる上着を見れば紳士と思ふなり竟に眼は襦袢
の袖の破れに及ばず烏澁がましき沙汰なり

●試みに今の批評家なる者に問はん作者としての露伴紅葉と同じき力を評者として
有するの人あるか恐らくはこれ無からん批評とは受附が長官のかげ口をさく類のも
のにあらず今の作家の作を賣るを咎むといへども今の批評家は評を賣り居るなり人
の途に轉ぶを見て大口わいて笑ひながらおのれは電信柱にぶつかれると些の相違も
無し

●今の批評家の頻に青年を呼ぶは丁度おのれと頃合ひの者を求むるなり似たる沙加
減の者を求むるなり豆板乃至飴ん棒の是非を議するを得るも羊羹かすていらの味を
解する能はざるなり露伴も青年にあらずや紅葉も青年にあらずや單に曆數よりいへ
ば今の批評家の推立て、青年作家となす所のもの多くは年上なるも可笑し町に出で
六つ七つの兒をあつめて遊ばいづつにても餓鬼大將たることを得べし鬼ごつて軍
ごつて泥坊ごつて懲役ごつて何なりともするがよし

●斯く言へばとてわれは青年を斥くるにあらずわれも青年なり青年作家續々出で來
りて相共に磨かんことを祈るや切なりされどもわれは今の批評家の如く一も二もな
く青年を擔ぎ上げんことを欲せず所謂青年作家は樽天王か貴きが故に擔ぎ上らるゝ
にあらずして今の批評家の興を遣らんが爲に擔ぎ上らるゝなりれ祭の跡は何處かの
隅に片寄せられて仕儀によりては立ん坊の腰掛となることもあるなり

●あゝ君が胸間に在て燦然たる光を放つもの時計ならざるなからんや時計はもと瑞西國の發明に係る秒を報じ分を報じ時を報ず廿四時即ち一晝夜なり吾人は實に君が時計を得たるを喜ぶとこんなのが所謂青年作家に對する今の批評家の調子なりあわて、青年作家の取込むのを見れば鎖の先は墓口なり時計は常に大屋のを聞いて間に合せて居るとの事まだしも天保錢のふら下りしに比ぶればましなるべし

●所謂青年作家に告ぐ君等唯眞直に歩め渠等のオダテに乗る勿れ渠等は面白づくに評をなす者なり忠實なる者にあらず吹けば飛ぶ如き君等が作をも沈痛の深刻のといふを見れば渠等が唱ふる雄大も莊嚴も知れたものなり渠等の用字用語は韻府一隅の中にもあるべしと雖も小説は有らず君等は君等の得たる所を以て唯眞直に歩め取合はゞ渠等は遂に君等にすゝむるに回向院の土俵に出でよといふやも知れず小錦大戸平を取つて投げよといふやも知れず渠等の中には君等に名を成さしむると共におのが名を成さんと欲する者なきにしもあらず作家は決して萬能膏たるの要なきなり

●されども翻つて思へば渠等に一の憐むべき病あり買かぶり是なり頂上の語を用ふるを刺れる人ありしが柳盛座の客が和好を日本一と呼ぶは敢て珍らしき事にもあらざるべしわれらにすら贈るに文豪の名を以てするを見るも渠等が人をもおのれをも買冠り居れるは明かなり今の作家をお坊ツやあんなりとすれば今の批評家は一面に於て新田の太郎作なることを免かれず

●おかげを以て意外の僥倖にあづかれるは青軒とかいふ男の『奔馬』とかいふもの三味の『目黒物語』となり柳原物の糊細工も雨に遇はざれば剝げず赤きは皆鯛と心得鯛は皆永代橋の先に居ると心得れば今の批評家は濟む譯なり下駄と俎板とを取違へぬ内が目ツけ物と云はゞ云ふべし

●一葉の『にぎり江』水蔭の『女房殺し』噂高ければわれも此程一讀したりぬ『にぎり江』は銘酒屋ときしもまことは麥とるなといふ看板掛けなると同じ流儀の曖昧茶屋の女が事なりげによく書かれたれどわれは其よくの上に女性に似すといふ語を置くことを忘るゝ能はず天來の神助のと喚ぐは萬事本をわけて見て初めて成程と合點

する如き輩のおのれらが未聞かざる事實多きに先づ打たれたるにあらずやと思ふ駿河町を通りてお賽錢を投げしどの昔話も偽りならず

●われは太だ水蔭の作を取らず何となく間のあきたる處ありて讀むに中々の辛防なり『女房殺し』にも間のあきは少々あれどさのみの辛防とも覺えず讀得たるはいかさまなく書かれしに相違無し水蔭の作中には上々吉のものなるべし人は『にぎり江』に較べて下に在りといふと雖も其は筆行きのみ評にあらざるかわれば俄に同意し難し何となれば『にぎり江』は縦し出來損ふとも猶見らるべきものなれども『女房殺し』に至つては出來損はゞ殆んど見るに堪へざるべきものなればなり言約むれば『女房殺し』は『にぎり江』よりも書くにむづかしきものなればなり強ちに較べ言はんは氣の毒なるべし

●小湖庵が『女房殺し』の評は評といはんよりは寧ろお柳堅吉に向つて斯うであらうがなの勝元的裁判を下し居るものなり文此に至て能事畢れり矣とは調子に乗過ぎるにも程のあつたもの悪くすると小湖庵が能事の畢れるものかとも疑はる或人は雁鍋

の二階にも太平を謳へば

●『閨秀小説』の奥に誰やらの歌あり「とりくにおれる錦は紫のいろに劣らぬ色も見ゆるん」されば鶯に樺に茶に鐵に至極の色揃ひなり翻譯にて『名譽夫人』『忘れがたみ』新作にて『十三夜』『萩桔梗』など評さば評すべきものなるべし『やみ夜』も一葉のかとおもへど能くは分らず猶半襟らしきもの一つ二つ見ゆれど其他は前垂か襷なりあまりお座敷へ出ぬやうにして貰ひたし

●稻舟の『白薔薇』は不知庵のいひし如く言語同斷のものなり眞に女性の作ならんにはいよく以て言語同斷のものなり『忘れがたみ』を擧げて『名譽夫人』の名の字すらも擧げざる『帝國文學』記者はこれに才氣あり望ありと云へり何に由れることか聞かまほし俗にすきくと申すことあれば『帝國文學』が如何に美裝したる文界の紳士にもせよわれは敢て其どぶろくを飲むを妨げんとは思はざれど

●よまいごどは南新二の『道中雙六』を評したり抱一庵の如きをいふなり滑稽と諷刺を混じ果ては一九の妙三馬の妙蜀山の妙と併せ言へり多分蜀山は風來の誤なる

べし『太陽』記者なりしと覺ゆ抱一庵が譯語の不當なるを嘲りしも知らざるに於ては抱一庵は日本の事も知らずユーゴー先生を知人に持つもよしあしなり

●八面樓主人の『硯友社及其作家』ころ近ごろ驚かるゝものなれ理の至れる故にもあらず言の竭せる故にもあらずあまりに僻見に過ぎたればなり主人は紅葉が想を解せずと喝破したりといふによりて立論したれども紅葉果してこの言ありしや否や疑はし主人は作家が想を拒絶するは作の才を拒絶するなりといへりわれは紅葉に作の才なしといふ能はず深淺はあるべし豈想の絶無なるならんや菓子を好かずとのみきゝて直ちに上戸なりといふの穩かならざるが如く之れを排想主義と呼はんは穩かならず寧ろ忌憚なくいはゞ硯友派は主義といふべき主義ある男の會合にあらず

●主人の所謂想の議稍作家の間に起るの頃なりし脆弱き作家の徒らに想を口にし落ちたるものを搜す如き風ありしを警めて想などは何うでもいゝとわれも言ひしことありこれは何うでもいゝにわらず邪徑に入らんことを恐れてなり想を解せずの語眞に紅葉より出でたりとせば察するに意味に於てわれと同じきものなりしならん之を

以て硯友一派の産物を保護し得べしと思惟する程の理に暗き紅葉にもあらざるべしとわれは信ず

●事實をして事實を語らしめよといひて八面樓の擧げたる事實はと事實ならざるものはなし紅葉は紅葉のみ眉山は眉山のみ眉山の上に謠はるゝ讚美がことさらに紅葉より割かれしとは心得ず讚美はお彼岸の到來物と異なり重の内に五つ七つの限あるものにはあらざるなり紅葉が鏡花の原稿を改削しおのれの名を署したるを以て想の何物たるを、悟覺し僅に天下の耳目を掩ふものといふに至つては誣詆も亦太甚し其の雜報に筆を執るは作の都合より寧ろ一身の都合なるべし論議す可きことかは

●紅葉がおのれのみ名を署し他をなにかしと爲し置くことに就てはわれも聊か言ふ可きことあれど之を以て紅葉が想なるものゝために天下の耳目を掩ふものとは如何にしてもおもひ及ばず彼の『義血俠血』の如き成程作は鏡花の作ならんも文は正しく紅葉の文なるのみならずこれを面白く讀ましめたる點に於ては力を紅葉が鏡花に假れるよりも鏡花が紅葉に假れることの多きは鏡花が其後の諸作に照らして明かなり

合著と呼べりとしてのみ咎むべき所無し

●書肆の廣告によれば、正直、正太夫著『反古袋』なるものあり、天外の作三、緑雨の一作されば、其ころわれが、天外なる名を設けてわが作の拙きを掩ふものなりとの評ありぬ、著作者と出版者との間に是非とも除却せざる可らずして、今猶除却し得ざる一弊あり、知れりや、八面樓は若し紅葉を疑は、この邊の消息を探りて、後に疑へ、今少しく事實に近き評語をなすことを得ん

●勿論われは紅葉のため防護の任を執らんとにはあらず、われは屢々硯友派を攻撃したり、硯友派の遂に瓦解せざる可らざる由は早くより言へり、今とても攻撃すべきあらば、八面樓主人と、もに大いに攻撃せん、須らく先づ急所を衝け、仇矢は放つ可らず、捐料屋の門を出入する者は皆、損料借なりといふ如き、速断には到底與する能はざるなり

●誰か一掬の涙を灑がざらんと、八面樓は云へり、兎も角も紅葉は之れに向つて感謝の意を表すべし、坂本を通る者はいづれも廓に行くと認めて、三島前に袂を控ふる伯父さんの異見が必らず御尤ものものならば

●われも謝すこの鹽梅にては、八面樓主人がつねづねの批評も大抵多寡の知れたものなることを願はずして、曉り得たるを『閨秀小説』を讀みて大發明をなし玉へるもさらしく無理にあらず

●例の與太郎なるもの眉山がもとにおどづれて曰く、月桂冠を拜見したしと、眉山あわて、頭を撫で、曰く、今起きたのですよとお話は遂に合致せず、此ころの人の紅葉は行止りなりといふを或處に達せりとの意味なりとすれば、紅葉はこれより廣くなることを得べし、眉山は今より稍深くなるべし、廣きよりは深きにわれも望は屬すといへども、瑣々たる一二の作によりてイキナリ全盛をいふは、縁日に室咲を見て、直ちに臥龍梅の満開を報ずるものなり

●眉山は能く小細工を爲し、能く小道具を用ふ、矯飾の二字以て、眉山の小説をも俳句をも評し得べし、出で、未十回ならざるに誰なりしか、清新とたへたる『暗潮』の如きも、矯飾の痕歴々掩ふ可らず、『青年文』記者は精勁巧緻と云しも、矯飾なれば、巧緻はあり、精勁はなし、島田の影法師も、河東の灸すゑも、皆いらぬものなり、小細工小道具の中にて唯

取る可は一つ半鐘の音のみわれは眉山の文の美しきに感ずれども癖の多きに感せず
 ●露伴既に壇を下り紅葉漸くすがれ行くとは『青年文』記者のいふ所なり漸くすがれ行くは猶存在を認むるの語なれども既に壇を下りは全く亡き者にしたる語なり記者は何に由てか然か判じたる年中引札を廻されば料理屋にあらずとや休多しと雖八百善はこゝに永らく優に料理屋の巨擘たるを失はざるなり民友記者が脳味噌盡きしといひしは誰々が事を書かざる者と書けざる者を混するなくんば幸なりわれは同社の新年附録が同記者の所謂一山百文にあらざりしを祝す

●言ふ迄もなくことしの新年附録は松葉殘花をならべたることこのよりは遙によし中洲に吉藏家橋が會我を演ずると相待つて殊によし所謂青年作家の顔揃ひとて江湖の喝采ひと方ならずとかわれは寧ろ民友社の毎度ながら如才なきにも喝采せんと欲す但し喝采とは俗語にすれば唯わあ〜といふ事なり

●水蔭の『炭焼の煙』この中にての古顔なればどこにか熟練がある筈なれどさしたる所も見えぬは『女房殺し』以來所謂青年の仲間に入りて段々跡へ年を取つたのかも知

れず今一息と言置いて更に八分強を追加したき氣味なり自然兒と評したる人ありしも何處の花見にの眞次と我より男の好い人が惚れたらの眞次とは同一人にあらずこれを自然と見るは安宅丸の伊豆へ行かうを自然と見るに近し元來この種のものには下手に書けば滑稽に落易きものにて水蔭のが何となく滑稽の心地するは何となく下手なところがあるのなり

●おもひ餘りありて力足るなしとは天知が「のろひの木」の事なり片輪にまで念を入れし徳は争はれず作も天晴片目なり吃りなり其上波ならざるだけがせめてもの仕合せか麴包に蜜を塗りて黄粉の中を轉がしたるものを先頃大道にて賣り居しも決して新案といふ可からずこの作をなすと魔王の顔と凄いは孰れぞ焼けよ〜の邊も儘に或あやまちに陥り居れり總じて片輪など書かんは要あるどころだけに斷りてしかも忘れられざるやうに工夫すべし一々に片目の吃りのと名告らしめんは恰もこの作者がいかゞと疑はるゝ雅言を數多用ひし如くうるさからずや

●われは今鏡花が名の頗る高きを怪み居るものなりよし『琵琶傳』はすぐれたるもの

にあらざるにもせよ讀去り讀來つて何の妙をも感せず、重隆も、お通も、謙三郎も、傳内も、皆有るまじき人なるのみならず、脱營でも何でもれしと理不盡極まる叔母さんを強ひて産み出してわづかにこの作を成せるに過ぎず、これをしも賞づる人あらば多分は今

の批評家の買かぶりに惑はされて鏡花調にていはゞ感心すべく馴らされてあるが爲めなるべし、不思議なるをよしとすと説く者あれども、不思議を貴ばず、手づまを看るに如かず、手づまにしてもわれは柳川一流の蝶の古めかしきながら、其使分けの間に巧を有するに價を拂ふべし、未熟なる田舎廻りの大砲の奇藝を觀んとは思はず

●さりどてわれは決して折角の新進作家なるものをイヂメルにはあらず、一葉を取る天外を取る、宙外を取る、今のところ、鏡花を採るの意なきなり、鏡花を壯士役者と見立てたるは稍當れるものならんか、鏡花よ今の批評家の多數は皆君を推せりつとめて倦まず力あらば紅葉をも抜け、露伴をも抜け併してわれに此評の禮なきを悔ゆるの日あらしめよ、ト斯う切口上で行くと何だかへんなりちと寛いで今度は『琵琶傳』を讀みたる人々に忠告す、失敬といふ言葉をさし、しどきは努油斷したまふな咽喉を突かるゝこと

あり、これは昔の我君御免を當世にひき直したる新發明の掛聲と云つてもよし、謎と云つてもよし、苦しがりの小唄と云つてもよし

●蝦と車渠赤貝とさる蚌を分つ能はざる今の批評家は、宙外を天外、鏡花の下に置けどもわれは、宙外が力の遙に、鏡花に超ゆるものあるを確信す、之れを天外に比するも優劣は今姑らく言ふを措きて寧ろ、宙外の良き方向に進むの望ある者なることを確信す、されども『ひたごころ』は極めて不出來なり、氣組の明かに見ゆるだけに仕損じも亦明かに見ゆ、阿春はお嬢様にあらず、世話淨瑠璃の賣女の化現なり、剃刀を宛がひしは宜しけれ、血に染ましめしは宜しからず、一風呂浴びて來れば又料簡の變らぬでもない様子に見受けらるゝなり、國雄も決して本人にあらず、始の機嫌取るところは勿論終の寢返り打つところも太鼓持の頼まれて狂言する如き調子なり、されば『ひたごころ』の二どころと聞えさては下心とも聞ゆと或人のいひしも無理ならず、唯この作のみにて、宙外はと問はるれば、縦令これがわが御主人でも二の腕やら猫の聲やらイヤモウとばかり跡の句を繼ぐの勇氣なし

●新年附録を一口に評すれば『炭焼の煙』は拙作『のろひの木』は悪作『琵琶傳』は愚作『ひたごころ』は劣作の何れも雛形なりこれに洩るとは『わかれ道』のみなれど強て作の字を附さば實らざる廉あるを取りて不作とも言はばや何しろことしは野郎の外れなり假に役割にすれば白拍子、一葉、同宿、水蔭坊、天知坊、鏡花坊、宙外坊、但し道成寺は必らず團十郎の勤むるものと早呑込に呑込み玉ふな常磐座にては銀之助も勤めし事あり

●人間にあらざる人間わづかに姓名の人間らしきによりて人間かと思はるゝ如き並べて得たりとなすの鏡花が名を常に言ふを忘れざる『帝國文學』記者は、一葉の『十三夜』を『にぎり江』に比ぶべくもあらずと云へりいかに『にぎり江』は佳き作なれども『十三夜』も佳き作なり其の間に比ぶべくもあらず程の差違ありとは思はれずわれの佳き作といふはもとより最高の段を指したるにあらざれども言換ふれば『にぎり江』も『十三夜』も同じ段にありとの事なり『にぎり江』を越後屋に於ける饅頭の如く特に優れたるものとなすは例の鏡花の名を忘れざると同様の頼母しき記者が癖なり

るべし『わかれ道』も亦按排に於て前の二作と巧拙なきのみならず材は寧ろ勝ちたり唯われは一葉が筆のやゝみだれんとする者あるを窃かに認むるが故に今の新聞雑誌に流行する如き圈點附の褒め言葉を際限もなく列ねることをなさざるなり諸評者のいふ所をさしてわれに言ふ可きあらば又の時言はん

●『帝國文學』記者曰く、鷗外と露伴と硯友派と、緑雨と云々其硯友派とあるは紅葉の誤なるべしとのみは嚴めしき考のあることならねど合縦とも連衡とも开は見る人の見るまゝなり鳥合とは思切つたる申分かなあつまれるを直ちに鳥合といはゞ天下何ものか鳥合ならざるべき悠久なる美の前に跪きて子に譲り孫に傳へをそゝツかしくさかば今から遺言の御用意とも見ゆる『帝國文學』の如きもまさしく鳥合なり決して矛盾も衝突もなさざる誠によき鳥合なり表紙を評されて泣言をいはざる天晴の鳥合なり昔は鳥の鶉の真似するを笑ひしも今は鶉を鳥が笑ふとやら思ふにこは『帝國文學』記者の事にはあらざるべし

●鷗外とききて征清土産出づべしと噪ぐ者も亦誤りなり土産は有るにもせよ無いに

もせよいつも日光へ行つた者が羊羹を買つて来るやうな譯に參らず (廿九年一月十日稿)



獨眼龍歌

犀 東

扶桑決皆六十州、蜻蜒翮裂不可収、彎我弩兮放吾鏃、射殺彼鹿樹吾矛、奥山羽水既吾有、天下掠敵見沐猴、隻眼睥睨毛越野、齷齪惡久居遐陬、繕吾兵兮秣吾焉、直指平安繫華騶、何圖彼沐猴冠者、赤手捧日扼咽喉、吞却板東三百里、掀弄群雄似打毬、尺蠖之伸必先屈、枉向轅門脫其鑿、含垢忍辱誤稱臣、恰似秋鷹棲綠鞦、我有垂天圖南之雙鵬翼在、久俟撼嶽捲海之扶搖大颺、日東一任虎豹圖、三韓亂漢不入眸、席卷雞林兒戲耳、瀛外征蠻樹吾猷、城鼠社狐非所關、我敵日今在歐羅巴洲、惜哉四海忽歸狡童掌、文恬武熙大平謳、蓋世之氣掀天略、一蹶已矣屬浮漚、絕代英雄稜稜骨、空埋青葉山頭、鴻生北爲松島游、偶入瑞巖穿松楸、堂廡翼然輪奐美、內有遺像勢如彪、新月銀題電四射、奕奕生氣凜千秋、欲就山僧諫往事、唯有清磬徹巖幽、乃賦長句試一嘯、地籟度樹響颺々、

青 東

夏期の追懐

青萍迂人

予歐洲より歸朝して既に十二年、夏季に臻る毎に歐洲諸國遊覽の快を追懐せざるはなし、今や日本に於ても人情風俗の變遷に従ひ、夏期に追へば都人士の勝を追ひ幽を討ね、或は海濱に或は山間に、都門の紅塵を避け暑を脱れ涼を索むる者其の數年々倍加の趣きありて、是が爲め近くは相州の諸海岸或は箱根伊香保の山中、遠くは須磨明石舞子の海邊に遊客雲集し、青松白沙の間、旅館旗亭の設け、彼此散見せざるはなきの勢となれり、然れども其遊樂の狀に至りては歐洲諸國の類似の土地と比例すべきものあるを見ず、予が最も痛快に勝へざりしは瑞西山間の遊覽とす、瑞西は世界の遊園と稱せらるゝ所にして、自然の風景、山あり河あり湖水あるのみならず、其地高く海面に抜くるの故を以て、七八月の炎天も猶ほ皚々として白雲を戴くの山岳彼此に散點す、其湖上には汽船あり、溪間には汽車あり、甚だしきは汽車を以て遊客を山巔に送迎するの構造あり、而して各地の小都會は勿論山間幽邃の地にして瀑あり、

水あるの邊には必らず一二の旅館ありて遊客の美を逐ふて轉宿するの便に供し、世上の塵念を洗滌するの用を爲さざるなく、而して其遊覽者の數も頗る夥多なるが故に、旅亭に於ては夜に入れば則ち相集まりて音樂を奏し、舞蹈を演ずる等のこと亦甚だ尠ならず、音樂を奏し舞蹈を演ずるは稍や俗に近きが如しと雖も、其人等は概ね紳士貴女なるが故に、其實俗に陥らず、而して亦此等の事を好まず、眞に幽獨を樂しまんと欲するものは、別に自ら其場所なきにあらず、インタルラーゲンよりベンガル、アルプ、に到る溪間の如きは、所謂銀角と稱する絶峰ありて、牛角の狀を成せる奇峰の白雪に纏はれて前面に突出す、盛夏是に向つて溪を登れば雪華直ちに降りて我が胸間に入るが如きの想あり、其快實に謂ふべからず、既にしてベンガル峠に掛れば前後の諸峰巒、高さものは勿論白雪皚々たり、接近の巖下樹陰亦處々に殘雪を止むるもの尠からず、而して斷岸絶壁處々に横はり、時に壞崩の雪堆遠く峯頭より溪澗に墮落し、其響般々として遠雷を聞くが如く、而して又青草藍を敷くの所に於て遠近に牛羊を放てるありて、其頸に掛る所の鈴の音歩に従てチリン／＼と遊客

の耳に入り来る、疲るれば則ち茶亭あり以て憩すべく、歩するに倦めば則ち驛馬あり、以て騎すべし、漸く進めば所謂禿松原とす、風雪の爲に群松其頭を摧折せられたる原野にして、是バイロンが人世の盛衰を嗟歎したる名作を綴りたる所なり、更に進めば一條の清川潺湲として樹林に添ひ、流るゝあり、此れ歐洲諸名畫師の屢々其筆を染むる所なり、

溪谿の兩岸には處々數千仞の瀑布ありて白糸を中天より懸るが如きものあり、最も高さものは其水垂下半途にして風の爲めに吹き去られ、其の趾を滅するが如きものもあり、此等の勝景は殆ど人間以外の觀にして、予が最も心魂を飛揚せし所とす、日光中禪寺の勝、須磨明石の美愛すべからざるにあらず、賞すべからざるにあらず、然れども之を瑞西山間の絶景に比せんとするは即ちトツバアスを以て金剛石に比するに異ならず、將又各海岸に勝地多く、概ね避暑の海水浴客群集するの地にあらずるはなし、指を屈すれば英國南岸のブライトン、インスポルン等の如き佛國北岸のドンカルク白耳義のフステンドの如き、夏期の繁盛實に謂ふべからず、其地には皆

な大なる海水浴場あり以て游泳すべく幅員廣大にして坦々たる道路あり、故さらには遊歩すべく海岸よりは海中に突出する棧橋あり數十間の長さに架設し、其極端には一の廣庭の如き集合點を設け、夜に入れば則ち樂隊をしし音樂を其場に奏せしむ、浴客皆な其周圍に群集して月を賞し涼を納る、凡そ此等の遊事は我が海水浴場に於て未曾て見ざる所とす、蓋し我が邦人の性質寧ろ幽獨を樂み集合を嫌ふに似たり、孰れか得、孰れか失、孰れか高尚孰れか卑下、予今之を論ずるを欲せず、然れども其現はるゝ所の形跡の異なる所は素より日を同くして語るべからず、而して又此等遊覽以外に歐洲人の頗る冒險果敢の氣性を現はすの一事あり、他なし壯年者が或は社を組み伍を結び、夏季に至れば屢々高山の絶頂を遊覽するこれなり、殊に瑞西諸山の白雪皚々たる峯嶽間を徜徉し、奇を探くる者多し、其峻絶の所に至りては數人の嚮導者をして力を戮せ其前を導き其後を護せしめ、與に一條の長繩を把て相援け以て險阻を渉るが如き所尠なからず、是が爲め年々必らず數人の死傷者を出さざるなしと聞く、有名なる學者バルフル氏の如きも三十一歳を一期として先年其身を瑞西山

間の雪中に埋め終れり焉、(此人はケンブリッジの教授にして年齢に似あはざるバイ
 フロデーの大學者なりしが又頗る遊戯に長ヒクリケットの如きは彼の最も巧妙なり
 し所先年中瑞西登山の折過ちて溪間に陥り先導者と俱に死したり)斯の如きこと一
 面より之れを觀れば愚は即ち愚なるか如し、併し又一面より觀れば彼等敢爲の氣性
 を養成するの具として頗る奨勵すべき所あり、本邦の書生間斯の如き事を爲す者有
 や否や我邦亦近年往々是に類似の事を爲し山間僻地を跋渉する者あり、我が山間の
 地は瑞西山間の如きの危険あるなし故に假令登山の壯年其數を増すも生命の損失に
 恐るゝ所なし予は彼等に向ひ益々斯の如き事を奨勵して以て勇壯の氣性を養成せん
 ことを希望せずんばあらず

菊女想夫の文

戀に瘦せ戀に死して石と成りしといふドラマチカルの極想は松浦佐世姫の浮名に流
 れぬ、ぬけめなき簑笠の翁は此戀石を叩いて石魂録一編を著はす、思ひのまゝに儒
 教的理想のヒロインを作りて之れを瀬川采女の妻秋しくと名づけたるを知らん、こ
 れぞ肥前龍造寺の臣采女正の妻瀬川菊女が假りの姿なり、豊公外征の軍に従ふて朝
 鮮に在ます良人を想ふて菊女は殆んど戀ひ死なんとせり、一片の手翰は彼れが出や
 らぬねやのうちに深き思ひの淵ともなりて書き送られつ、ミューズはいつもながら
 嫉みの神なり、便りの船は難風に打破られ其書函は流れくゝて博多の浦にたべよひ
 ぬ、殆んど非情の人とも言ふべき驕謔の豊公も、此書を見て恍として美に打ちなや
 されしといふ、たまゝ所用ありて采女正は召し返されしをもて、後人ひたすら此
 書の故なりとして物くしく論ずる者あり、良人の武功を妨げて妻の務めたりとす
 るやなど、菊女地下にありて寃をやなげかん、さばれ其ゆへなりとするもヒューマ

ニチーは利害論を以て拘束し得べきものにあらねば、今爰には至誠人を動かすつべき至戀の聲をして讀者の詩想到味はしむるを願ふのみ、

世に瀬川の妻女の文なりきて尙ほ長文にて傳ふるものあり、其文意は略々同じくして産みたる

子供の事など細かくつられ文句など近きものを用ひたり、爰には其眞なるべしと思ふ方を掲げ

つるなり、

便りの船をよるこびつゝ、うらるるに取向ひたり、絶るまもなくなつかしみ思ひ侍る事もおほかるめれど、心を合せ語らふべき人もなければ、聞さび、ひとりかたしく袖の露、床は海枕は山と立のぼる胸の煙、はるゝまもなき涙の雨うゝぎ、いつを限りの露の身の消やらぬ程も恨めしきぞかし、其あらましを聊知らせたり、うこほどは世わたる業のことしげきに取紛れ、もはやこゝほどの事はおぼし出さるゝ事も、波の音すさまじき御心とやなりぬらんと、思ひのたね心の中にしげりあひぬるまゝ、硯に向ひ獨り煩ふ事のすみも涙の海とやなる、

行水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

とよみおく和歌のふることまでも吾身の上にて覺えて、其人の心のうちおしはかり少しは慰めぬ、思へばくゝらひまゐらせぬ昔しもありつるに、こは何の報ひにておはしますぞや、あさましかりつる我心かなとは思へども、よきに止まらぬ心のくせとして又戀しう思ひまゐらせ、ものゝけもあるように人もいひなし、我もまた心の正しからぬ事を知れり、抑も心は身にそよものなれば、身のまゝになるべき物なるか、されば心のまゝに身はなるものところ見え侍れ、まことに心は身の主ならじと古き文に多く見えしが、げにも左も覺ぬ、いかなる神の結びあはせにや、あさはかなる契りとはなりぬらん、ある人深う悲しびのへりしことありしを、いや、それは敢果なきことには侍るなり、たゞ思ひすてさせ給へと諫つることありしが、かく我身の上になりぬればうのしなくらうして、あやなき事をなん思ひこがるゝも女の身なればとて又口をしからざらめや、心を心のまゝにせざらんも尙あきらかならず覺え侍ぬ、たいすの神の御慮には違ふことにて侍れども、これより後は戀せじどころはいのり申べけれ、古より今にためし少なき、こまもろこしとやらんへ渡り給ふ、かぎりな

さ海山を隔て互に風の便りをさへき、かねまゐらせ候へば、かく思ひ絶んとせしも
 又むべならざらんや、天正十八年の秋より某の春、こまの國へ御陣有べきむね仰せ
 ありしがども、更に實とも覺え待らで多くの月日を過し待りしが、いつの間によら
 ん文祿初の年の三月にも移り來て、あすはこまの國へ舟出し給ふなりと何方もこと
 しくしうの、しりあへりぬ、大かた夜も半近う更しかば行末の事などかはらじとの
 み談りつゝ頼めおきつるに、はやわけがたの空に成りて別をいろく鳥の聲く打し
 きりしかば

身をかくてさすらへぬ共君があたりさらぬか、みのかげははなれじ
 とよみおく和歌の如く、是をかたみとたうがみながら残りおき給ひしを、まこと
 に袖より外にもらすかたもなく、恨てはよみ讀みてはかこち、あさな夕な詠めくら
 し侍りぬ

思ひつゝぬればや人のみえつらんゆめとしりせばさめざらましを
 と小町がよみしことの葉もげにさることぞかし、

かざりとて別るゝ道の悲しきにかまほしきはいのちなりけり

まことにはかなき命ながらへ、かゝる思ひも淺ましく覺へ侍れども今一度見もし見
 へもし、積りぬる事とも晴しまいらせ度候て、おだなる露の玉の緒も長かれどのみ
 祈ばかりにてころ候へ、何事もくあはれと思召出され候は、かすく御うれし
 く思ひと、申たき事どもこよなふ多くおはしまし候へども、あはたしき出船の
 急ぎに取紛れ、いかゞ申候や見ゆるよしとめめでたくかしく、

くり返し、其後消息の音づれもおはしまさず御ゆかしさの程堪へ難くあま
 りに人目も恥かしくころ候へ、まことに出やらぬねやのうち深き思ひの淵とな
 り

かくあらんゆえを知らでたのみつるわが心をばたれにかこたん

是はみづから思ひよりにておはしまし候御恥かしくころ候へ、めでたく、

五月九日

せ川うねめ殿にて
 人く申給へ

客作雜興

田岡嶺雲

五月十六日、都門を發して二十二日作州に入る、心竊に期す、作の地山を環らす、必らず静邃幽寂聊か以て都門塵俗の汚氣を滌ふを得んかと、既に津山に着して羈舎に投すれば此地の俗、羈舎必ず酒樓を兼ね、故に日夕絃歌の聲を絶たず、擾々耳に聒しく、書を讀むを得ず、文を爲るを得ず、思を鍊るを得ず、頗る煩冤に堪へず、心快々、一夕飽後飄然寓を出て、津山河濱を徜徉す、河は市の南にあり、甚だ廣からすと雖とも清冽、岸上老松あり道に列なる、時に月正に天心にありて松影參差途に落つ、仰けは鶴山城趾蒼蒼の林樹淡煙に鎖され、對岸の山色また迷濛、宛然一幅の輕紗、燈影水に落つる處、螢火の亂るゝに似たり、而して河流は即ち潺湲として聲甚た激せず天色は朦暗として月甚だ明かならず、月光淡くして夢の如く水聲は低くして細語に似たり、此時、此境の清味、吾初めて吾身の静邃幽寂の地に入りて、また都門紅塵の人に非ざるを知りぬ、

一度静味を味ふ、寓舎の紛擾殊に堪へ難きを覺ゆ、翌日町を去ると半里許の小原の地に浴泉あるをきゝて赴く汚穢留る可らず、終に一日を隔て、去て湯ノ郷の温泉に遊ぶ、

湯ノ郷は津山を距ると五里、作州第一の浴場たり、その泉稱して鷺ノ湯といふ、衆山回環竹木蕭疎境甚だ幽、樓に上て窓を推せば巒巒面に當る、吐吞の雲烟手掬すへきなり、河あつて南方を遶る迅流碧瑠璃を鎔かす、灘石皆奇狀、碧蘚之を暈す、水濱、津あり一小女兒箆して客を渡す、前崖斷岸崢嶸山皆骨を露し矮松之が髪たり、頭を壓して落ちんとす、流鶯老に啼て境更に寂に恍然として人をして自ら火食の民に非ざるを疑はしむ湯の郷に留ると三日朝に夕に此間に徜徉せざるなし、

湯の郷より歸りて後三日、暑熱漸く加はり切りに清凉の地を思ふ二の宮の地の松林中にありて河に枕めるをきゝ、意動く、輒ち遊ぶ西の方街家の盡る所、橋あり、橋を過くれば坦々たる大道河に沿ふて逶迤、兩側老松枝を接へて翠色衣袖に落ち意既に儻然河を溯つて行くと半里許にして則ち達す

旗亭に上りて酒を命す、村酒飲む可らず、此地湯餅に名あり、故に更に之を命す、
 之を待つの間、携ふる所の書を枕にして横臥す、灘聲喧々遂に眠をなす可らず
 此地津山川の上流に瀕す石瀬淺々、隔て、久米の皿山に對す、山甚た高からず狀皿
 を伏せたるに似たり、山名の由て起る所か山は則ち翠色滴るか如く、河は則ち急灘
 雪を噴く、欄によれば涼味肌に透りて久しく住まる可らず、頓みに市井の俗氣を滌
 ひ去るを覺ゆ、

此日以來暑氣益々加はり、而して塵務漸く忙はし、加之節梅雨に入りてより一日の
 快晴を見ず、故に出て、遊ぶ可らず、快々として蝸廬に伏するのみ、
 嗚呼男兒尙ふ所意氣にあり黄金塵糞のみ、我は暫く甘して役々たる勤に服し、拘々た
 る利害に關心せざる可らず由來人生毀譽、蚊蚋のみ、然れども得意の事少く弗意の事
 多し我の生るゝ既に我の欲して然るに非ず、況んや其他をや、我また何をかいはん、
 何をかいはん、
 暇を得るの日近きにあり、直ちに去て山川清秀の野に入らんとす、聞く伯耆の國境

に近くして眞我の地あり、泉清く山も亦幽と、暇を得ば直ちに去て、許由の耳を洗
 ひ夷齊の食を断ち、暫く人間の不平と相忘れんと欲す我直ちに去らん、我直に去ら
 んと欲す



哀 歌

晚 翠

同じ昨日の深翠り

廣瀬の流替らねど

もとの水にはあらずかし

汀の櫻花散りて

にはひゆかしの藤ころも

寫せし水は今いづこ

心どころの春去りて

色ことごとと褪めはてつ

夕波寒く風かてば

行衛や迷ふ花の魂

名残の薫りいつしかに

水面遠く消えて行く

恨みを吹くや年ごとの

瑞鳳山の春の風

をのへの霞くれなるもの

色になぞろふ花ころも

暮山一朵の春の雲

緑の髪を拂ひつゝ

落つる小櫛に觸る袖も

ゆかしゆかりの濃紫

とめし薫りのはかなさは
何に忍びむ夕まぐれ

羅綺にも堪へぬ柳腰も

枝垂は同じ花の緑

花散りはてし夕空を

仰げば星も涙なり、

池のさゝ波空の虹

いみじは脆き世の道を

われはた泣かむ花の蔭

其花掃ふ夕風に

蝴蝶の宿を音づれて

問はん「昨日の夢いかに」

盡さぬは恨み春の雨

春を誘ふて蜂蝶の

空のあなたに去るがごと

玉釵碎けて星落ちて

あはれ芳魂いまいづこ

残るは枯れし花の枝

盡さぬは恨み春の雨

ともしび暗きさよ中の

夢のたうちをいかにせむ

ありし昨日の面影に

替はらぬ笑みも含ませて

名におふ花の一枝は

嗚呼その細き玉の手に、

海棠

盛りいみじき海棠に

灑くも重し春の雨

花の恨か喜か

問はんとすれど露もなし

聞かんとすれど花いはす

夕しづかに風吹きて

名残の露は拂はれぬ

風の情か嫉みにか

問はんとすれど露もなし

聞かんとすれど花いはす、

利根の夜船

赤松國祐

泣きつる袖を別れて、利根の夜船に浮びしかば、我夜は頓に凄まじくなりて、風の音今さらに身にしむめり、窓を開けて眺むれば、川水の上に闇黒く、夜霧遙に消えかへれるは、かの燈火にわらずや、されども立てる柳も見ゆず、まして其姿は、たいてい面影のみ、

乗合は大方眠りたる船の中に在りて、我夢は又催さむとす、されど々は前の如く樂しき者にはわらざるべし、君か玉琴を聞つる前の夜には、我戀の童は、涙もて我に同情の感をさゝやさしが、蘆原のさわぎのみさく今宵は、又翻りて我を嘲るなり、君在りし日の樂しさは、今より後のわびしさをもてや易へつらむ、幾程もなさ人世の春に、悲さへ多く交れるを、猶立ち止まらむと思ふなるは、希望、汝といふ者のあればなり、

岡の松原はとく過ぎぬ、そは我等が夏の陰、柳田の堤も早おどになりぬ、うは撫子

を摘みし處、うれしき名残は見るく消え行きて、都の塵は今や目の前にたゞむとす、別よ、何の神ぞ、たゞ人に涙のためいきとを興へて、

君か垣根の蝦夷菊露に咲かむ時、我庭に鴉來て田園の秋を告げむ日、或影のいかにやつれて、君か袂のいかにしをれむかを思へば、今の悲にもまして悲しきは之なり、人の世の定なき、一年は復廻り來とも、昔の様は大方變りて、苦しき今日の別さへ、なつかしきものになりやせむ、何に行末とは契るらむ、此頭の白くなり、其花の色あせむ日を、おろかにも行末と人はいふよ、はかなき回想に養はれて、日南に書讀む翁の、身には平和あり、人には尊まるゝぞをかしき、

汽船の浪、取手の岸を洗ひて、燈影と人語と、さわぎつゝ、我空想を破りし時、老年たる田舎人の、幼きをとめが手をとりて、我前に坐せしを我は見たりき、

むくつけき田舎人も、あどけなき少女も、今は寤めたる乗合人も、齊しく眼を轉じて、かたへなる酔ひてまどへるが如き若者を、恠しと見るさまなりしが、やがて果なき世間話は始まりて、何村の強盛の事より、黄金ある人の身の上に語り及び、今

年の蠶の噂より、首府の華美なる事に物語は遷りて、罵りあふ間に、つひに我上は忘れはてつ、

農夫が桑麻を説き、都人の布帛を語るも、己れくが夢を訴ふるなればよしや、唯君等が夢は人に語るにたえ、我夢は終に此世に跡を留むへからず、我手は我胸に、我夢は我心におきて、我は睡らむ、うるさき此一夜を、

夢なるか、菫はあたりに咲き、雲雀は高く囀る野邊を、我なる童は歌ひつゝ遊ぶなり、春の夕は名残なく霞みて、ろよぐ風もなきに、歌の調子漸低くゝなりて、我が少女もまさに眠らんとす、眠りたまふな君、野邊の夕暮は淋しきに、

我夢は全くさめて我は悲しき今の我となりたるに、我少女はまだ眠れるはあやし、こゝは何處ぞ利根の川船、我かたへには菫の花はあらで、老たる田舎人を横はれる、あゝ、こはかの翁の少女なりけりな、戀の神は戯れて、我に恠しき樂を興へたまひぬ、

此夢の實ならましかは、いかばかり我世は樂しかるべきぞ、いかばかり行末の遠白ぬ、

く。て。望。の。限。な。か。る。べ。き。ど。人。の。運。命。ま。さ。に。定。か。な。ら。む。と。し。て。戀。の。り。戀。は。稻。妻。の。如。く。と。く。過。ぎ。て。名。残。の。み。窮。な。き。が。此。世。な。り。

幼兒は一度目を開きて、向へる我を見たり、あゝ其まなざしよ、なごかくは我思ふ君に似たる、たゞかれは大方世の中を思ひ知れるに、これはまだ清くて、憂といふもの更に知らぬげなるのみ、されど其つゝ少しげなるれもわくを見るにも、君も亦やがて世をうきものにしたまひ、はては我如きわび人に戀して、年々に別を惜みつゝ、涙にやつれたまふべし、あなかなし、

清きものは幸少なく、慧きものに涙は絶えぬ此世には、木強漢のはびこるも、うべなりけり、我が樂しむ時共に樂しみし世の人は我が泣くを見ては笑ひぬ、離れ小島に渡るとも、深山の谷に潜むとも、此の世の我に伴ふほどは詮なし、寧利根の川船一夜の空想には、なみて、わが世盡さむこそ望ましけれ、

我胸のいたく亂れて、苦しきに、あたりは皆眠り去りて、其高きいびきの音は、覺めて吾見る夢を、嘲り罵るか如し、我妹子に似たるをとめは、祖父の翁には顧ヶられずして、獨都を待つにたへずや、うも亦うたゝねせむとす、其たよりなげなる有様を見て、我は同情の懷に堪えざりき、

我もいたく勞れて、暫は眠に入りしが、くりかへし又故郷をば夢みき、此度は何なりけむ、悲しき事多くありて、ほとゝ心もいたく、我は身悶へして、さめしに、何といふうれしき夢のたゞちぞや、かの我妹子に似たる少女は、我腕によりてすや、と眠りゐたり、

船路は市川に近くなりつらび、鴻の臺の松に曉の明星高く、堤の宿には雞の聲聞え、東雲の光は船窓より入りて、幽に少女の寝顔の上にはへり、我夢も未全く覺めず、



斷篇十種

江見水蔭

其一

程ヶ谷隧道

國府津行の瀛車に品川の停車場から乗つたのは、午前の十時三十分であつた、飛込んだ中等室は、幸ひに空いて居て、我より他には只一人の客が居たばかり、これは新橋から來たので、突當りの隅の方に居て寐る、外套を躰に掛けて、鞆を枕にして帽子で顔を隠して、誰だか少しも分らぬ、其外套は、襟垢が着いて、裾の毛が切れて、縞柄も五六年前に流行した色なので、仕立も従つて當時の物ではない、其帽子は、黒羅紗の、鏝廣の、押潰した様なので、塵が一抔積つて居る上に、泥が附いて居るのは、風にでも取られて、泥濘に落した物と見える、こればかりを見る他には、此人の如何なる扮装であるかを知る事が出来ぬ、此室に入ると、此人に眼が着くより早く、一種の臭氣に鼻を衝れた、それは樟柿の腐つた如き熟酔のにはひであつた、

それ故我は遠く隔たつて腰を掛けたが、大森から鶴見までは實に此二人切で淋しかつたに引替へて、神奈川からは急に多く、混雜の内に横濱へ着いたが、彼の酔漢はこの物音にも目を覺さず、實に能く眠つて居た、横濱から乗つた客の中に、夫婦連があつた、それは恐らくは、濱の紳士にてもあらう、男女共に綺羅を粧ふて居る様子が、如何にも新婚旅行らしく見える、大磯行か箱根行か、其新夫人は、實に美しいものだ、髪は濃い、それを丸鬘に結うて、色の白い、その上に御白粉をはどこして、玉の様な目、蕾の様な唇、栗茶色の絹セルの女外套、白金に寶石の入つて居る指輪、尤も人の目に着くが、殊に絹手巾に澤山濕してある香水の匂が、今までの酔漢の酒氣を壓したので、我には何より嬉しかつた、此二人の腰を掛けたのは、丁度酔漢の向側であつた、瀛車は間もなく程ヶ谷に着いたが存外此所で多くの下車する人を生じて、残つたのは紳士夫婦と、酔漢と我との四人であつた、

新夫婦は連りに睦まじく何か語つて居て、輿に入つた時には新夫人の笑顔、其都度

口邊に當てられるのは彼の香水澤山の手巾で、相變らず佳い匂が風に連れて來る、醉漢は例の如く顔も躰も隠した儘、寐がへりもせず睡つて居る、我は新聞を讀で居た、

急に暗くなつて、忽ち石炭のはひが充滿ちた、酒氣を壓した香水の如く、石炭のはひは香水を壓した、これは程々谷戸塚間の隧道に入つたのである、

紳士が啣へて居る卷莖の火が、一點星の如く見えて居る、力を入れて吸ふた時に、光が強くと成つて、眼鏡の金端がきら／＼と燦めいた、其卷莖を口から放して、膝の上を持つて來た時に、新夫人の指輪の寶石が同じくきら／＼と燦めいた、

不意に此二人の向側で、青い火が發した、吃驚したが、それは醉漢が起きて臘燧火を摺つたので、これも烟草に火を點けたと見える、如何なる顔かと窺ふ間に、燧火は消えて烟草の火のみが光つて居る、最う隧道を出やうとする時其烟草の火は消えたが、先から點いて居た、紳士の方のは、葉巻だけに未だ長く光つて居た、

夜が明けた如くである、我は新聞を再び讀續かうと思つたが、不圖彼の醉漢の方に

眼が轉した、然るに、彼は舊の如くに矢張外套を掛け帽子を載せて、靴を枕に睡つて居る、大急ぎで烟草を喫ふて、又寐たのであらう、

更に轉して眼は新夫婦の方に向ふた時に、怪しとも怪し、それは實に奇怪なる現象を見た、それは誰の上に、

紳士は依然として卷莖を燻らして居て、一向平氣であるものを、

何を新夫人は驚動したのか、彼の今の前まで紅の様な色の唇は、眞青に變じて、雪の様にかつた顔の色は、解けて土氣色を帯びて居る、愛らしかつた眼は、血の鈍染んだやうな、そして寒かるまじき女外套のぶるぶると震ふのが此方からも見える、

實に以て何とも分らぬ、不思議だ、短い隧道に入るまでと、出てからでは、殆ど別人かと思はれる夫人の顔、

紳士にもそれが知れたか、病氣でも起つたのか、と訊ねたけれど、今まで能く語つたのにも似ず、極めて低い聲で、いゝえ、とのみ答へた、

紳士は格別氣にも留めず、如何も隧道を通ると烟が入るものだから、それで誰しも閉口するね、と言つた切、ばかりくくと巻蓑を燻らす前の如しだ、
醉漢は矢張寐がへりも打たぬ、

其内戸塚へ着いたので、我は用事のある儘、此所から下車したが、其急いで降る時に、流車の中でばつたりと音の仕たのは、もしや顔を隠して居た醉漢の帽子が落ちたのではあるまいか、

惜しいかな、此後の事を我は知らぬけれど、今に見たくてならぬのは帽子の下の顔だ、隧道の中で燈火を摺つた一瞬に、彼の夫人は見たらうが、

其二 あはれ妹

御両親が御死去なされた後は、此兄をたよらねば成らぬのに、此家に居るのが厭ぢやとは、如何も仕方無い妹よ、
それならば上町の少兄上の家へ行つて居るが可からうに、

これも厭か、下町の叔母様の住居の近所は賑かな街であるから、其様に我儘を並べ

すと、彼方へ行つては如何か、

それも厭とは、寔に困る、何處まで此兄に苦勞を掛けるのか、一層の事、田舎の姉様の處へ行くか、景色も好し、氣候も快し、女は又女同士、それに極めるか、はて、それも厭とは、如何も困つた、それでは何處へ行きたいのか

何、中の里の方へ歸りたいと、嗚呼、何故お前は其様に分らないか、れ前は當分此方へあづけられて居るのではないか、それを知つて居るならば、何故其様にむつかるぞ、

今更泣いたとて、それは駄目、最う諦めよ、何程泣いても中の里へは、

嗚呼、不憫の妹よ、自分が離縁された、それさへも悟り得ぬ程である故に、向ふから離縁されたのも亦無理ではない、誰を今更恨まうぞ、唯あはれなは、嗚呼、妹！

其三 布哇の樂隊

布哇の女王廢せられて、共和政府が起つた時に、土人を以て組織せられて居た王宮

附屬の音楽隊を、新政府の直ちに備入れて、共和國の萬歳を祝する爲の樂を奏せしめやうと仕た、

が、悉くの樂手は辭して隨はず、一同共和政府の召には應じなかつた、

止むを得ず、新政府では、白人の内から樂手を撰出して、兎にも角にもこんだくとるを始め、ふりゆうと又はくらりね、とを吹き得る者、たんぶる若しくはび、ちたんぶるを鳴らし得る者、其他ころね、と、とるんべえ、ばざらねえ、ばりどん、あるとほるん、ほるん、ばす、に至るまで、持々の樂手は漸くにして揃へた、これと同じ頃に、一度解散した土人の樂手は、同じ土人の内よりこんだくとるを出して、私立樂隊を作つた、

そして白人樂隊が盛んに樂を奏する時には、同じく又土人樂隊も盛んに遣る、其土人のこんだくとるが振る指揮杖には、一種の力が籠つて居る、其指揮杖に連れて土人の奏する處の樂の音響は、悲壯悽絶、實に聽く者をして腸を寸斷せしめる、あはれ此音響！尖峯に黒雲を呼ぶの力ありや、太平洋に白浪を起たしむるの勢ありや、

破る、ばかりの拍手喝采は何の爲に常に土人樂隊の上のみ落つるのであるかを、在留日本人の誰でもが考へない者は無いのである、

其四 文盲

又母様への手紙かね、それは譯はないから直ぐ書いて上げる、けれど、お前さんは書ける手を持つて居ながら、何故自分で出しなさらぬ、と書生は問ふた、

下女はこれに答へて、釘の折の曲りなりでよろしいのなら、それは妾にも書けますが、妾の母には羞かしながら文盲ので御座いますので、如何しても他人様に讀んで頂かねばならないので御座います、其時、娘から來たといふ手紙の、あまりに拙いのを他人様に見られるがづらさに、と言ふて顔を赤らめた、

其五 砂上の我家

濱邊の干瀉に乞食が二三人集まつて、何か貝殻で圖を引いて居る、近寄つて見て居るとは知らず、彼の一人は、それ、此所が玄關だ、通つてから四疊敷で、其次が八疊

で、此方十二疊、離座敷ぢや、茶の間ぢや、湯殿ぢや、此部屋で我が産れて、此部屋で親父が死んで、同じ此部屋で、我が母親から意見されたのが、這んな廣い地面も、又立派な家も、酒と女でた、き潰してしまつて、今では此通りの御蔭様だ、と説明して居る時、上潮の浪は急に寄來つて、掻消したので、乞食はいまゝし氣に、えい、砂に書いた家まで潰してしまつたア、

其六 炭焼小屋

二月中旬であつた、炭焼の様子が見たくなつて、塔の澤から案内者を雇ひ、壘には酒を入れ、重箱には辨當を詰めて、それを擔がせて朝早く出立した、

湯本から舊街道を箱根へと登つて行くに、敷並べた丸石の突落して居るので、歩きにくい事は至極だが、幸ひに杉や松の枯葉が兩側から落ちて路を埋めて居るので、其上を踏む爲に、大變に樂であつた、途中で行合ふ炭擔ぎの女、これは多いのは十俵少くて三四俵、例の背負階子に載せて里へと運んで居るので、これに、何處で炭を焼いて居るかと尋ねると、川端村の裏山だと答へる、裏山の何の邊だと又尋ねる

と、烟が出て居るから、それを目當に行かッせいとの事であつた、

途中、それは種々の見る物があつた、今歳は例年より暖かいので、氣を揉んで池の周圍をぐる／＼廻つて居る氷製造人の顔や、狐が附いた爲に非常の強力に成つて、現に十六俵の炭を擔いで居た男の姿や、泥だらけの氷柱を嚙りながら來る巡禮の娘の大きな口や、松の木の洞の中で焚火を仕て灰を掻出した跡へ這入つてぬく／＼と寐て居る乞食の足や、又曾我の五郎の鎗突き岩とやら、不可思議なる名の岩なども見た、初花が荒行を仕たといふ、忍の瀧も遠く望んだ、又歩きながら案内老爺から、様々の面白い話を聞いた、中に炭焼の話もあつたので、大畧は見ぬ先きに竈の様子が分つた、扱て、川端村近く來たので、何處で烟が上つて居るか、裏山の方を見廻したが、烟やら霞やら區別が出來ぬので、流石の案内者すら大いに迷ふた、えい、行つて見ませう、間違つたら又其時だ、と心細い案内者が口上で、おぼつかなくも谷川の有る處から左に折れて、舊道を離れ、ほんの小路を、虎杖の枯れたのを押分けながら登つて行くと、ちよろ／＼水の谷川へ又出た、石を飛んで渡ると、

杉林の中へ入つて仕まつた、これを抜けると又谷川で、同じ流を瀧で見て澤で見て又川で見る様に爲つて居る、其澤に爲つて居る處には山葵が澤山植えてある、畠を土鼠に荒されると同じで、蟹に遭つては溜りません、と爺は云つた、此澤から上は、益々路が細くなつて、彌々坂が峻しくなつて、見上げれば見上げる程頂上が高く見えて、今の内は未だ路があるが、先きに成つたらまア如何して人の足が立てられやうかと危ぶまれるばかりだ、

けれども、老爺は平氣で、年寄の私でさへ此通り、炭を澤山擔いだ男でも女でも何事もなく下りて来るから、自分一人で高いの急なのとやらさうに言はしやるな、這んな苦しい處は日本の内に又と無い、などと東京へ歸つて、飛鳥山より他に登つた事のない人達に威強つしやるな、と我を罵つた、

餘程苦しめられた處で、うれ此所に炭焼竈がある、と言ふ老爺の聲に、嬉しくて、疲勞も忘れて飛んで行つて見ると、何んの、うれは、天井の土の落ちた、石壁ばかり残つて居る、古竈なので、四邊には灰や萱が枯れながら繁つて居て、黒く焦げて

居る、竈の真中には、狼らしい毛交りの糞が散つて居た、

がツかり失望して、其處に倒れると、老爺又大きな聲で、今度は本統だ、あれ、彼處に〜と指示するので、又起きて爪の長い指の先の方を見ると、成程霞ではない、慥に烟が立上つて居る、但し其處までは未だ中々あるので、けれども、最う、目的が定まつたので、大奮發で歩き出すと、此邊で以前には焼いて居たのだが、木が最う無くなつたものだから、彼處まで行つたのだ、今に又上の方へ行くだらう、と話して聴かした、其様に上の方へ行つたら、後には山を越えて仕まふだらうと言ふと、おう、山を越して又次ぎの山へと答へた、

烟が段々濃く見える、小家が見える、其小家は大變に小さく見えるが、遠く隔たつて居るから小さく見えるのだな、と思つて行く、漸くにして、其目的の點に達したが、小家は矢張小さいので、高さが三四尺、横が一間と少しばかりで、これが松の丸木を組合せて、其上に萱と杉の皮とを載せて、四面は荒挽の槻の厚板などが立てかけてある、それでも窓があつて、青簾といふ處が、炭俵の開いたのとは、名趣考だ、此軒

に目白鳥が一羽飼つてある、それは虫籠へ入れてだ、人間でさへ此様な狭い犬小屋の様な中に住んで居るのだから、鳥が虫籠に居るのは最も適當して居るのだ、此小屋の續きの物置然たる處には、水桶がある、粗朶籠がある、炭俵を編むのに用ゐるつら下げたてある、木製の砂掛、搔出棒などの焼焦げたのが立て掛けてある、此小屋の前が二坪ばかりの平庭で、それから北向に石疊の土天井、三間ばかりの竈がある、實に是嶮しい山の中に棚を掛けた様にしてこれだけが有るのである、其又平庭とて、砂灰を掛けた堅炭が並べてあるので、實に折角來た我等の居り處が無い、困つて居ると、小屋の中から這出した怪物が、御役人様、御入來なさい、と言つて突立つた、

驚いた、髪は灰を冠つて白く、顔は炭に染つて眞黒で、其又着て居る衣服だか身の皮だか、雑巾を着て居ると言ふのが一番狀を現はして居る、其御召物が、目塗の爲の泥に塗れて、縞も何も分らない、

御役人様と言つたのは、我を山林區署の官吏と思つたのであらう、我はわざ／＼炭

焼の見物に來た事を告げたので、初めて合點して、これから親切に説明して呉れた、先づ大くは鉈で木を切つて、鋸では切口が旨く參らぬさうな、其切口を揃へる事やら、木の名は、あくしば、こう、うしろし、かし、たにがし、その、など、字の宛方に困る様なのばかりで、それから竈の築方の講釋から、木の詰方、並べ方、口焚の加減、烟出の工風、ねらし、ほしねらしの口傳、おしくどの方法、火の廻りの知り方、搔出し方、委しく説かれるだけそれだけ分らなくなつて、好い加減に此方から引下つた、

突然向の山の雜木の中から、お客様にお茶でも出しなよ、と呼はつた者があるので、吃驚して、誰だと聴くと、へえ、彼は嗅です、と答へた、仕て見ると此男にも女房はあるのか、此の男の女房、見たいものだと思つた、まづ小屋へ御出でなさい、と導かれて、其小屋へ入ふとして、如何も困つた、我の如き大男は、平たく成つて這ひながら入らねばならぬのだ、入口の狭いばかりでなく、中でも座つて居て頭が上げられぬ、

小屋の内部、これが實に奇觀だ、土間に只蕙が敷いてあるので、其無い處に穴が有つて、其處で火を焚く圍爐裏としてある、此穴の左手にも、蕙が敷いてあるのは、聞いて見ると犬の寢床なので、全く想像通り犬小屋の中に人間が飼はれて居る形がある、それで此狭い中に、米櫃だの、酒樽だの、鍋、徳利、茶碗、箸、布圍まで入れてあるので、これでは最う身動きも出来ぬ、位、

炭焼男は、さん儀を座布圍代りに出して、御馳走にはどしどしと火を焚いた、

其處へ、口輪にする、ずさの枝を取りに犬を連れて行つて居た女房が歸つて來た、前に女と承知して居るから、うれと分つたが、初めに山男だと名乗つて出られては、其つもりで此方も拶揆をするかも知れない、

珍らしい事だな、客人が御座らっしゃつた、父様よ、お茶を上げなかつたか、と言ひながら、此方の顔を見やうと小屋の中へ這入つて來た、犬まで這入て來た、最うこれで満員で、猫一匹でも殖えては困るのだ、

それから、向ふでは饗應のつもりで、所謂御茶といふのをに入れて出したが、これは如何も口を着けなかつた、

此方からも酒と辨當を出したが、喜んで遠慮なしに飲み且つ食らひ、うして快く談じた、

初めの内は山中の話で、耳新しい譚も多かつたが、ろろく夫婦の述懐になつて、子の無いといふ事を頻りに歎けいて、其代りに犬を子の様にして居るが、これが此間兎を捕つて來ましたと自慢話に轉じて、それから此間雪の降つた時に、木が取りに行かれぬので、竈を休んで、久し振で里へ出た處が、人馴れぬ此犬が里の人に吠えた爲に打殺すといふて追掛けられたが、それはあまり無慈悲だと思ふ、お前様は何んと思はっしゃる、なぞ、いふ不平談が出て、うれから東京といふ處は好い處だといふが、矢張竈は石竈か、土竈か、炭の焼方は此方と違はぬか、木を切出すのに困りなさりはせぬか、と問掛けられた時には實に如何も恐入つた、

世間離れた此様な處で、夫婦二人差向ひで暮らして居るのは、どんなに楽しいか知れまいね、と問ふた處が苦々しい顔をして、あんまり左うでも有りませぬのさ、矢

張子が無いと面白くありません、と口を揃へて言ふ、それでは何が楽しみかと尋ねると、左様さ、と考へてまア酒でせうかねえ、と女房が言ふと、亭主は酒々先づ酒だが、それも暫らく飲まずに居る、といふに、我訝かしくて、今飲んで居るのは酒ではないかと、注意した、

いや、これは異人の酒、私達のいふのはたゞの酒の事で、と亭主が言ふのを、腹を抱へて案内者が、なに、壘は西洋酒のだが、中味は日本の上酒だよ、と教へると、はてね、妾達には如何も分らないと、女房未だ伏せない、

思ふに濁酒ばかり飲んで居るので、清酒の味を知らぬのであらう、

我はあまりの面白さに、此所で半日の餘を暮らして、塔の澤へは夜に入つて歸つたが、嗚呼、未だに其時の夫婦が浮世の塵を知らぬのを羨しく思ふて居るので、如何も慕はしくてならぬ、手を暖むる火桶の炭を見るにつけ、これは彼の夫婦か焼いたのではないかと、下らない事ながら一寸思ふ時がある、

其七 小太公望

我は片瀬川で毎日熱心に釣を垂れる、水か平かに、浮標は流れず、これからうろ／＼釣れか、らうといふ頃になると、蘆の蔭から何者とも知れず、大きな石を投込んで逃げる、實に困つた奴だ、折角楽しんで居るものと、我は腹を立てぬ事はない、度々投げるので其悪人の本體は知れた、それは隣家の百性の子の、悪太郎兄弟であつた、

石を投げぬ様に成ると今度は、自分達も釣に來はじめた、物干竿を見たやうな大竹に、紺の木綿糸を結んで、大きな鰻針に、石のおもり、豆殻の浮標、兄弟供此を持つて遣つて來る、うれで矢張聽いて見ると、我と同じ様に小鮒を釣るのだといふ、其竿なら鯨を釣りに行くが好いと冷かしても、平氣なものだ、

素より釣れる道理がない、氣を揉んで彼邊此方と場所を變へるが、魚は左程馬鹿ではないので、果ては疝癢を起して、其太竿で水の中を搔廻して、水馬を打つたり、藻を取つたりする、

折角釣れかけた我は、此難に遭ふていつも止さねばならぬ運命に陥るのだ、

我が行くど屹と来る、蘆の蔭から、鯨釣の竿が見えると、我はがつかりする、兄弟は又得意に成つて釣る、其内彼の針が、此浮標へからまつたどやらで、喧嘩をする、取組合ふ、組んだ儘川へ落ちる、落ちたついでに喧嘩を止めて泳出す、如何も實に困つて仕まふ、呵つても止めればこそ、頼んでも聽かばこそ、

其八 海中の神女

書家に注文の仕たいのは、江の島の龍窟の前の海中の岩、それが怒濤を頭から冠つて忽ち海底に沈んだ、と見る間に、荒浪が開いて再び岩ヶ根が現する時、雪より白い汐水が鐵色の岩の頂上から瀧の様に落ちる、そして全く岩が、紫に藍の勝つた様な色の浪の上に浮上つた時に、先きに冠せた浪が岩の頂に残して行つたものか、何んとも言へぬ美しい白衣婦人の、黒髪を亂しながら横はつて居る、それを又彼の白浪が押冠せて、持去らふか、残して行かうか、といふ、此所を、其心で、書いて貰ひたう、

其九 鬱蟲

がちや、は喧ましいとて、飼ふて呉れるなど隣の家から苦情が来た、隣の別荘へ来た旦那には、内の父さんが愛顧になるから、仕方がないけれど、飼ひたいな、飼ひたいな、我は二三年すると奉公に出るのだが、隣の別荘の旦那といふのは、二三年も居るのであらうか、左うすると最う我はがちや、を飼ふ事が出来ぬ、我が奉公に行つては最う、仕方がない、我が行かぬ内に旦那は東京へ歸らぬか知らん、つまらない、嗚呼、飼ひたいな、

其十 花婿角力

ア、又来たな、我が嫁を娶つたといふて、友達供がひやかしに來居る、口で言はれるのは平氣だが、女房持に成つたから力が抜けたらう、などと、立ちかはり、入かはり、同じ攻撃で、果ては誰でも彼でも、如何だ一番角力を取つて見ぬか、力量をためして見るなどと皆言ひ居る、これは言合して、一人々々交代に來るやうに成つちよるだらう、我も不負魂ぢや、我慢して今日で九日目までは取組んだが、ア、又来たな今日は誰ぢや、いや、如何も強い奴が來居つた、嬬、膏藥を要意しておけ、

妙義山之月

三日坊

別を天外に求むれば、蜀山の雲終に隔たり、魂を地下に尋ぬれば、巴陵の水轉た流れて留まらず、鳥部山の烟り、仇志野の露、孰れか涙の種ならざらん、五蓋の空を悟り、三界の火宅を出て、九品の淨刹に生ると雖ども、尙暮山の雪に悲しむ、渺茫たる大洋の一孤島、セントヘレナの月に嘯きて、囚夜を絞りしナポレオンは、如何に人生を觀せしか、峨々たるアルプスの嶮を越へて、燦爛たる羅馬を粉碎したるハニバルの末路は、憐れむべき所なきか、赤壁に仙を求めて得ず、曹操を地下に吊ふて悲歌せしの東坡は、果して如何なる感を有せしや、髮を被りて、澤畔に吟じ、汨羅の淵に沈みしの屈原は、舉世混濁せりと叫ひしにあらすや、然れども其彼等の不遇を歎せしは、彼等の逆流に立ちし時のみ、長いに不遇の者にあらずして、死して後人に吊はれ、名を後世に傳いたるなり、之を要するに、其白骨野外に曝されて、虎狼の食とならば、其英雄たるや否や、小人たるや否や、得て知るべからざるなり、

唯た其兀坐せる三尺の墓碑に、英雄と刻まれ、小人と書せらるゝの別あるのみ、嗚呼墓碑は英雄の花冠にして、小人の訓誡なり、天の裁決は墓碑に刻める文字にして、人は墓碑となつて始めて、是非定まる、見よ、忠臣孝子の花冠たる墓碑を見よ、風に櫛つり、雨に沐して、青苔永く之を掩ふと雖ども、其古を訴いて懐古慷慨の涙を灑かしむるに非すや、湊川の水益々緑に、高輪の月愈々高く、不嶽の麓、香花永く紅にして、飯盛山一縷の烟り、秋風に伴ふて、斷又續、然れども不幸にして、世人の知る所とならず、古塚空しく斷蓬枯艸の間に埋もれ、悲風慘憺の裡に葬らるゝ者、是れ豈に最極の不幸に非らずや、已に吊はれし者、果して是乎、吊はれざる者、果して非歟、又其之を吊ふの價値なしと爲すに依る乎、將た其吊ふべきを知らざるに依る乎、嗚呼不祀の鬼と爲つて、蓬蒿狼籍の間、地上に冥たる能はざる者、夫れ果して之を吊ふの要なしと爲す乎、若し之を吊はんと欲せば、上野國北甘樂郡、下仁田村に至れ、寂寞たる小阜の傍、蕭瑟なる草莽の間、翠苔を以て半ば蝕みたる一塔に

水藩武田氏一手野村丑之助墓

元治元年十一月十六日行年十三歳

而して其右側に大書して

報國の爲めに戦死す

と彫めるを見ん

衰々として流れ盡きざる徳川の末世、外艦の來航と共に、世は麻の如く亂れぬ、醉春隋眠を貪りしの幕府は、蒼茫として夢を破れり、拱手詩歌に耽りしの公卿は、黯淡として爲す處を知らず、國家は累卵の危きに逼れり、安危は一髪の間懸れり、而して勤王攘夷の説は、水藩を馳つて叫はしめたり、諸藩は城壁を修め、刀槍を磨せり、志士は劔を杖つきて、起てり、婦女は刀鎧を拭ふに遑なし、渠は實に滔々たる此の亂世に生長せり、嗚呼蕩漾として浮萍の如く、飄漂として歸する處なき時勢は、渠れを生んで而して渠を殺せり、秀て、は不二の嶽となり、巍々として千秋に聳え、注へては大瀛の水となり、洋々として八州を環り、發しては萬朶の櫻となり、衆芳

與に儔ふし難く、凝ては百鍊の鐵と爲り、銳利蓋を斷つべきの大和魂は、祖先より傳はりしものなり、而して其、崖山の沃血乘輿を流し、禮樂衣冠地を拂ふて虚し、却つて怪しむ文章經學の士、年來畢竟何の書を讀むとの、武士氣質は其師耕雲齋武田氏より教いられたり、而して彼れは皎々たる劔戟の間、鏘々たる鎧聲の裡に生長したり、彼れは慈母の膝下に戯れつ、日本刀一たひ揮ふて、元師十萬を、西海に殲したるの壯談を聞くを無上の快樂としたりしなり、而して又寶刀染め難し洋夷の血とは彼の心肝に感銘したる文字なりしなり、已にして櫻田門外の雪は變じて、紅葉となりぬ、生麥の野草は、外人の血痕を止めぬ、勤王佐幕の論は、名藩の間に紛々たり、正大氣を歌ふて、遙かに文天洋と相應せし、東湖は死せり、東湖は渠が心の師たりしなり、氣骨稜々たる烈公は此世を去れり、烈公は渠れが不識の君たりしなり、勤王の士多くは斷頭塲裡の露と消え、小塚ヶ原の烟りと爲りぬ、西に當りて長州は慘憺たる陣雲に蔽はれ、關東に於ては浙瀝たる妖氛常陸の厚野に横れり、水藩勤王の士、起つて波山に集まり、武田、藤田、田丸等の諸士は、之が領袖たり、而

して渠れの父も亦彼を携ひて、波山に行けり、母は体骨未だ定まらざる、此の可憐の少年をして、修羅の卷に徘徊せしむるを欲せず、慈愛の涙を以て彼の袂を曳けり、實に丑之助の母は渠れの不幸を歎じ、萬斛の血涙を流して、彼れの從軍を止めんとしたりき、然れども丑之助は、堰き來る涙を呑んで、國の爲めに死するは、男子の本領なりとの、一言を以て袂を拂ひり、嗚呼慈母と生別したりし、渠れの心腸は果して如何なりしか、

父は波山の陣中に在りて、剛氣絶倫、健闘人を驚かせり、一日山下に戦ひ、不幸にして重傷を負ひ、自から其の生き難さを知り、丑之助を喚んで曰く、我今や敵刃に斃れんとす、又再び起つ能はず、我が起つ能はざるは敢て悲しむに足らず、否寧ろ我が本懐とする所なり、然れども醜虜外に覬覦し、佞邪内に横行す、内憂外患交起つて、幕府處する所を知らず、皇威日に衰ひて白日昏らし、汝幸ひに生を男子に享く、齒未だ十三歳に過ぎずと雖ども、小楠公の十一歳にして、櫻井の驛に訣別したりしを思はば、一日の安を偷むなく、我志を繼ぎて、身を國家の犠牲に供せよと、

彼れは端然、涙を揮ふて答えて曰く、乞ふ意を勞する勿れ、我れは父の子なり、焉んろ優從爲すなく、父祖の清名を汚かさん、骨肉未だ固からずと雖ども、我心腸は鐵石より固たし、不肖にして魯愚短才なりと雖ども、聊か君恩に報するの義たるを知る、然れども靜かに藥石を服さは、必らずしも恢復の期なきにあらず、願はくは心を空しくして、徐ろに療養を取れと、渠れは實に血涙を呑んで、渠の決意を示し、父を慰めんとしたりき、父は之の勇ましき殊勝なる言を聞き、苦痛を忍ひ身を起して、彼の背を撫し、蒼白き顔に笑を含みて、眞に爾は我兒たるに耻ぢずと、言終り父は溘然として逝けり、嗚呼曩には慈悲深かりし母と生別し茲には嚴正なる父と死別せり、彼は實に皇天后土の知るあるのみ、廣漠たる天地間、眇たる一粒の孤となれり、東西南北悉く他人を以て圍まれたり、煽々たる秋風は、彼れの心膽を寒からしめ、嘹唳たる姜笛は彼れの肝腸を亂たせり、然れども皎々たる劍戟の光、鏘々たる鎧冑の磨聲は、彼れか鐵腸を固からしめ、山よりも重き君の厚恩と、海よりも深き父の遺訓とは、彼をして蹶然起つ所あらしめたり、嗚呼江上の明月黒雲之を掩ひ、

園中の紅芬、東風之を散ず、彼れも亦未だ開かずして、脆くも夜半の嵐に散れり、無情なる天は、此可憐の少年をして果敢なくも、馬蹄の塵と化せしめたり、天地の正大氣、粹然鐘まりし波山の一隊は、西の方京師に至り、九重の闕下に伏して訴る所あらんと欲し重圍を脱して、路を木曾に取れり、漸く千辛萬艱を侵して中仙道新町驛より下仁田村に入れり、時は維れ元治元年十一月十五日の夜なりしなり、妙義山は明月を吐へて、香雲の外に峙ち、鑄川は亭々として、碧流暗し、綠衣落盡きて、枯木秋風に鳴く、秋風高ふして胡馬月に嘶く、猿叫溪流と和して征夫の腸を絶ち、鹿鳴呦々として奏女の袂を濕はす、夜更ふして月益々高く、月高ふして流れ愈々澄みぬ、萬籟寂として人は戸を閉さして寝りに就けり、風は地を拂ふて、草木は鳴を止めぬ、正に是れ枯華微笑して禪を尋ぬるの時なり、劍戟の聲、甲冑の響は、鏘然として靜を破つて起りぬ、馬蹄の響、叫喚の聲は、暗を突て人の寝りを驚かしぬ、咄何等の驚事う、斥候は叫べり曰く、敵は高崎藩兵に援を求めて、來り襲はんとすと、一隊は鶴翼の陣を列ねて、敵の來れるを待てり、

既にして敵は來りぬ、驚潮風に駕するの勢を以て、襲撃し來りぬ、刀槍は閃めきぬ、耿々憐々として、石火の如く閃きぬ、呐喊の聲は天を突ひて轟然、砲彈の響は地を開きて爆然、血は川を爲し、屍は山を造りぬ、此壯觀活劇の間、此の可憐の少年は如何にせしや、此の薄命なる丑之助の生死は如何、渠れは敵の襲來を聞き、席隅より進み、主將武田等に請ふて曰く、弱少なりと雖ども、齒正に十有三、又一臂を揮ふに足る、冀はくば防戰の陣頭に加はるを得んと、武田氏之を慰諭して曰く、已に父を波山に殺す、今又茲に汝を失ふに忍びんや、藩軍固より恐るるに足らず、汝又意を勞す勿れと、諸士も亦強て之を制す、是に於て乎、渠已を得ずして退き、沈思久ふして忽ち決する處あり、單身三尺の秋水を揮ふて敵に向ひ、長蛇の如き敵の陣中に切り入れり、嗚呼渠れ丑之助は實に死を決したるなり、死して父の遺訓を全せんと試みたりしなり、一死は以て報國の良策なりと考へしなり、故に渠れは主將の命を奉せず、先輩の制を容れずして進めり、彼れは自ら進んで身を水火の中に投じたるなり、吁丑之助は如斯にして妙義山の月下に露と消えたり、

噫徒らに其人物を論する勿れ、又猥りに其死の是非を辨する勿れ、其齒未だ二七に足らずして、父母と訣別し、單獨の孤と爲りて、孤影孳々、彈雨の間に奔走して、死を見る歸するか如き者、滔々たる天下果して幾人かある、況んや乳臭黄口の少年輩に於てをや

妙義山半輪の月、鑄川一筆の流れ、蒼穹を摩して、長に彼を吊す、杜鵑空しく血を吐えて、彼の薄命を訴ひ、朝霧不斷の香を焼へて、不幸の彼を慰む、風雨青苔を摩して、緑濕え紅沈む、希はくは檜花一枝、茶毘一片、彼をして永く不祀の鬼たらしむる勿れ



鏡影 (押韻)

(一) 今ぞ我手に

くろがねの
くだきても
ぬかるみの
ひたしても
わが戀は
かはらざる
わが戀は
けがれざる
世の義理に
その槌の

鐵幹

小槌のしたに
珊瑚はあかし
野澤の水に
はちすは白し
珊瑚のあかく
きよきにはひか
はちすの白く
たかきなさけか
打たれしことは
しげきといづれ

人言に
その水の
さればとて
よのつねの
はちす葉の
われに骨
わかものに
荒岩を
わかものゝ
旋風を
西にゆき
劍に泣き
いろくの

けがれしことは
ふかきといづれ
泣きてやまは
男なりけり
世に抜け出でし
われに才あり
はやる血潮は
しのぎて走り
怒るはのほは
追ひて狂へり
ひがしにめぐり
酒にのゝしり
涙のあとには

やぶれたる
世の中を
さばかりの
年ふれば
ひとむらの
うれしきや
珊瑚より
はちすより
あゝ君は
(二)うまさけ
霜にくだけし
わがくちびるは
瘦せしわが頬の

この袖にあり
思へばをかし
戀のみだれも
夕立すぎし
よろの浮雲
けふのうつゝに
すぐれし珠の
秀でし花の
今ぞわが手に
さゝん花の
色もなし
つめたきを

君がひたひに
 ゆふべの磯の
 おちてすすしき
 けだかき君が
 あゝいくとせか
 君がやさしき
 こぼれてあつき
 わがおどろへし
 にほひてきよき
 あはれうれしや
 酔ひては人の
 あはれうれしや
 のりては神の

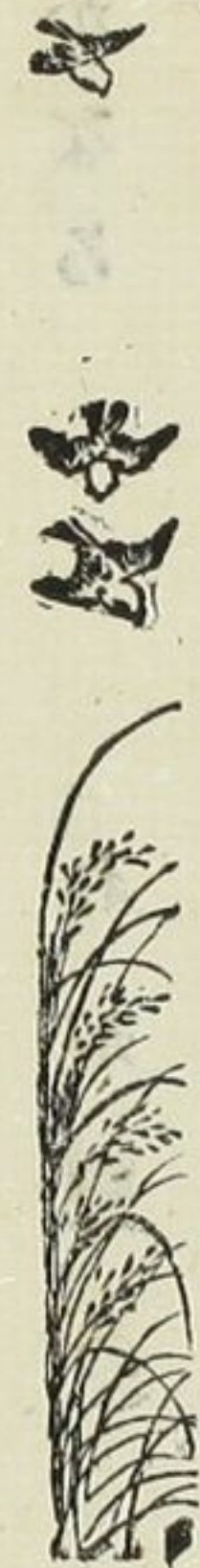
ゆるせかし
 新潮に
 天つ星
 まなざしに
 あくがれし
 てのひらに
 わがなみだ
 むないたに
 君がはだ
 うまぎけに
 うたふごと
 あをぐもに
 あそぶごと

春のどかなる
 花のにはひの
 秋おもしろき
 月のひかりの
 あゝわきもこよ
 戀にみだれし
 君が手にとる
 なさけの絲に
 あゝわきもこよ
 戀にくるひし
 君が胸なる
 おもひの琴に
 虎ふすやまを

わが戀の
 あさぼらけ
 わが戀の
 ゆふまぐれ
 けふよりは
 旅の袖
 ひとすぢの
 つながばや
 けふよりは
 歌の笛
 七つ緒の
 しらべばや
 雪に越え

鰐すむ海を
 あらくを、しき
 さぐるも君と
 蘭をばかざし
 月をばさ、げ
 きよくめでたき
 さぐるも君と
 ふたりしてのむ
 たのしき影ぞ
 あ、ただ胸の
 わがよろこびの

夜わたり
 あめつちを
 いざふたり
 菊を摘み
 珠をと
 あめつちを
 いざふたり
 さかづきに
 ゆらぐなる
 さわがれて
 歌もみだる、



湘南雜興

臨風

湘の南、大磯の地たる甚だ俗、山の觀るべきものなく、水の賞すべきなし、唯其都門に近きと地の便を得たると、松本某の誇大なる海水浴功驗説には此地をして繁榮せしめ、頗る俗化せしめ、政治家の一時遁れの場所とせしめ、一晚泊の遊び所となさしめぬ、故に海に山に浴氣紛々として旅館軒を列らね、鳴立澤も絃歌聲裡に何の寂しさもなし、

虎少將の艶名を傳へ、化粧阪、花水橋にゆかしき香をとゞめ、鳴立澤は西行に依て秋のあはれを歌はれたるも大磯の地たる史に其關係する處甚だ乏し、固より鎌倉に比すべくもあらず、三浦半島、豆州の地が鎌倉時代の史料に富みたるが如くならず、且夫れ此地燥泉の浴するなし、函嶺の勝熱海の奇之を求めて獲ず、大磯の地終に何の取る所か之れあらん、
 臨風は性素疎懶、然も誤て恠庵に風流才子の如く傳へらる、机上、一箇のユスマチツ

クは化粧道具の完備として吹聴せられ、座右の偶整ひたるは室内の華美として誇稱せらる、新橋通の如きは我も亦其何の意たるを知らず、而して臨風圍碁を解せず、將碁を知らず、花骨牌の如き嘗て手に觸れたることなし、頗る温泉遊の資格に缺く、嘗て嶺雲と函嶺に在り、終日飽食醉歌するのみ、嘗て嘲風と葉山に在り、吟箚若くは讀書を事とせるのみ、我れ終に湯治の御客たる能はざるか、而して臨風頗る山水の間に閑遊するを好み、湯治の如き特に之を喜ぶ、此を以て函嶺を愛し、熱海を愛し、牛臥を愛す、然れども遂に大磯を喜ぶ能はざりしなり、居常匆匆経過し未だ嘗て此に閑遊を試みたることなし、

我の大磯を視るや斯くの如し、而して歳の暮よりして春に至る凡る二週の日子を此に過して昭代太平の民たるを樂む、是豈一奇ならずとせんや、大磯の山水我意に適したるものあるか、否なり、人我に適したるか、居我に適したるか、我は唯熱海の雜沓を恐れ、函嶺の嵐氣を思ひ、駿南の僻遠に避易し、遂に凡山水裡に擊壤鼓腹したるぬ、豈敢て平凡山水に執着せんや、况や化粧坂花水橋に於て何をか索め得ん、

天海鬼をして三陸を簸揚せしめ、人と財と家とを擧げて浪の裡に葬らしめぬ、細民飢に泣き、孤兒路頭に迷ふ、何ぞ湘南の地別莊蕘を列ぬるものを洗て彼等紳商富豪の胆をして寒からしめざる、大磯の東松青く沙白きの處富豪其地に私するもの多く、其甚しきに至ては御料山水の拜借地に標して所有の字を用ゐ、某家執事と特筆するもの少からず、由來富むものは愈富み、貧しきものは愈貧し、我れ終に天の無私なるものを疑はずんばならず、

歳の元旦天麗にして氣朗なり、出で、海畔に逍遙し波濤聲あるの岩頭に立て遙に芙蓉八朶の峯に瑞氣の靄々たるあるを望み、意氣昂然たるものあり、偶海濱空船の間に人の群がるあるを見、之を偷視して其賭博をなすを知る、嗚呼彼輩漁夫の徒其遊樂となす道は又此袁彥道か、我れ何ぞ深く彼等を咎むるを要せん、身は上流社會に在て公々然賭博をなすもの天下何ぞ多き、然も警察なるものは獨り彼小民を羅し、之を刑して然も彼の上流の徒に及ばざるなり、嗚呼豈獨り賭博のみならんや、彼風紀矯正を目的となす警八風なるものは淺草赤坂の酪酒店に吹き荒むと雖未だ曾て新橋の待

合を警戒したることを聞かず、由來法なるものは獨り細民を糺すに止れるか、
 大晦日の午後夫妻相携へて我旅館に投じたるものあり、翌朝平然として相携へて東
 に歸る、洵に是れ債鬼を避けたるものならん、大磯の便實に此に存するか、嗚呼豈
 獨り債鬼避けのみならんや、堂々たる政治家と稱する輩責任を此に避くるもの亦少
 からざるに非ずや、

大磯に在て文を艸せんとして一句を成さず、筆を採て重きこと鼎の如し、歸て囊底
 に一物を齎らさず、我は唯太平を謳歌し、二週の間善く酣眠し得たるのみ、

白砂青松 終

明治三十二年六月三十日印刷
 明治三十二年七月二日發行

正價金三拾錢

編輯者 高松正道

發行者 岩崎鐵次郎
 東京神田區堅大工町五番地

印刷者 長谷川辰二郎
 東京神田區錦町三丁目一番地

印刷所 同志社印刷所
 東京神田區錦町三丁目一番地

東京神田區堅大工町五番地



發兌元

大學館

文學士〇高等師範學校講師宮本正貫君序 岩崎鐵次郎編纂

必携文助字用法詳解

全一冊 〇正價 金十五錢 〇郵稅 金四錢

本書ハ也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、幾、蓋、夫、抑、則、乃、即、輒、便、猶、尚、仍、等、助字數百ヲ集メ之ヲ決定辭(也矣ノ類)、怪疑辭(乎哉ノ類)、發問辭(誰孰ノ類)、願望辭、禁止辭、命令辭、被令辭、分別辭、形狀辭、想像辭、發端辭、歎息辭、指示辭、接續辭、推致辭、關係辭、反動辭、假設辭、動作辭、時刻辭、併列辭、分量辭、比較辭、反對辭、發着辭、二十五章ニ類別シ以テ各字ノ意義、用法、區別、實例等ヲ詳説セリ

速成和文漢譯秘訣

全一冊 正價 金十五錢 郵稅 金四錢

和語ヲ漢語ノ語勢ニ變更スル練習法ヨリ復文十數例ヲ舉テ實字虛字助字ノ用法及語句ノ轉倒配置ヲ一字一字詳説シ又譯文ノ異同ヲ識別シ譯文ノ運用變化ヲ會得セシムル爲メ同一文ヲ數種ニ漢譯シタル名家ノ和文漢譯例ヲ示ス又譯文論評編ニハ譯文ノ方法秘訣ヲ詳説セリ

秘書法習字速成圖解

全一冊 正價 金十五錢 郵稅 金四錢

本書ハ永字八法●草字筆法●一文字五形修練術●忍返シ筆法●執筆法等ヲ總テ圖ヲ以テ詳説シ其他●執筆、運筆、姿勢、習識、四修、習情、文字之懷、筆勢、筆拍子、去頑、黑色、生字死字病字等ノ秘訣●魏太祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等ノ書法極意ヨリレバ期月ノ間ニ妙筆人ヲ驚スニ至ラン

名家文庫 美文清風明月

故勝海舟伯 釋宗演師 渡邊國武 陸羯南君
德富蘇峯君 三宅雪嶺君 中西牛郎君 幸田露伴君
原抱一君 志賀重昂君 依田學海君 土井晚翠君
笹川臨風君 與謝野鐵幹君 田岡嶺雪君 內村鑑三君
武島羽衣君 白河鯉洋君 中村秋香君 大和田建樹君
西村天囚君 樋口一葉女史 鈴木天桂君 森江兆民君
正岡規君 高濱虛子君 大野洒竹君 戶川殘花君
柴四郎君 箕浦勝人君 其他文豪數氏
書を讀み文を弄するもの其行方なるへし、其品性正ならざるへからず、然るに現時此等の輩好んで田夫野人卑猥、蕃行、の風を摸倣するもの何んぞ夫れ多きや。猛夏長日四季中の最苦境を脱せんとする是れ人の情也、然れども其方法の年々歳々穢腐し、今や社會の半面は蕃行の暗黒界たり、識者の以て黙々に付すべからざるを如何せん本館此に着眼するあり、當代の君子、文豪が積意の傑作を蒐集し聊か社會風教の上

發行所 東京大田區五反田 大學生會館

文韻 花天月地

全一冊 七月十日發兌
紙數 二百八十五頁
正價 金四拾五錢
郵稅 金四

春の月	島崎藤村	春の夜	大松	柳の糸	河井	花すみれ	太田	はなれ駒	佐々木	離れ小島	島崎	この夕	佐々木	此の夕	土井	蛙の聲	國木	秋の蝶	鹽井	ひしの音	天	朝風のくれに	宮崎	戀の雑吟	武島	夕月夜	田山	別離	河井
遼東の春	與謝野鐵幹	春の夕暮	大町	桃の宿	宮崎	望の床	太田	潮音	島崎	夏之夜	島崎	水うり	蛙が星	わが鹿	妻どう鹿	盆祭	盆祭	さよ時雨	鹽井	みづほのや	冬之夜	與謝野鐵幹	冬之夜	羽衣	冬之夜	孤蝶	花袋	醉茗	河井
山影	武島	山の家	大町	花に嵐	宮崎	舞子の濱	太田	緑の蔭	島崎	里の夕	廣瀬川	秋風の歌	朝がは	魂まつり	武島	冬之夜	與謝野鐵幹	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜
残雪	武島	山影	大町	山の家	宮崎	花に嵐	太田	緑の蔭	島崎	里の夕	廣瀬川	秋風の歌	朝がは	魂まつり	武島	冬之夜	與謝野鐵幹	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜
山影	武島	山の家	大町	花に嵐	宮崎	舞子の濱	太田	緑の蔭	島崎	里の夕	廣瀬川	秋風の歌	朝がは	魂まつり	武島	冬之夜	與謝野鐵幹	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜	冬之夜

雜

四季	竹の里人	山からにて	武島	わが友	國木	母を葬る歌	島崎	山中の石	與謝野	はてなき海	國木	淡路少女	大和田	梅花鶴瘦堂に題す	與謝野鐵幹
籠鳥の感	土井	中野逍遙を憶ひて	佐々木	母の遺骸に向て	與謝野	墓	田山	やぶれ	鹽井	漁翁の娘	大野	題圖	與謝野	與謝野鐵幹	
籠鳥の感	土井	中野逍遙を憶ひて	佐々木	母の遺骸に向て	與謝野	墓	田山	やぶれ	鹽井	漁翁の娘	大野	題圖	與謝野	與謝野鐵幹	
籠鳥の感	土井	中野逍遙を憶ひて	佐々木	母の遺骸に向て	與謝野	墓	田山	やぶれ	鹽井	漁翁の娘	大野	題圖	與謝野	與謝野鐵幹	

附 録

新体詩に就きて ●新体詩の近況 ●新体詩人會 ●竹の里人 ●新体詩界
 新体詩集「韻文花天月地」成る、收る所は皆當代有名の新体詩人の作にして其華を抜き其精を選びて之を集む、其數七十有余題。或は春の花下蝶に戯れ、或は夏の夕水邊涼を輕羅にはらませ或は秋夜明月の下淨几に倚りて心耳を澄ましめ、或は冬朝窓前六花の紛々を眺むるの思あらしめん當に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之れなり
 此暑期に際して朗吟一番夏の夕の部に至れ涼風一陣襲然として來り、炎熱忽ち消散身邊自ら仙裳たらん。天下の士俗塵を拂ひ暑熱を避けんと欲し、眼前青山の清にうたれ、足下白水の冷を覺えんと望むものは、請ふ本書發刊の日を俟つて速に之を緝け

發兌所

東京神田區堅大工町五番地

大學館

物理學 問題 答案集

代數學 問題 答案集

和漢洋金言集

全一冊 郵正 稅價 金二十五錢

全一冊 郵正 稅價 金二十五錢

全一冊 郵正 稅價 金二十五錢

六

東京城北中學校々長 今泉定介君序文

工學士 藤農之君序文

●日本歴史 新大學館撰問答

●萬國歴史 新大學館撰問答

●支那歴史 新大學館撰問答

●日本地理 新大學館撰問答

●萬國地理 新大學館撰問答

●地文 新大學館撰問答

●物理學 新大學館撰問答

●化學 新大學館撰問答

●博物學 新大學館撰問答

●生理學 新大學館撰問答

●算術論 新大學館撰問答

●教育學 新大學館撰問答

●附シ尤モ記憶上ノ便ヲ謀リタレバ教師ノ參考用學生ノ受驗用獨習用トシテ無比ノ良書也 ●紙類百十頁 ●爲替振込ハ神田淡路町局 郵券代用一割増

發兌所 東京神田區大工町五番地 大學館

ふた葉寄稿募集

ふた葉

第二卷第一號七月一日發行 ●每月一日必發行定價金六錢郵稅壹錢 ●十二冊前金郵稅共金七拾六錢 ●郵券代用一割増 ●小爲替順慶町局あて

ふた葉は月刊の文學雜誌にして關西唯一の青年機關たるを以て自任す欄を分つこころ吟花嘯月、山村水郭、天花一朵、春塘花塢、芳艸離離の五こす各欄みな全国各地に散在せる幾千投書家中、其粹をぬき其萃を競ふものにあらざるはあし希くは親愛ある青年秀才諸君大に兄等の玉什を寄せ以て「ふた葉」誌上に幾層の光彩をはなたしめられんをここに

文淵會會則及ふた葉見本は郵券七錢を送らるべし

大阪市東區南本町心齋橋筋角

發行所 金尾文淵堂書店

文淵會會員募集

七

實用英語

第壹號ヨリ每號取御注文ニ應ズ

第拾壹號七月一日發行 每月二回、一日、十五日、發行 每號紙數菊版形八十頁

活用自傑豪逸 實用會話 英文添削 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

英文會話 英文譯 博言博士

フランクリン

自叙傳詳解

●ロングマン 第四讀本註釋

●ナシヨナル 第四讀本註釋

●ユニオン 第四讀本註釋

●類語異同辨 書簡文練習

●慣用語句集 同語異品詞

●時と助動詞 應用英文典

●英字新聞研究 同音異字

●九號ヨリ左ノ註釋ヲ載ス

●ブツ シン グ

●ツ、ゼ、フロント註釋

●一冊八錢 ●六冊四拾五錢 ●

●十二冊八十四錢 ●廿四冊一

●圓五拾六錢 ●郵税一冊壹錢

●壹ケ年完成 ●初學

●正則假名付 ●初學 ●ナシヨナル第一讀本 ●讀方及新式譯解 ●スバルリンク ●第一讀本 ●發音詳解 ●各種の單語 ●日用單語 (イーストレイイキ) ●英習字圖解

發行所

東京市神田區堅

七

官